

Little Busters!

1

PRESENTED BY

清水マリコ

MARIKO SHIMIZU



# 僕らの チーム名

Our team name

ILLUSTRATION

ZEN

ORIGINAL WORK

Key



リトルバスターズ!  
Little Busters!

1 懂少の  
ナチュラル





# 僕らの +チーム名+ our team name

清水マリコ



ILLUSTRATION

ZEN

ORIGINAL WORK

Key

楽しかった。

だからずっと願っていた。

こんな日が、

これからもずっと續けばいいと……。







「流れ星？」

「そうかも——あ——また！」

見あげた空に、今度は理樹の目にもはつきりと、  
宵闇に消えていく白い星が見えた。

「今度流れたら、お祈りをしよう」  
胸の前で、小毬はそつと手を組んだ。

「思い出を取り戻せるように？」

「……ううん」

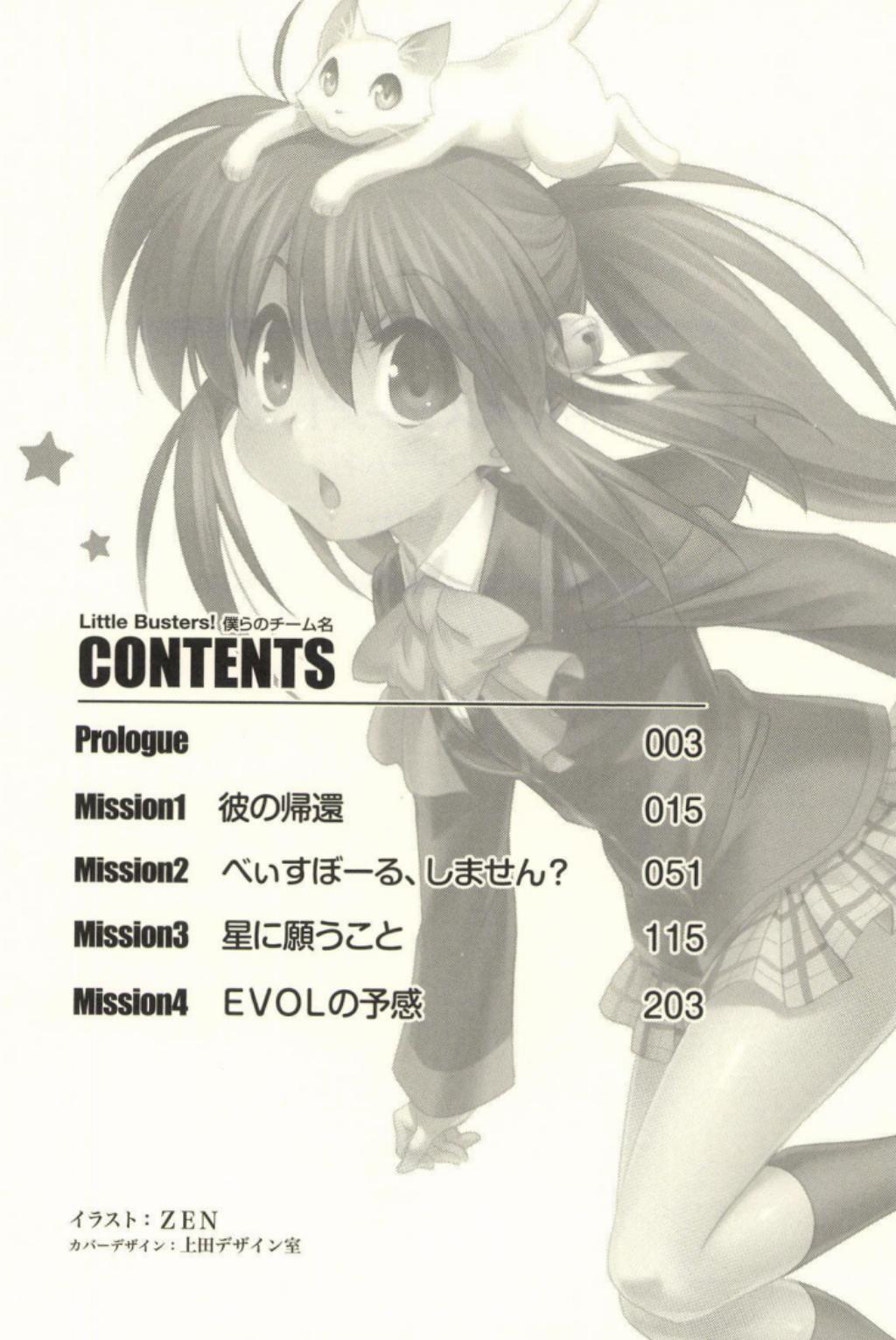
ほんのかすかに、だが、優しすぎるほど優しい角度で  
小毬は唇の端をもちあげた。

# リトルバスターズ！①

～僕らのチーム名～

清水マリコ





Little Busters! (僕らのチーム名)

# CONTENTS

---

<b>Prologue</b>	<b>003</b>
<b>Mission1 彼の帰還</b>	<b>015</b>
<b>Mission2 べいすぼーる、しません?</b>	<b>051</b>
<b>Mission3 星に願うこと</b>	<b>115</b>
<b>Mission4 EVOLの予感</b>	<b>203</b>

イラスト: ZEN

カバーデザイン: 上田デザイン室

# Prologue



見えてきた。

少しずつ、あの場所へ近づいてく。  
白い校舎と、グラウンドと、体育館。フエンスに沿つて植えられた緑の樹。  
学園の景色はどこも似ている。

だけど、ひとつひとつがその学園の生徒には——生徒だつた者には特別だ。  
日差しをうけて、あたり一帯がまぶしく見える。  
「懐かしいなあ……」

正門から見る建物に僕は早くも胸いっぱいだ。  
なじみ深い空気を吸い込むと、あの日々が、たちどころによみがえる。  
思い出に導かれるままに、僕は校内へと進んでいった。

休日のため、生徒の影はまばらだつた。

が、時折すれ違う制服姿に、僕の胸はきゅつと甘く締められる。私服の僕を、あれ?という  
目で見る生徒もいるが、胸の許可証を見つけると、すぐにそのまますれ違う。  
僕はグラウンドの前に来た。かつて僕——僕らはそこで遊んでいた。マウンドに立ち、あ  
るいはホームベースを踏んで、疲れたときには脇のベンチに座っていた。

——よし、いいぞ！

——こらー！ なにすんじゃつ！ ふかーつ！

——ふあいんぶれす。とれたよ。

——ふん、造作もない。内野くらい越えろ。

——うおりやあああああああーーつ!!  
そりやあああああああーーつ!!

めん！

野球だよ、と、回想なのに笑ってしまう。

そのくらい、賑やかな声が間近で聞こえて いるようだ。

僕らは全力で遊んでいた。全力で騒ぎ、楽しんでいた。

いまは誰もいない廊下を歩く。心のなかでばたばたと慌ただしい足音がする。

逃げるつ！

ええつ！？

——だって、捕まつたら大変だよ？

教されるわ……。

きみがイタズラばかりするからじゃないか。なんで僕まで一緒なんだよ。

大きなポンポンのついた髪、アニメみたいにくるくる変わる豊かな表情。僕は一人、思い出のなかではしゃぐ彼女に抵抗する。結局いつも巻き込まれたけど。

廊下の突き当たりの階段をあがつた。

踊り場から屋上へ通じる扉。ハンドルに手をかけると、意外にも鍵はかかっていない。重い金属の音とともに扉があいた。

「うわ、まぶし……」

ふりそそぐ光に目をほそめる。コンクリートの照り返しがまぶしい。足下からほのかに熱が伝わってくる。

もう少し早い季節だと、日も柔らかくて気持ちいいんだけどな。

——私、ここベストプレイス。

また声がする。

春の日差しよりもおだやかな、ほんわかした優しい声とほほえみ。

一緒に食べたお菓子の甘い香りが、いまも近くに感じられる。

——好きなところだから、ここに来るの。

なんとなく足を運んでしまう好きな場所。その空気を感じると落ち着く場所。

僕にとつて、そんなベストプレイスはどこだと答えたのだっけ。

フェンス際に立つて風を感じた。それからすぐ下の校内に目をやつた。  
ああ、あそこは。

穏やかで明るい屋上から、涼やかな木陰を求めて中庭へ。

そこはひときわ静かだつた。校舎と校舎に挟まれて、運動ができるほどの広さもなく、集まつておしゃべりをしたくなるほど明るくもない。

芝生と木だけの、ただの吹き抜け。ひとつそりとした目立たない場所。

でも、だから、ケヤキの下に腰をおろすと、誰にも見つかることのない、自分だけの隠れ家にいる気持ちになれる。

耳をすますと、静かに本のページをめくる音。

そして囁き。

日に晒された白い傘の下、そつとほほえむ儚げな唇。

——これはわたしの大切な本です。わたし、そのものが書いてある。そんなふうにさえ思える本なんです。

風が吹いたわけでもないのに、空気がすこしひんやりした。

——あなたは、それを知りたいですか？わたしを、知りたいと思うのですか？  
僕は……。

ピアノの音に呼ばれた気がした。

音楽室？いや、違う。校内のざわめきにまぎれるように、スピーカーから流れる音だ。  
僕は校舎の一角へ向かつた。茶色の厚い壁に囲われた、小箱のような放送室へ。

みつしりと重い扉をあけると、小さなボタンやレバーがたくさん並んだミキサーがある。中  
心にポツリとスタンドマイク。

狭いベースのまた片隅に、細長い布をかけられたものがある。電子ピアノだ。なぜここにあるのかも謎だという……あが僕をここへ呼んでいた。

また聞こえる。

初めて聞いたときから懐かしく思えた不思議な曲。だけど、聞いたことがある人はいない曲。

——私が作つた曲だからな。いまタイトルをつけた。

長い指をほつそりとした顎におき、深い色の瞳がすつときらめく。冗談なのか本気なのか、  
僕を惑わせる神秘的な瞳。

タイトルは、僕に捧げる綺想曲だ、という。

もつたいない。みんなに聴かせたいような……でも、教えたくないような……。

この学園に普通と少し違うところがあるとしたら、寮が併設されていることだ。

原則、学園の生徒たちはそこで共同生活をする。

僕にとつてもそこはたしかに「家」だった。

校内から、校舎と道ひとつ隔てたそこを眺める。

朝はおはよう、夕方にはまた明日。でも、夜中に誰かの部屋で謎の集会が行われることもめずらしくない。

——ぐつもーにんえぶりわんはぶあないすでいい一つ。

亜麻色の、優しく光る長い髪がふわふわ揺れる。白い帽子、白いマントに包まれた、独特の装いの小さな姿。

でも、いまは朝じやないし僕はひとりだよ。

つい苦笑したが、心のなかはさわやかに甘い。髪といい鮮やかな青い瞳といい、見た目はあきらかに異国のそれなのに、家に帰ってきたときのようにほつと安らぐ。

日本の、家庭的といえばそうなんだけど……。

——わふう。

子犬っぽい、というほうが当たつてゐるかな？

あたりはいつそう眩しく見えた。空気は熱を帯びていた。

ここにはなにもかもがあつた。

笑いも、怒りも、ときめきも、悲しみも……僕のすべてがここにあつた。

にやう。

細く甘い、胸をくすぐる気まぐれな声。

にやう……。

思い出じやない。たしかに、子猫の声がする。

声のするほうへ早足で向かつた。白い猫。そうだ、この猫は白いに違ひない。

校舎をつなぐ渡り廊下だ。いつも、あの片隅で遊んでいた。

「」

子猫の名前を呼ばうとした。あの場にたくさん集まつていた、名前だけは偉そうな猫たちのなかでも、とびきり可愛く、偉そうな子猫だつたつて。

でも。

そこにいたのは僕の知っているあの子じゃなかつた。後ろ足に白い長い足袋を穿いた、僕の知らない子猫だつた。

足袋の子猫は金色の目でぼくを見た。やあ、と僕は笑つて片手をあげる。

きみはいつからここにいるの？ ここは静かで、角のところに午後の日が集まるようにあたたかいよね。いつも、一人でここにいるの？

しゃがみこみ、子猫に手を差し出した。

足袋の子猫は僕の指を見て、とくに美味くもなさそうだと判断したのか、フイと顔をそむけて行つてしまつた。

「残念」

僕は声に出してつぶやいた。やはりたしかに時は流れている。白い子猫もおとなになつて、すでにここにはいないのだ。ひよつとしたら、いまの子猫が、その子どもかもしれないけれど……。

——ちりん。

はつとした。

これは思い出、それとも本当に鳴る音なのか？

ちりん。

涼しくて、甘いようでもすつきりと澄んだ響きの音。  
息を吸い、ゆつくりと吐き出した。

でも追わない。追いかけない。僕は待つのだ。思い出なら、この音はやがて消えていく。  
うでないなら。そ

ちりん……。

少しずつ、この音は近づいてくるはずだ。

思い出は、ゆうべ見た夢と似ている。

語ることはできても、そこに戻ることはできない。

時がすぎれば、自分のなかで、現実と区別がつかなくなつてしまふ。  
でも。

ちりん。

風が舞う。

思い出のなかで、僕はひとりじやない。



仲間がいた。

グラウンドに、教室に、屋上に、放送室に、中庭に、学生寮の前に……いたるところに彼らの影を見つけられる。

それは、たしかにあつたのだ。

この景色、この空気、この場所は、僕たちの楽園だつたのだ。

——ちりん。

だから。

きみの声を忘れない、涙も忘れない。

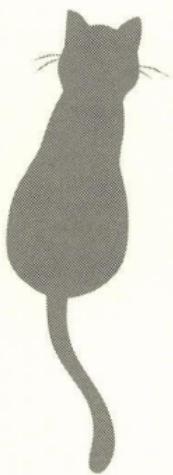
これから始まる。ここから始まる。

あの日からの、僕らの物語が。

Mission

1

彼の帰還



「きよーすけが帰ってきたぞーっ！」

遠くから叫び声がした。

闇のなかから、少しずつ意識が戻つてくる。

そつか……戻つたんだ。

理樹の思考はまだあいまいだ。いつどこから、誰が戻つてきた？ 僕はなぜ、どこで眠つていたんだろう。

「ついにこの時がやつてきたか……」

頭上で聞き慣れた声がした。静かな鬪志、という名の喜びを噛みしめる声。そして。

「ふんっ！」

気合い一発、どすん！ と下から振動が来た。

「……どこに行くのさ、こんな時間に」

ベッド上段に寝ていた真人が床に飛び降りていた。もう理樹にも状況がわかっている。

「戦いさ」

やけに渋い声がかえつてくる。戦いつて……でもこゝ、普通に寮内だよね？ まさか。

「待つて」

理樹はまだ目覚めきつていらない身体を起こしてベッドを降りる。真人は理樹を振り向かず、悠々と廊下へ出て行ってしまう。やばい。

「わっ！」

焦つた理樹はつまずいて逆に出遅れた。仮に追いついたとしても、小柄な理樹が趣味か主義かで鍛えまくつた筋肉バ k……いや剛力の真人を止められはしないのだが。

——ぐわしやあああん！

「ああー……」

案の定、ほどなくして机がひっくりかえる音。食堂かな。消灯時間は過ぎて いるのに夜の廊下が点灯し、野次馬がワラワラと顔を出して いた。

「すいません、ちょっと

理樹は生徒たちの隙間をぬつて食堂へ急ぐ。扉はすでにあいていた。なかにいるのは思つたとおり真人——井ノ原真人と、袴姿の宮沢謙吾みやざわけいごだ。

「どりやああ！」

真人が打つて出る。

「ハツ！」

謙吾がひらりと身をかわす。真人のように筋肉隆々といつた身体つきではないものの、同じくらいの長身で、剣道の達人でもある男だ。

「ふつ」

シュシュツ、と筆先を滑らせるように素早く謙吾が竹刀をふるう。

「どあつ！　おい！」

するとその切つ先が、真人の胸板を覆う服を十字に裂いた。

「おおおお！」

ギヤラリーがざわめく。秘技！　どうやつて竹刀で服を切り裂くのか、じつは思春期の鬱屈した性衝動を竹刀の先端に集め発射し……などのくだらない憶測が飛び交うなか、理樹はひとり、二人を止めようと必死に叫ぶ。

「ストップ、ストップ！」

しかし、二人は振り返りもしない。腕づくで止めるのは不可能だ。

どうしよう。困りはて、理樹は周囲を見回した。一人につられ、すっかり盛りあがっている野次馬たちは、とても当てになりそうもない。ならば……。

あ。

いた。

食堂の一  
角、熱い空気がそこだけ不思議に涼しい場所に。

「  
恭介つ！」

遠くから帰ってきた彼は、食堂の机に伏して寝ていた。

近づくと、恭介からは草や土のにおいがした。よく見るとそのまま服に土、髪やあちこちに枯葉がついている。どこまで行つて帰つて来たんだ。いや、いまはそれよりも。

「恭介、やばい、二人を止めて」

「ん！……」

理樹が肩を持つて揺すつても、恭介は眠そうな声をあげるだけ。

「止めないと、二人が怪我しちゃうよつ」

なまじ二人とも強いだけに、ガチで組み合つたら手加減できない。だから二人を止められる人間、つまり恭介がいないときに本気の喧嘩は禁止。それは、幼いころからこの仲間でのルールだつた。じつのところ恭介も、真人たちに比べずつと細身で、腕力だけなら一人のほうが上だつた。それでも、彼らはつねに恭介をリーダーとして、恭介の決めごとに従うのだ。

「恭介！ 恭介っ！」

「わかつた……わかつたよ……」

揺すられ続け、恭介はようやく身を起こした。よかつた、と理樹は胸を撫でおろす。恭介を慕い、彼についていくという点は、理樹も真人たちとまるで同じだ。

ふう、と息を吐いて前髪を揺らし、恭介はどこにあつたのかわからない野次馬たちの隙間をすりと抜ける。理樹もあとから慌てて続く。

「おまえら」

恭介はバトル中の二人の正面に立つた。

「止めるなよ恭介」

真人は握り拳の腕をゆさゆさした。

「おれは今日こそこのいつを叩きのめさねえと気がすまねえ」

「そこは同意だ」

謙吾も紺の和服の襟をくいつと正し、握る竹刀に力をこめる。

「どうか。わかつた。なら止めない」

「えつ」

そんな、と言いかける理樹を恭介はかるく手で制し、

「だが、そのままでは決着しない。素手の真人と竹刀の謙吾、どつちも相手に有利すぎる。だ

から」

いつのまにかしんとして成り行きを見ていた野次馬に向かい、恭介は声を張りあげた。

「おまえら、武器になりそうなものを投げてやつてくれないか」

——なに？

戸惑いの空気へさらに切り込み、

「それはくだらないものほどいい。真人と謙吾は、そのなかからつかみとつたもの、それを武器にして戦え」

くだらないからいまよりも危険は少ないだろう。野次馬も、間接的にバトルに参加できるからおもしろい。

「いいな？」

——おう!!

野次馬たちがいつせいに、手持ちのなにかを用意する気配。喧嘩けんかのはずが、いつのまにかわくわくする遊びに変わっていた。目だけ本気でにらみ合いながら、口もとは笑っている真人と謙吾。

「バトル、スタート！」

うおおおお!

お祭り騒ぎの開始のように、周囲からさまざまなもののが投げ込まれた。真人と謙吾は反射的に、

パツと手にしたものを作れだ!と掲げた。

「——け、拳銃!?

厳しい顔で、謙吾は天井に向けて引き金をひく。  
ぱん。

かわいく鋭い音がして、小さな玉がころころと転がる音がした。

「銀玉鉄砲……」

「これで殴つていいのか?」

「だめ。武器本来の使用法で戦うこと」

謙吾の問いを恭介はあつさり却下した。

いっぽう、真人はといえば。  
——にやーん。

「猫……」

白く柔らかそうな子猫がだらーんと伸びて真人の手に抱えられている。

「わりーかつ!? つーか、どーやつて戦えばいいんだよつ——」

真人の嘆きは顧みられず、無情にも誰かが持ち込んだゴングを鳴らす。カーン!  
しかし。

「こらああああーつ！」

怒濤の歎声をかき消すように、高く涼しく、ひときわよくとおる声が響いた。  
「おおおおお！」

「来たあーつ！」

一瞬の静寂から倍も熱くなる野次馬たち。おそらく、やつらは最初から、この登場をこそ待つていたのだ。

「鈴様だ！」

「われらが鈴様の登場だ！」

声を振り返ることもなく、まっすぐに、ちりん、と小さく鈴を鳴らして歩く少女がいる。そ  
う。少年のような目をしているけれど、彼女は——鈴は紛れもなく少女なのだ。

鈴は場の中心へ進み出た。

「弱いものいじめは、メッ、だ」

期待に静まりかえつたなかで、鈴は真人の手にする子猫を見た。ちりん、とリボン代わりに  
結んだ小さな金の鈴がまた揺れる。小柄で細身、ポニーテールの長い髪。<sup>なつめ</sup>意志を宿して輝く涼  
しい瞳。あの目が似てる、と理樹は何度目かわからない思いを抱く。棗鈴<sup>なつめ</sup>は、棗恭介の妹だ。

「誰がその子を投げてきたんだ」

「恭介だつたぞ」誰かが答える。

「じや、あたしのだつ」

鈴は子猫を真人の手からさつと奪うと、大事そうに抱えて撫でてやる。子猫はきょとんと目  
を開いたまま、にゃーん?と小さく鳴いた。

「ああオレの武器……誰か、オレに猫をくれつ、一番凶暴なのをだつ——ぐふつ!」

「猫を使うな

鈴の鋭い蹴り!

「あいゞ

真人は妙な方向に身体をよじりながら謎の声でうなづく。

謙吾はひとつため息をつき、銀玉鉄砲を放り投げてその場を去ろうとした。

「んだよつ、逃げんのかよてめえ！」

それを真人が呼び止める。

「鈴、猫だ猫を返せ！ それがオレの武器だつ！」

「そんなこと、あたしが許さない」

「なんだ……おまえがやるつてことか、鈴」

にらみ合う真人と鈴。周囲が祭り再開の予感にどよめく。

「てめえら、オレに武器をよこせつ！」

おおお、と真人の叫びとほとんど同時にさまざまなもののが投げ込まれた。

「これだつ！」

うちひとつを鈴がつかみ取る。

「うおお！ さ、三節棍？」

緊張が走った。それ、本気の格闘用の武器じやないか。

「オレはこいつだ！」

対する真人が手にしたものは、

「う——うなぎパイ……!?」

カーン！

無情のゴングが打ち鳴らされる。

翌朝。

「よつ、おはよう」

「おはよう」

「ああ、おはよう。おまえらにしては早いな」

理樹と真人が食堂へ行くと、謙吾がもういつもの席についていた。

昨夜は大バトル会場だった食堂は、朝にはすっかり平和な学生寮の一部に戻っている。  
「今日の朝飯は生玉子かー。いいぞ玉子は筋肉にいい」

「昨日の朝飯にも出ただろう……」

あんなにやりあつていた真人と謙吾も、今朝はもう普通の会話をしている。これはこれで、不思議な光景かもしれないな。と思いながら理樹も自分の席につく。朝食時はとくに混みあう食堂だが、理樹たち五人の仲間の席は、いつもなんとなく同じ場所にあけられ、理樹たちもなんとなく受け入れている。

「ういす

「おう」

少し遅れて恭介も食堂へ入ってきた。あいている恭介のための席につく。ふああ、とまだ眠そうにあくびをする恭介に、ふと思いつ出して理樹は尋ねた。

「そういえば、昨日はどこまで行つてたの？ やけに汚れて戻つてきたけど」

「出版社だ」

「出版社？ 東京の、だよね？」

みんなより一つ年上の恭介は、就職活動の最中だ。

「なんで東京の出版社であんなに」

遠方の面接で寮をあけることはあっても、あんな格好で戻つたことはなかつた。

「徒步で戻つてくる途中で迷つた」

「徒步で!?」

「金がないんだ。仕方ないだろう」

「あほだな……」

謙吾が静かに呆れていた。

「遠征が続けば金もつきるさ。おまえらも、来年は絶対こうなるからな  
「や……とりあえず、徒步で東京は行かないと思うよ……」

江戸時代の旅人じやないんだから。苦笑いしながら、理樹は少しだけせつなくなつた。  
来年かあ。来年は、僕らも就職活動をして……卒業したら、離ればなれなんだな。

それ以前に、恭介とは、次の春にはお別れなんだ。

「おはよう」

鈴が昨夜の猫を肩に乗せて入ってきた。

「新入りだ」

「知ってるよ」

鈴はいつもまわりに何匹も猫を連れている。怪我をしているのを助けたり、飼い主を見つけられなかつた捨て猫などがほとんどだが、どの猫もみんな鈴になつていて。きつとこの新入りとも仲良くなるだろう。

「ほら、飲め」

指にじやれる子猫に笑いかけ、鈴は手持ちの皿にミルクを注いで子猫に与えた。ミルクと同じくらい白い子猫は、一生懸命にミルクを舐めた。

「名前はつけたか？」

「まだ」

「大事だぞ。名前はちゃんとつけろよ」

「覚えきれない」

兄の意見に鈴は少々戸惑いぎみだ。そもそも、いつも猫たちを見つけては拾うのは恭介なのだ。途切れないとプレゼントに鈴もさすがに対処しきれず、いつも一番新しい猫だけを手もとに

おいて世話をしている。

「じゃ、仕方ない。俺がつけてやるか」というか、いつもそうしている。

「レノン」

「また適当に有名人の名前を」

これまで、猫はAIN・SCHUTZ・TAYLORやGEI・TSUなど、やたらデカい名をつけられていた。

「大事つていうわりに適当だな、おまえは」

「大事なのはどんな名前かじやない。名前をつけることが大事なんだ」

「わかんねー」

「でもまあ、かわいくはあるな」

鈴は真人と恭介の会話を流し、レノンとなつた子猫の鼻をつついた。

「——ところで、昨夜のケンカの理由はなんだつたの？」

朝食を終え、みんなで登校——といつても寮と学校は隣接しているから、渡り廊下を歩く  
くらいだが——する道すがら、理樹は真人に尋ねてみた。

「そんなに深刻なことじやないよね？」

「どうでもいい理由だと思うけど。

「……こいつがオレに『目からゴボウ』という嘘のことわざを教えたんだ」

真人が横目で謙吾をにらんだ。

「おかげで昨日、何気ない会話のなかで『そりや目からゴボウだな』って使つちまつた！」  
予想以上にどうでもいい理由だつた！

「馬鹿、おまえから訊いてきたんだろうが。目からゴボウってどういう意味だつて。おそらく  
目から鱗が落ちることだろうから、急に事態がはつきり理解できることだ、と答えたまでだ」  
「なら間違つてるつて先に言えよっ！ なんだよ目からゴボウって！」  
「ばかだなおまえは」

鈴の肩からレノンが真人に猫パンチを浴びせた！

「なにい！ うおお！」

猫を顔に乗せて転がる真人。あははは、とみんなでいつせいに笑う。  
朝の光がまぶしかつた。

「いまがずっと続ければいいのにな……。」

傍らで恭介がつぶやいた。はつとして理樹は振り返る。  
僕と同じこと、考へてる？

恭介は静かに笑つていた。





「——ん……」

ああ、まだ。深い闇のなかから戻ってきた感覚。

瞼だけじやなく、全身が重い。長かつたか？ それとも案外、短かつただろうか。  
まとわりつく眠気に苦しみながら、理樹はウツと全身に力を入れて、転んだ場所から立ちあ  
がる気持ちで目をあける。

「ふうつ……」

そこは、昼休みの教室だつた。真昼の白い日差しがつつむ明るい場所。よかつた、と理樹は  
安堵した。今度もちゃんと、戻つて来られた。

「どうした理樹。暗い顔して」

真人が声をかけてきた。

「なんでもない」

理樹は首を横に振る。

「筋肉の相談ならいつでも乗るぜ？」

「それについては一生悩まないから」

もう一度真人に笑いかけ、大丈夫だよ、と目で伝える。たぶん、軽い発作だと思うから。

「そうか」

真人はうなずく。もちろん、真人や仲間たちは知っている。ナルコレプシー。まるで意識を失うように、突然寝入ってしまう理樹の病気を。状況によつて問題はあるが、理樹の成績には影響していないためか、学校側は黙認している。理樹自身、やつかいだとは思つているが、付き合いが長いので慣れてもいる。

ただ……このごろの発作、とくに昼間起きるそれには違和感がある。

発作にしては浅いというか、目が覚めると夢を見ていた感覚がある。身体が重い。が、夢の中身は思い出せない。自分で夢を忘れているのか、それとも夢 자체錯覚なのか。

わからない。

「棗さん知らない？」

理樹と真人に女生徒が声をかけてきた。

「日直なのに、黒板、消してないんだよね」

しかし、今まで眠つてしまつていた理樹は、当然鈴の居場所も知らない。真人もかるく肩をすくめ、仕草で知らないと女生徒に答える。

「また猫と遊んでるんじゃない？」

べつの女生徒の声がした。皮肉な声だ。鈴をあまりよく思つていながら伝わつてくる。

「あ、じゃあ僕、ちょっと」

鈴を捜してくるとは言わず、理樹は席を立つて外へ出た。知らないが、鈴がいそうな場所な

らだいたいわかる。

渡り廊下の片隅の、広くないけれど明るい場所。  
——にやあ。

ほら、もう猫の鳴き声がする。小走りに向かうと、やつぱりいた。  
日だまりのなか、たくさんの猫と戯れる鈴。

「どうだ見ろ。この道六十五年の匠がこだわりにこだわった猫じやらしだ」  
制服でも構わず座り込み、まじめな顔で、ふわふわの猫じやらしを自慢している。

——にやあ？　にやあつ！

「わかるか……そ、うだろ、うそ、うだろ、う」

猫じやらしを揺らしてご満悦だ。放つておけばいつまでもそうして無邪気に遊ぶのだろう。  
理樹もつい口もとをほころばせる。できれば、そつと見守りたい……が。

〔鈴〕

声をかける。鈴は一瞬眼を丸くしたが、すぐにまた、猫たちとの遊びに戻ろうとする。

「鈴、だめだよ。日直なのに遊んでたら」「遊んでない。叱つてたんだ。ファーブルと、ヒトラーがケンカするから」「そりや穏やかじやないね。でも、それとこれとは別」

理樹は猫を追いかけようと鈴の腕をつかんだ。

「日直だつて言つただろ」

「どうでもいい」

「よくないよ。役目をちゃんと果たさないと、鈴、クラスで浮いちやうよ？」

「……」

いくらか頬を赤くして、鈴は唇をへの字に曲げた。

理樹は内心でため息をついた。正直、身内びいきを抜いても鈴の見た目はかなり可愛い女の子の部類に入るとと思う。中身のほうもさばさばした口調で容赦がなくて、それでいて猫と無邪氣に遊ぶ姿はあどけなく、鈴は男子にはとても人気だ。が、そのぶん女子の評価は厳しい。教室で、鈴が他の女子と会話しているのを滅多に見ない。

「悪いか」

「え？」

「友だちいなくて悪いか、おまえに迷惑かけてるかつ、それでおまえ、死ぬのかつ！」  
理樹の腕をパッと払いのける。

「死なないし、迷惑かかつてないし、悪くない。けど心配なんだよ、鈴のことが」

鈴は叱られた子どものようにへの字の唇をむぐむぐさせた。

「二年はたまたまみんな一緒のクラスになれたからいいけどさ……来年はどうかわからないし、  
その先だつて」

卒業して……就職して……みんなばらばらになつて、一人になつて。

「いまのままだと、ボーイフレンドも見つからないよ？」

「……しね、ばーか」

「え？」

「と、レノンが言つてる」

鈴は白い子猫の手を持つてペしペしと動かした。

「……」

そのまま子猫を抱いてうつむく。理樹は、この少女が極端に人見知りなだけで（男子に人気は嘘ではないが、鈴がまともに口をきく男は、兄の恭介のほかには真人、謙吾、理樹だけだ）、悪い子ではないことはよく知っている。もしも鈴が意地悪な子だつたら、猫たちはこんなにもなつくまい。いまだつて、鈴を慰め、励ますように、首をかしげて囁んでいる。

理樹はそれ以上はもう言わず、黙つて日だまりを立ち去つた。

結局、黒板は理樹が代わりに消した。

——また棗の世話やいてやつてんの。

——いいけど、あいつらも甘いよね。

背後の囁きが聞こえてきた。

理樹は、鈴に心配だと言ひながら、同じ言葉が自分にはねかえつてくるのを感じていた。

本音を言えれば僕だつて、あのころと変わらない人見知りだ。

\* \* \*

——強敵があらわれたんだ！ きみの力が必要なんだ！

——きみの名前は？

——なおえ、りき……。

——よし、行くぞ、りき！

力強く、幼い理樹の手をつかんだ手。頬もしい目、いたずらな笑顔の少年たち。

——きみたちは？

つられて一緒に走りながら、理樹は彼らに問いかける。

——おれたちか？

少年たちは振り返った。

——悪を成敗する正義の味方。

——人呼んで。

\* \* \*

放課後、理樹は真人と謙吾、それに鈴も誘つて一つ上の階の教室へ行つた。

恭介のクラスだ。上級生の教室へ行くのはいつも少しだけ緊張する。とはいえ、いま、みんなと一緒にここへ来たのは、心細いからではないけれど。

そつと廊下から中をのぞくと、教室内はやけにしんとしていた。生徒はまだ、何人も残つているはずなのに。

だけどその理由はすぐにわかつた。

窓際で、恭介が読書にふけつてゐる。

午後のやわらかい日差しを浴びて、前髪がきらきらと光つてゐる。

読書といつても讀んでいる本は漫画だし、恭介は難しい顔をするでもなく、どちらかといえば優しい顔で、わずかに笑みを浮かべてゐる。

でも、物語の世界に没入してゐる横顔は、幼い少年のように純粹で、無防備で、声をかけるのがはばかられるような、それでいて一緒に物語世界へ連れて行つてほしくなるような——一言でいえば、たいへん魅力的だつた。

よそのクラスの女生徒たちがわざわざ見に來るのもわかる。  
理樹たちもつい遠慮して、恭介がこちらへ気づくのを待つた。

「——おう」

やがて物語が一段落したのか、恭介は漫画の本を閉じ、いま気づいた様子でこちらへ来る。

同時に、放課後の教室はざわめきを取り戻した。

「どうした？ みんな揃つて」

「あ、うん——あのね」

理樹はみんなを集めたところで、広く風通しのいい場所へ移動した。

「なんだよ、理樹、改まつて」

グラウンド脇、緑の木の下に置かれたベンチに並び、真人がまず理樹に問いかけた。謙吾も、鈴も、恭介も、理樹の言葉に注目している。

「うん……その……昔みたいに、みんなでなにか出来ないかなつて」

理樹は少々照れながら、みんなに向けて提案した。

「なにかつて？」

「ほら、小学生のとき。なにかを悪に見立てて、近所を闊歩してたでしょ。みんなで」

——おれたちか？

——悪を成敗する正義の味方。

理樹の胸に、遠い日がよみがえる。

あのころ、理樹はふさいでいた。

両親をなくし、悲しみにうちひしがれていた。ただつらく、胸が痛む日々だつた。

そんな理樹に、手をさしのべてくれた仲間たち。

「おまえらと一緒にするな」

鈴は唇を尖らせるが、恭介のあとをくつついて、鈴も一緒になつて遊んでいた。理樹は最初、鈴を少しおとなしい男の子だと思つていた。

「なんで唐突に」

「ん……ほら、僕らつて、なんだかんだでいままでずっと一緒にここまで來たでしょう」  
あれから数年。

成長し、趣味や考えの違いはあれど、同じ歩調でここまで來た。振り向けば、いつもなじみの顔がそこにいた。

「でもさ。あと一年もすれば、僕たちも受験か、就職活動することになる」

「考えたくねーな、そんな先のこと」

真人は頭の後ろで手を組んだ。そうは言つても、そのときは確實にやつてくる。思うたび、理樹はせつなくなつていた。

「一緒だつたオレたちも、やがて散り散りになるかもな」

「少なくとも、恭介は、一足先に離れるんだな」

謙吾が恭介を横目で見た。

「そうだな……」

恭介はグラウンドに目をやつた。過ぎる時間を惜しむような目。やつぱり、僕と同じこと考  
えている。理樹はその目を追つて思つた。

「よし」

立ちあがり、恭介はベンチから数歩、前に出た。ふいに屈んでなにかを拾い、スピニをかけ  
て上に投げる。

「野球をしよう」

それはくすんだ白球だつた。グラウンドから転がってきたのだろうか。

「へ……」

「……は？」

怪訝な顔をする真人と謙吾。鈴は、さつきからずつと肩をすくめて黙つたままだ。

「野球だよ」

そんな仲間たちの様子に構わず、恭介は、もう一度ぱしつとボールを握る。

理樹たちに向き直り、にやりと笑う。

「野球チームを作るんだ」

ああ、あの目。子どものころから変わらない。とびきりの遊び、あるいはイタズラを思いつ  
いたときの恭介の目だ。理樹の心が高揚した。

「名前はどうするの」

名前をつけるのは大事だつて恭介は言つたよね。

理樹の期待に応えるように、恭介はうなずいてきつぱり言つた。  
「チーム名は……リトルバスターズだ」

\* \* \*

——悪を成敗する正義の味方。

——人呼んで。

——リトルバスターズさ。

敵は近所の軒下に出来た蜂の巣だつた。

少年たちは竹竿と殺虫剤を手に戦つたが、まつたく敵に歯がたたなかつた。それどころか、  
ずいぶん返り討ちにあつて苦しんだ。

警戒した蜂は黒い固まりになるほど集まり、不気味に羽音を響かせる。  
くじけかけたところで、真人がとつぜん服を脱ぎ（なぜ脱ぐ必要があつたのか、いまもつて

本人含め誰もわからない）、全身に蜂蜜を塗りたくり……。

——あとは頼んだぜ。

親指をたて、雄叫びとともに蜂の群れにつつこんでいったのだ。

当然、真人は無数の蜂に群がられ、黒い固まりを身に纏つたような状態になる。そこへ謙吾が殺虫スプレーを集中噴射し、

——まさと！ おまえのぎせいは忘れん！

恭介が、謙吾のスプレーの下からライターの火をかざす。

——うおおおおおおおー！ そんなことたのむかああああー！

燃えながらつっこみを入れる真人の姿は、いまも理樹の目に焼きついている。

が、むろんほんとうに焼きついてしまつてはたまらない。いまもだが、一番細く小さな鈴が、燃える真人に壯絶な蹴りを入れて一撃で倒すと、真人は地面をごろごろ転がり、勢いで火もおさまつた。

結局、消防車や救急車が出る騒ぎになつて、大人にはひどく怒られた。

が、翌日の地方新聞の片隅に、お手柄とお騒がせの両方で、四人の小学生男子（うち一人は真つ黒焦げ）と、カメラから逃げようとあがくのを兄に押さえられる鈴の写真が掲載された。

そうして、理樹はリトルバスターズの仲間になつた。

あれからずつと、お祭り騒ぎみたいな賑やかな日々のなかにいる。両親をなくした痛みもさみしきも、仲間といれば忘れられた。

楽しかつた。

だからずつと願つていた。

こんな日が、これからもずつと続けばいいと……。

\* \* \*

——で。

「ここは？」

「部室だ。野球部の」

「ずいぶんと、荒れているみたいだけど……」

恭介がチーム・リトルバスターズ結成を宣言した翌日の放課後。

理樹、恭介、真人の三人は、使われていない物置にしか見えない建物の前にいた。

「元はたしかに野球部の部室だつたそうだ。が、現在は活動休止中」

そこで掃除を条件に、休止のあいだ部室を使用する許可を取つたと恭介が説明した。遊びになると徹底する恭介の姿勢は相変わらずだ。

「でもさ……僕たち、三人で？」

「……」

昨日の恭介の宣言を受け、謙吾は恭介の意図にはうなずいたものの「だが俺は、俺自身であるために、みずから意志で剣を振つている」ときつぱり言つて去つてしまつた。

「まあ、謙吾は剣道に真剣だから、掛け持ちできないのはわかるけど」「なあに。いずれやつも理解してくれる」

「ていうか、オレもまつたく理解してないんだが」

真人もただ巻き込まれた以上の実感はないらしい。

「理樹は？」

恭介がまつすぐ理樹を見た。

「僕は……みんなと楽しめるなら」

もともと僕が言い出したことだし。

先に立ち、理樹は埃だらけの薄暗い物置のなかへ入つていつた。

「まず、大きな物だけでも外へ出して……つて、そういえば鈴は？」

「あいつなら逃げたぜ」

「え？ いつ？」

「ついさつき。『きよーすけのばかな暇つぶしに付き合うのはばかだ』ってさ」

「そんな……止めてよ真人」

「鈴がないと野球の人数が足りなくなるじゃないか！」

「いてもいなくとも足りねーだろうが！ それくらい、野球音痴なオレでもわかる！」

「そうか。なら、メンバー捜しが必要だな」

「メンバー捜し？」

「ああ。九人ないと、野球はできないからな」

「そつか。そうだね」

当たり前のことなのに、なにをいまさら納得しているんだ。理樹は自分が恥ずかしくなった。

「ということは、僕ら——仮に謙吾を入れても五人のほかに、あと四人、メンバーが必要なのか。

「人選は理樹にまかせるから」

恭介の言葉に理樹はのけぞつた。

「俺は就職活動で忙しい。真人にまかせてもいいが——」

「おお、いいぜ。とりあえず、筋肉勝負でオレに勝てるやつが条件だ」  
無理すぎる。

「……わかつた。僕がやるよ」

しかし、理樹も鈴ほどではないにせよ、人づきあいは苦手なほうだ。なのにこの状況で、よくわからない野球チームのメンバー勧誘。上手くやれるとは思えない。

だが、もともとは自分の望みのためだ。恭介もそれを望んでいる。

「じゃ、とりあえず鈴を捜してくる。真人、掃除はよろしくね」

「えつ!? オレが掃除すんの!?」

振り向かず、理樹は小走りにいつもの鈴の場所へ向かつた。

——と。

「どいてどいてどいてどいてーっ!!」

「わわわ!」

渡り廊下の入り口で、一陣の風?のような姿が理樹のすぐ脇を駆け抜ける。あわやぶつかりそうになり、理樹はよろけて一回転した。

「待ちなさい!」

続いて風を追う第二陣。転びかけた理樹をたくみにかわし、やはり高速で駆け去った。

「……なんだ?」

風の行く手を見やつたが、先に逃げていた女子はもう、揺れる髪と黄色のボンボンしか見えなかつた。光の加減で桃色がかつて見える不思議な髪。ボンボンを追うのも、なぜか、似た髪の色の女生徒だ。

あれはたしか……だが、いまはそちらを構つている場合ではない。  
渡り廊下の隅はもうすぐだ。

「……いた」

日だまりのなか、猫たちにかこまれ、いくらかスカートの裾を気にして座る鈴。  
声をかけたら、また逃げられるかな。

いきなり腕をつかんだりするのは趣味じやないけど……。

息をひそめ、理樹はそつと鈴に近づいた。

鈴は膝に猫をじやれさせながら、じつとなにかを見つめている。

「……？」

手紙、かな。なにかのメモの紙だろうか。

なかを見るのも良くないだろうと理樹が出方を決めあぐねていると、鈴のほうが先に理樹を見た。



「——やあ」

つて、しらじらしい挨拶だな。連れ戻しに来たと警戒される?

手をあげたまま理樹は焦つたが、鈴はまつたく気にしない様子で理樹を手招きした。

「なに?」

どうやらあのメモを見せたいらしい。鈴は理樹を肩がくつつくくらいの場所に座らせ、上目づかいにじつと見た。

「どうしたの」

「……さつき、レノンのしつぽに、これが結びつけられていた」  
メモには短いメツセージが書かれていた。

この世界には秘密がある。

それを知りたいなら、すべての課題をクリアせよ。

Mission  
2

べらかまーる、しません？



「世界の秘密……？」

世界つて、この世界のことだよね。

理樹は周囲を見渡した。どうみても、平凡な学園の風景だ。

たしかに、広く目を向ければ、世界には謎も秘密もいっぱいある。だけどそれって、課題をクリアすればわかるような種類のものだろうか。

「イタズラじゃない？」

理樹はごく常識的な感想を述べてみた。

「誰がこんなことをしたんだろう」

鈴は大まじめに考え込む。

「レノンのあとをこつそりつけられれば、送り主がわかるかもしれないね」

送り主は自分のメッセージが届いたかどうか、レノンを見つけて確かめるだろう。あるいは次のメッセージを用意して、レノンに託すかもしれない。

「……でも、それはなんか卑怯だな」

「卑怯つて？」

「もしそれで誰かわかつても、その人の伝えたいことはわからない」

なんのために、こんなメッセージを送るのか。あたしに、なにを言いたいのか。  
「それが知りたいの？」

「うん」

「えつ、もしかして『課題』にチャレンジする気？」

「うん」

「イタズラでも？」

「どうしてイタズラをしたのか知りたい」

「……そこまで言うなら止めないけど……」

極度の人見知りの反面、鈴は他人を疑わないというか、思いついたらまつすぐに飛び込んでいくようなところがある。決して短所ではないと理樹は思うが、誰かもわからない相手の課題に、一人で向かわせるのは心配だ。

「じゃあ、この件で鈴がなにかするときは教えて」

「わかった」

「で……『課題』ってなんだろう」

「これだと思う」

鈴はポケットからまたメモを出した。

「この前も、レノンのしつぽに結んであつた」

律儀にとつておいたのか。理樹は鈴からメモを受け取り広げてみた。

——封鎖された屋上を開放せよ。

「これが？」

鈴はこつくりとうなずいた。たしかに、メモの形状などからすると、同じ人物によるものらしい。

「屋上……屋上つて、ここで言われるなら校舎の屋上のことだろうな……」

日頃ほとんど行くこともないから、封鎖されているかどうかわからぬが。

「行つてみよう」

「そうだね——つて！ 待つて！」

理樹はさつそく歩きだした鈴の腕をとつて止めた。

「その前に！ 部室の掃除だよつ」

「ふかーつ！」

「威嚇してもダメ！ そうだ、こうしよう」

理樹は指をたてて鈴に提案した。

「この先僕は、鈴の課題クリアに協力する。だから鈴も、リトルバスターズのチームメンバーを捜しに協力してよ」

「いやいや」

「一緒に行動してくれるだけでいいから」

「……」

「ほんとうか？と、子猫のように毗のあがつた目が訊いてきた。うん、と理樹も目でうなずいた。

「よし、決定。じゃあまずは、部室の掃除から！」

「ふかーつ！ ううーつ……」

理樹は鈴を引っ張つて、恭介たちの待つ部室へ向かつた。

屋上は逃げない。明日にでも、鈴と行つてみることにしよう。

「ふいー。つかれたあ！」

部屋に戻るなり、真人は自分のエリア——一段ベッドの上段にかけあがり、どすんと勢いよく倒れ込んだ。

「まつたく、無茶するぜ恭介のやつ……」

「まさか今日から練習するとは思わないよね」

理樹も真人と同様に、疲れきつて自分のベッドに転がつた。

あれから。掃除が一段落、というか主に恭介が掃除に飽きると、続きをまた今度ということ

にして、理樹たちはグラウンドで野球の練習をしたのだつた。

「予想がつかないことをおっぱじめるのがあいつなんだよ」  
ベッドの上と下で会話をする。

「たしかに予想外だつたよね」

ピッチャ―は鈴。バッターとして理樹を徹底的に鍛えると恭介は言い出した。

——どうして？

——意外性があつて燃えるだろ。

「どうせまた漫画の影響だらうな」

「大丈夫なのかな……」

思い出すとついため息が出てしまう。ピッチャ―鈴の放つた第一球は、見事、真人の尻に命中した。しかし、バッターボックスにいたのは理樹だ。真人は鈴の後方、三塁外側でひたすら素振りしていただけだ。「神なるノーコン」の名が鈴に与えられた。

「だいたいオレは、強くなることにしか興味ねえんだよ。野球なんてスポーティなスポーツやつてられるか」

「スポーティじゃないスポーツってなんだろう。

「よしわかつた」

起き上がる気配、すぐに真人がどすと二段ベッドの梯子を下りてきた。

「走つてくる」

「え!?」

いま疲れたつて言つてなかつた？ と理樹がつつこむ隙を与えず、真人は勢いよくドアを

「だあつ！」

開けたはずがドアのほうが先に超勢いよく開いて真人の顔面を直撃した。

「よう」

悶絶する真人に構わず恭介が室内へ入つてくる。

「助けてくれ。授業でやつかいな課題があるんだよ。目的はよくわからないんだが、偉人の言葉を集めろつてさ」

「名言つてこと？」

「それそれ」

「猫も棒から落ちるつてやつか」

「それはことわざでしょ……しかも奇跡的に間違つてるよ」

ちなみに真人の驚異的な回復の早さはいまさら奇跡でもなんでもない。

「名言なら、図書館で調べたほうが早いんじや」

「真面目にやる気がないからここへ来たんだよ。おまえが口にした言葉から探す」

まずはこれだ。と、恭介は目を閉じてそらんじた。

——猫も棒から落ちる。

「うおおおお！ 改めて言われると恥ずかしい！」

「明日授業で発表する」

「なにい！」

自分ばかり屈辱的名言の生産者になつてはと、真人は携帯で謙吾と鈴を呼び出した。

「くだらないことに巻き込むなど言つてる」

呼ばれた理由を知つた謙吾はすぐに自室へ戻ろうとしたが、

「また逃げんのかてめえ」

真人がしつかり謙吾の腕をつかまえた。

「なんだ、また勝負するつもりか？ おまえは鈴にすら勝てなかつたそつだが」

「あれば、武器がうなぎパイになつちまつたせいやつ！」

「そうだつたとしても、手はいくらだつてあつたはずだ」

謙吾は冷静に真人の腕を払つて言つた。

「おまえのほうが、逆にうなぎパイに食われたということさ」

「お、それいいな」

恭介が嬉々として言葉を拾つた。

「ここにまた、新しい名言が生まれた」

——おまえのほうが、逆にうなぎパイに食われたということさ。

「しまつたああ！ この俺が、そんなわけのわからん言葉を後世に残すとは……！」  
「おまえらうつさい」

鈴は最初から状況を無視して（でも帰るとは言い出さず）一人片隅でノートを開き、自分の課題を進めていた。

「恭介、ひいきすんなよつ！ 鈴からも名言を搾り取れっ」

「だが、こいつはなにもしゃべってないからな」

「くそぅ……こうなつたらマジで名言でも吐いて、あの子ちょっとイケてるじゃない？ てとこ見せてやる！」

「すでにそれが名言だな」

——あの子ちょっとイケてるじゃない？ てとこ見せてやる。

「前向きなんだか後ろ向きなんだかわからないところが真人らしいね」

「ありがとよ」

「こいつ馬鹿だ！」

「お、それもらい」

兄は妹から名言を拾つた。

——こいつ馬鹿だ！

「うおおおーーっ！」

「真人を見事に一言で表しているな」

「馬鹿つて言つてるだけじやねーかつ！」

「だーかーらーうつさいつ！」

「ふすつ。

「つあ……ちよぎつ……！」

鈴にシャープペンで脇腹を突かれた真人が悶絶した。

「また奥深い名言が生まれちまつたな……」

——つあ……ちよぎつ……！

彼の人生になにがあつたのか謎の深まる名言も生まれ、恭介の課題は無事に？終了した。  
「ところで」

名言？を記したノートをぱたりと閉じて、恭介がみんなを見渡した。  
「来週末には試合をするんでみんなよろしく」

「試合？」  
「決まってるだろう。リトルバスターズの野球の試合だ」  
「ええーっ!?」

まだメンバーも揃わないいうちから試合はないと理樹と真人は力説したが、恭介が一度言い出したら結局そうするしかないことも、経験からよくわかつていた。

「……ふう」「どうした」

「なんでもない」

自分が言い出したことはいえ、メンバー捜しとメモの主が与えた課題のクリア、同時進行は大変だ。

いま理樹は、鈴と二人、屋上へ向かう階段の下にいる。昨日予定したとおり、昼休みをつづて「封鎖された屋上を開放せよ」の意味を調べるつもりだ。

「とりあえず、屋上に出られるかどうか——どうしたの？」

「誰かいる」

階段をのぼりかけた理樹を鈴がとめた。

「え？」

階段は途中の踊り場を挟んで曲がっているから、ここから人の姿は見えない。が、耳を澄ますとかすかに人の声らしきものが聞こえてくる。

——うええ……ふええつ……。

理樹と鈴は顔を見合させた。泣いているのか？ 困っているのか、なにか恨んでいるのかよくわからない。だが、声は女の子のようだつた。

「行こう」

理樹は鈴の手をひいた。緊張するが、真っ昼間から幽霊もまあないだろうし、誰かが助けを求めているのかもしれない。もしもメッセージの主がしかけたトラップで、上にいるボスを撃

破するミッショ�다つたら——引き返して真人を呼んでこよう。

「ふえ……つ……あふう……」

「やつぱり、泣いているみたいだな」

「しかも、覚えがある声のような……」

慎重に足を進めつつ、二人は踊り場の角を曲がった。

そして。

「——ふえ……あ、あ……？」

「あれ……？」

階段の上にいたのは幽霊でもなければボスでもない。同じクラスの少女だつた。

かみきたこまち神北小毬。あまり話をしたことはないが、見た目も声もほわっとした、あたたかそうな印象の子だ。いつも着ているゆつたりした白いセーラーを今日も着て、髪にはひらひらの赤いリボンと星のアクセサリー。

その小毬が、なにやらトラブルを抱えた様子で、屋上への扉を塞いで積まれた机を背にして立つてゐる。理樹たちを見て、一瞬救われたように目を輝かせ、それから慌てて首をぶんぶん横に振つた。

「どうしたの？」

「あう……こ……来ないでえ……」

なにか知られてはまずいものもあるのだろうか。なら仕方ない、とりあえず出直そうかと理樹たちが小毬に背を向けると、

「うああ……い、行かないで……」

「じゃあそつちへ行くよ」

「来ないでええつ……！」

どうすればいいのか。理樹は戸惑い、助けを求めて鈴を見た。あたしにわかるか、と言いたげに鈴は理樹を睨む。が、ふとなにかに思い当たつたように、小毬から見て斜めの位置へ移動した。

「あ、あは……？」

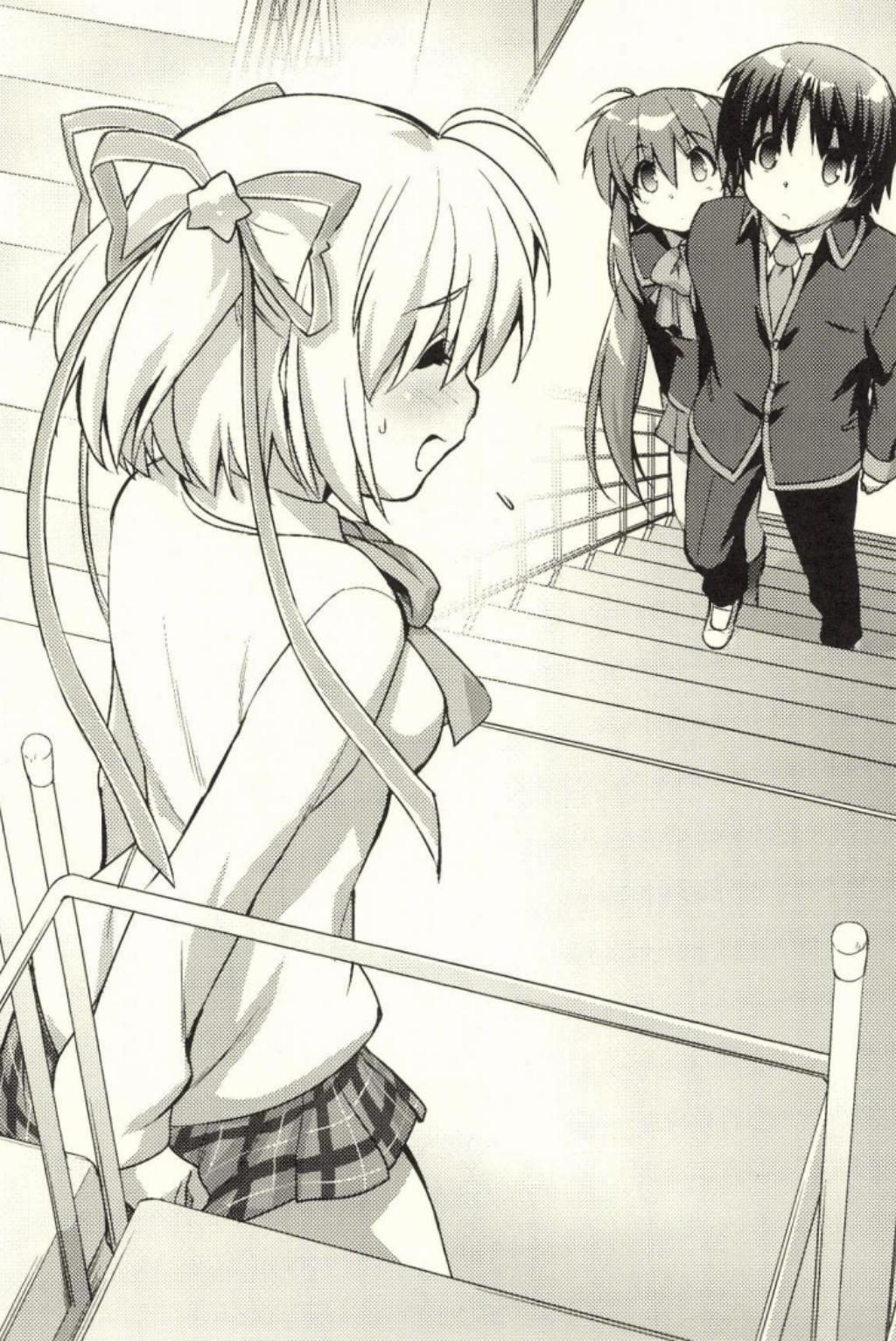
すると小毬は、背中を机にくつつけたまま、あからさまなごまかし笑いを浮かべ、肩と首だけを鈴にあわせて動かした。

「あはは、あ……」

鈴が逆側へ移動すると、やはり背中から腰だけを残したままで首を動かす。少し考え、鈴は階段をあがつてそろそろと小毬に近づいた。

「あふ」

小毬は頬を赤くし戸惑っているが、理樹のときのように来ないでとは言わない。鈴は黙つて小毬の周囲を観察し、理樹、と上から手招きした。



「あう」

「ごめん。あたしだけで、これを動かすのは無理だ」

いいのかな、と思いつつ近づくと、小毬は半ば涙目だったが、諦めたようにもう叫ばなかつた。鈴が視線で理樹に教える。ああ。理樹はようやく納得し、やはり少々恥ずかしくなつた。

「じゃ、とりあえず動かすね」

「ごめんなさい……」

「あやまらなくていいよ」

理樹と鈴は協力して、扉を塞ぐ机を端から少しづつ移動させ、小毬の背後の二つの机に隙間をつくつた。すると、机に挟まれめくれていた小毬のスカートが、ふわっと元の位置に戻つた。

「よかつたあく……！　ありがとう……ほんとに、ほんとにありがとうございます……」

まだ照れて赤い顔のまま、小毬は何度も鈴と理樹に交互に頭をさげた。

「いや、いいよ」

じつは机を動かすとき、どうしても、小毬のその……アリクイさん……はあるいはアルマジロさんがプリントされた下着が目に入つてしまつたのだが……すみません！　もちろん、一生秘密にする。

「だけど、どうしてこんなところに？」

「えへへつ……それはですね……」

小毬は机の下にもぐりこむように身をかがめ、なにかを拾つて立ちあがつた。

「助けてくれたお礼に、招待します」

小毬が手にしてかるく振つているのは、やや細身のドライバーだつた。なんだか意外な取り合わせだ。これを落として拾おうとして、あんな状態になつていたのか。

「よいしょ、よいしょ」

小毬は積まれた机の上にのぼつて、すぐ傍にある窓の鍵にドライバーを差し込んだ。古くて動かないらしい鍵をそれで回して、屋上へと続く窓を開ける。

「はい。どうぞ～」

「どうぞ、つて……」

鈴は理樹の制服の裾をにぎつてためらつた。が、理樹はかるく鈴の背を押した。

「課題、クリアするんだろう？」

小声で言うと、鈴はウツと一瞬身構えながらもうなずいて、小毬の呼ぶほうへと机をのぼつた。よし。いいぞ。理樹も続いて、三人は、窓から屋上へ抜け出した。

すると。

「わあ……」

初めて立つ屋上、そのあたたかさと景色の良さに、理樹は思わず声をあげた。

白いコンクリートが日差しを照り返して一面が明るい。遠くの山並み、手前の家並み。緑の

自然がさわやかな空気を運んでくる。傍にいる鈴の長い髪も、さらさらと風に揺られてなびいている。ちりん、と鈴が軽やかに鳴つた。

「すごい。神北さんは、前からここを知つてたの？」  
えへへ、とやわらかく小毬は笑い、屋上に設置された給水タンクを覆う壁にもたれて、ぺたんとそこに腰をおろした。

「ここ、私のベストプレイス♪」

にこにこ笑い、かるく手を広げる。小毬はそこに理樹も鈴も座ると疑わないらしい。そんな笑顔に逆らえるはずもなく、二人は小毬とぎりぎり膝が触れないくらいの距離で座つた。

「はいっ」

小毬はポケットから小さなクッキーの袋を出して、理樹にひとつ、鈴にひとつとふるまつた。  
最後に自分もひとつ手にして、いただきます、と幸せそうに袋をあける。

「うん。おいしいー」

髪につけているアクセサリーと同じ、星の形のクッキーをくわえて、小毬はたいへん満足らしい。理樹も小毬のまねをして、一礼してクッキーをかじつてみた。こくのあるバターと、ほのかにジンジャーの香りがした。甘くサクサクで心地良い食感。

「ありがとう、神北さん。おいしいよ」

「うん。おいしいと言つてもらえると、私もおいしい」

嬉しいじやなくておいしいんだ。理樹はやわらかな小毬の笑顔につい釣られ、自分も笑つて  
いると気づいて照れくさくなつた。

「鈴」

「……」

うながされ、鈴もクッキーの袋をあける。鈴のクッキーはチョコレート色だ。こわごわと一  
口かじつた鈴は、ぱつと反射的に目を輝かせる。

「……おいしい」

「わあ。よかつたあ」

「鈴、忘れてるよ」

理樹は小声で耳打ちした。招待されて、お菓子をもらつたのだから。

「あ……う……つ……ありが……と……」

「うん！」

途切れ途切れの、礼を言つているのかどうかもあやしい棒読みの鈴の台詞に、小毬は大きく  
うなずいた。鈴は赤くなつて身を縮める。

まつたく、僕らといふときと違うんだな。理樹は内心で苦笑した。でも、神北さんくらいお

おらかでおつとりした人なら、鈴も気が楽かもしれないな。

「ところで今日は、井ノ原くんたちは一緒じやないの？」

小毬がかるく首をかしげた。これまで小毬とそう親しくはなかつたが、やはり、リトルバスターズは目立つのだろう。理樹たちの仲間をよく知つてゐる。

「それがね……いま、ちょっと妙なことになつててさ。僕ら、人探しをしてるんだ」

「人探し？」

「うん。草野球チームのメンバーになる人」

「……野球？ 草で野球ですか？ ピッチャータンポボ」

小毬は愛嬌のある垂れ目をぱちぱちさせた。

「それは出来ないと思うよ……そうじやなく、草原でやるような野球つてこと。趣味つていうか、やりたい人を自由に集めて、野球のチームを作るんだ」

「わあ。楽しそうだねえ」

「楽しむための野球だからね。それはいいけど、リーダーの恭介が勝手に試合を決めちゃつて。

当 日 ま で に あ と 四 人 …… か 五 人 、 必 要 な ん だ

「それで手分けして搜してるんだね……うんうん」

手分けはしていないのだが、小毬はそういうことにして納得した。

「人探し、たいへん？」

「まあね。知らない人をとつぜん野球に誘うわけにもいかないし」

「そつかー……」

小毬は胸に手をあてて、理樹の言葉をのみこむようにこくりとひとつうなずいた。

「うん。それなら、私、やるよつ」

「……え？」

「聞こえにくかつたかな？ 私、捜された人になります。直枝くんのチームで、野球をします」

「ええええー！？」

「助けてもらつて、お菓子を食べて、一緒に幸せになつたから、今度は私が直枝くんたちを助けるのです」

「いや、それとこれは……」

「だいじょうぶ。野球つてやつたことないけど、少しは知つてるよ～」

「だいじょうぶつて……『草野球』の意味も知らないのに……。」

「よろしくね！ 私、がんばるよつ」

小毬に両手でガツツポーズされ、理樹はなんと言つていいかわからなかつた。

「……これで、屋上開放の課題はクリアされたのか」

鈴が隣でぽそぽそ言つた。

「たぶんね」

僕らが屋上へ出た時点で、こちらのミッションはクリアだろう。しかし、新たにべつの問題が……いや、メンバーが増えれば進展なのか？ うーん……。

放課後。

「ようし、がんばるぞ」

グラウンドにあらわれた小毬はすでにやる気まんまで、ぶんぶん……のつもりだろうが傍目にはくるくるくらゐの感じで両腕をまわしていた——が。

「……理樹」

小毬を新メンバーと紹介された恭介と真人は、無表情で理樹を物陰に呼んだ。

「ごめん。正直、僕もどうかと思つたけど、断りようがなくて……」

「大丈夫なのか、あいつは。どう見ても筋肉がねえぜ」

真人の基準はつねに筋肉にあるらしい。

「鈴は知つてる？ 女子同士だから、体育で神北さんの運動を見ることがあるでしょ」

いつのまにか傍らに来ていた鈴に訊く。

「記憶にない」

「仕方ないな。とりあえずテストということで、あの子の実力を試してみよう」

恭介が決めて、小毬のほうへ近づいていった。理樹たち三人もあとに続いた。

「神北……だつたな？」

「うん。棗さんのお兄さんですよね？ エーと……」

「恭介でいい」

「恭介、さん？」

「クラスメイトの兄とはいって、小毬は男性を名前で呼ぶのに、いくらか緊張しているらしい。だが恭介は余裕で流し、

「その恭介さんが、これからきみにテストを行う」

「ええつ？ テスト？」

「そうだ。第一問。神北は、野球経験はあるか？」

「ううん、ないです」

「不合格」

「ええええええええ！」

「ちょ、ちょつと恭介、それはないよつ！ 神北さん呆然としてるでしょ！」

無茶な展開は恭介のつねだが、新たに話す人はびっくりする。

「悪かつた。と、いうのは冗談で」

しつとして恭介は小毬に向き直り、今度はぴしつとしたキメ顔で訊ねた。

「神北は、野球に必要なものはなんだと思う」

「ええつ……」

それも極端な質問だよ、と理樹は恭介を止めようとした。が、小毬はまじめに考えている。  
そして、青みがかつたきれいな目を輝かせ、しつかりと一步を踏み出した。

「ガツツと」

「ほう」

「勇気と」

「うむ」

「——そして友情」

「合格つ!!」

「うん、がんばります!!」

「ヨロシク勇氣!!」

恭介はがしつと小毬の肩に両手をかけた。

「ち、ちちちよつと待つてよ！ どうしてこうなるのさ！」

「いやあ～……あまりに的確な言葉について感動してしまつたぜ」

恭介は額の汗をぬぐうまねをして、小毬はよーしかつとばすぞとバットを引きずり打席に立つてゐる。そしてマウンドにはすでに神なるノーコンが。

「もう……みんな……」

まあいいか。これが僕らの日常だし。

「改めまして、よろしくね。りんちゃん」

小毬が笑顔でマウンドの鈴に手を振った。

「う……りつ……」

鈴はマウンドで固まってしまう。あれ？と小毬は首をかしげる。理樹は気づいてバッターボックスへ走ると小毬にささやいた。

「ごめんね。鈴、あれで人見知りで。神北さんに『りんちゃん』て呼ばれて驚いたんだ

「ふえ……」

小毬は白いセーラーの袖からのぞく細い指を小さな唇へもつていく。

「あ、でも決してその、神北さんがきらいなわけじゃないんだよ。むしろ、鈴にしたらすごくよくやれているほうだと……」

ほわ、と小毬が笑顔になつた。

「だいじょうぶつ。いまはもう、同じチームのお友達です。うん」

自分の言葉に大きくなづく。

「——明日には、きつとお話ししてくれるよ」

星の髪かぎりに夕日がきらつと反射して、小毬の言葉は魔法の呪文のように聞こえた。

「……うん」

理樹も小毬の呪文を信じて、改めて、自分の守備位置へ戻つていつた。

すると、恭介がすつとすれ違い、理樹だけに見えるよう親指をたてた。

「いいぞ理樹。神北を誘つたのは正解だつた」

「……」

「そつか。まあ、そうだよな。僕らがこのチームを作つたのは、いまこのときを、みんなで楽しむためなんだ。野球の上手い下手は問題じやない。」

「ようし！ やるぞ！」

理樹は用意していたグローブをぱんぱん叩き、バッターボックスを振り返つた。神北小毬、記念すべきリトルバスターズとしての第一打席。

「ふええ～つ……このバット、重くて持ちあがらないよう～つ！」

「え、ちよつ、ま……鈴、投げないで！」

止める間もなく鈴は小毬へ向けて第一球を。

「どあああーつ！」

投げたはずだが真人の尻に思い切り命中させていた。

「なぜだあーつ！」

「そんなところにいるのが悪い」

「ふえええーん……重たいよお～……」

「うん。次にメンバーを誘うときは、野球の上手い下手も……もうちよつと、考えたほう

がいいかな……。

## 77 Mission2 べいすぼーる、しません？

翌日はグラウンドが使用中で、練習開始まで時間ができた。

猫たちの集まる日だまりに鈴と座つて、理樹はぼんやりと考えていた。

いくら草野球のメンバーといつても、それなりにできる人はもう、どこかのチームに所属しているに違いない。

だけど未知数の実力なんて、誰にもわからないしなあ。野球の基本ルールは知つていて、体育の成績が悪くない人、くらいのラインになるだろうか。

「理樹」

「ん？」

見ると、鈴はレノンを抱っこして、片手にメモらしきものを持つている。

「もしかして、また例のあれ？」

鈴はうなずき、無言で理樹にメモを開いて差し出した。

——空白の部屋の片側を満たせ。

「これが課題？」

この前は「屋上」というわかりやすいキーワードがあつたが、「空白の部屋」では、そもそもそれがどこを指すのか、現実にある部屋なのか、なにかの比喩なのかもわからない。

「鈴はどう思う？」

「わからない」

「即答しないで考えようよ。そうだなあ……前も校内のことだつたから、今度も学校のどこかかな……でも、学校で『部屋』なんてあつたつけ」

教室、職員室、美術室、部室。「室」ならいくつもあるけれど……それに「片側」ってなんだろう？

「ある」

鈴はすつくと立ちあがつた。にやん、と鳴いてレノンが膝から落ちそうになり、慌てて鈴の肩にしがみついた。

「どこ行くのさ」

細い脚ですたすたと一直線に進む鈴。理樹も並びながらついていく。

鈴はグラウンドの脇を抜け、中庭を越え、さらに校舎の裏へまわつた。

「この先？」

あ、そうか。たしかにここなら——と。

「え……？」

行く手に謎の物体を見つけて、二人は同時に足をとめる。

「……ふう、……ふう」

白地にカエルのマークをつけた段ボールが三つ、重なつてよろよろと歩いている。箱の下から二本の白い棒つきれ。脇から、光る波がふわふわと広がつて。

「化け物か」

「こら」

「……よ、よし、がんばる、ぞ」

化け物（？）はけなげにがんばり宣言をして、理樹たちへまつすぐ向かつてきだ。

「きみ、そのままだとぶつかるよ」

「ええ？ あ、ああっ……！」

急に人の声を聞いて驚いたのか、段ボールはぐらつとよろめいた。

「危ない！」

鈴は反射的にくずれてきた段ボールをキヤッチ、理樹は片手で段ボールを持ちつつ、片手で段ボールの陰で転びかけた姿を受け止める。

「わ、わつ……！」

「ごめんごめん。急に声かけて驚いたよね」

「こ、こちらこそ……前方不注意です、ごめんなさいです……」

理樹に支えられ赤くなっているのは、段ボールにすっぽり隠されそうな、とてもとても小柄な少女だつた。華奢な身体をやわらかそうな白いマントですっぽり包み、マントの裾より少し上くらいの、腰まである亜麻色の髪を揺らしている。これが謎の波の正体だ。亜麻色は金にも茶にも似て、どちらとも違う不思議な輝きを放つ色。

「……あ」

理樹たちを見ると、緊張ぎみな表情がぱつとほころび、無邪気な満面の笑顔になつた。白い

肌、明らかにこの国の標準と違う、鮮やかに青い瞳をふちどる睫毛も亜麻色だ。

「ぐつもーにんえぶりわんはぶあないすでーつ」

「……」

「はぶあないすでー、しーゆーあげーん」

少女はさらに被せてきたが、理樹は無言で鈴を引っ張り、その場をすり抜けようとした。

「……さよならされました？」

すると少女は笑顔のままでかくりと膝を抱えてしゃがむ。

「ごめんごめん。冗談だよ、クド」

「……どうせ、私なんか私なんか……」

「ごめんつて」

理樹は少女が——クドが被つている白い帽子にぽんと柔らかく手をおいた。クド、こと能美(のうみ)クリヤフカ。名前と外見が示すとおりのクオーター。愛くるしいルックスもあって、理樹も含め気軽に「クド」と呼ぶ生徒も多い。

「おわびに荷物運び手伝うから」

「あ、いえ、そんな。直枝さんに運んでいただくなんて、ご迷惑ですっ」

クドはパツと顔をあげ、理樹が持ちあげた段ボールを受け取ろうとぴょんぴょんした。

「いいつていいつて。さつきみたいに人とぶつかつたら危ないしね」

「あ、う……そうですね。ありがとうございます、お願いします」

頬を染め、クドは小さな身体をさらに小さくして丁寧に頭をさげた。

「あの、でも、重くないですか？」

「全然。クドの部屋でいいの？ これは買い物？」

「いえ。部屋を移るための荷物なんです」

案内しながら、クドは事情を説明した。新学期の始まりにあつたひどい嵐で、女子寮の旧館が浸水した。そこで使えなくなつた部屋の住人は一時的に二人部屋に三人などで対処していたが、復旧工事が完了したので、元どおり移動するのだという。

「今まで賑やかだつたのですが、新しいお部屋は一人なので少しさみしいです」

クドは先にたつて自室を開けた。工事を終えたばかりの部屋は新築のにおいがして気持ちが

いい。でも、たしかにここで一人だと、いくらか広く感じるかもしれない。

「一人も気兼ねなくていいと思うけどね」

理樹は床の隅に段ボールを置いた。

「直枝さんは二人部屋ですか？」

「うん。真人と二人。騒がしいけど、楽しいよ……あ」

「いけない。クドは一人でさみしいと言つてるのに。」

「……理樹」

と、ずっと無言で猫とたわむれていた鈴がつぶやいた。

「空白の部屋の片側を満たせ」

「――あ！」

「？」

「あ。ううん、なんでもない。そつか……そういえば、もともと『空白の部屋』を搜して寮へ来たんだつた」

「？　？」

頭の上にハテナをいっぱいつづけているクドに理樹は笑つた。

「えつとね、クド。その……よかつたら、ルームメイト捜し、手伝おうか？」

「え。いいんですか？」

「もちろん。ね。鈴」

「う」

「ふいにふられて、鈴はまた固まりながらぎくしゃくうなずく。  
「わあ……ありがとうございます！」

白い帽子が落ちそうなほど丁寧に、クドは鈴にもお礼をした。  
「う——うん」

鈴はかつと赤くなり、八つ当たりのよう理樹を睨む。

理樹は気にせず、逆に親指をたてて鈴にグッジョブを示してやつた。鈴は悔しそうに唇を曲げたが、手伝わないとは言わなかつた。

「しかし、ここでまた人捜しかあ」

野球チームのメンバー捜しにくわえてクドのルームメイト捜し。どんな人でも嬉しいです、  
とクドは言うが、毎日顔を合わせる相手だ。できれば仲良く、平和にやれそうな人がいいだろ  
う。

翌日の放課後、理樹は鈴とクドと連れだつて、まずは小毬にあたつてみた。  
「ごめんね……わたし、もうルームメイトの人いるから」

残念。小毬なら、ほんわか具合も共通してゐしクドにぴつたりだと思つたのだが。  
ほかにも何人か当たつてみたが、小毬と同じ理由でだめだつた。

「大丈夫です。ルームメイトは、いつでも募集中ですから」

クドはめげずに小さな握り拳でガツツポーズをした。

「そろそろ練習の時間だぞ」

「そつか。じやあ、今日はここまでにしておこうか」

「練習、ですか？」

理樹と鈴の会話にクドがちょこんと首をかしげた。

「うん。僕ら、野球のチームを作つたんだ」

「べいすぼーるですか……いいですねえ……」

「クドは野球好きなの？」

「見るのは好きです」

「……」

一瞬、理樹は考えた。が、見るのは好き、ということは、やるのは苦手なのかもしれない。  
それに、クドの華奢な脚や小さな身体では、練習は負担になるかもしれない。

「じゃあ、よかつたら見学に来る？」

「いいんですか？ わあ、嬉しいです」

青い目を輝かせてクドが笑うと、亞麻色の髪がふわりと揺れた。

三人は校舎から中庭へ出た。時刻はそろそろ夕方に近いが、この季節はまだまだ明るくて、あたりは黄色の光に照らされていた。

「あつ……」

理樹は額に手をかざし、影をつくつて光を防ぐ。と、見慣れた景色にふと違和感を覚える。輪郭だけがくつきりと浮いて、静止した一枚の絵のようだ。

絵のなかに白い鳥がふらふらと迷い込んできた。

いや、鳥に見えたその正体は日傘だった。風はほとんど吹いていないにも関わらず、どこかから飛ばされてきたのだつた。

「どこから來たんだろ」

理樹は日傘を拾いあげる。と、鈴が理樹の服の裾をつかんで引いた。あれ、と指さす先に目をやると、中庭でもひときわ高い木の陰に、ひつそりした少女の姿があつた。

なんだか、あの人も絵みたいだ。

でも絵じやない。理樹は少女に見覚えがあつた。開いた本を膝に置き、理樹が手にする日傘を見ている。これは彼女の持ち物で、風に飛ばされてきたのだろう。

理樹は少女に日傘を届けた。日向から一步踏み込むと、木陰の空気はひんやりしていた。

「……ありがとうございます……」

やはり涼しいが小さな声で、少女は傘を受け取つた。透き通るように白い手の、細長い指に細い爪。シンプルでおとなしそうな顔立ちだが、瞳は夢見るよう深い色だ。

「こんにちは、西園さん」

理樹の背後でクドが呼びかけた。

「こんにちは」

静かな声。そうだ。この子もたしか同じクラスで、名前は……西園……？

なんだつけ。

——美魚。名前は、西園美魚。

「そうだ。西園美魚さんだ」

「……はい？ そうですが」

「だよね。あ、べつになんでもない」

つい声に出して名を呼んでしまい、理樹は照れくさくなつて手を振つた。  
「お庭の読書、気持ちよさそうですねつ」

クドはマイペースで美魚に話しかける。はい、と美魚は細い声で応えた。

「わたしの部屋は西日が差すので、ここで読むほうが涼しいんです」「もしかすると、旧館の西棟ですか」

「はい。能美さんも？」

「私は、このあいだ直したばかりの南棟です」

「そうですか。いいですね。西棟は、窓の日差しで本の背表紙が褪せてしまつて」

「それは残念ですね……せつかくの本がかわいそうです」

「南棟のお部屋は、本棚もいい位置にあるんですよね……」

美魚は小さくため息をつき、羨ましそうにクドを見る。

——あつ。

「あ、あのさ、西園さん」

「はい」

「西園さん、いまは同室の人誰かいる？」

「？ いいえ。いません」

「やつた！ あ、いや。だつたら……じつはいま、クドがルームメイトを捜してゐるんだ。よかつたら、西園さんと一緒にどうかな」

「わあ……」

理樹の申し出に、美魚より先にクドがぱあつと頬を染めて反応した。

「わたし……ですか？」

「はいつ！」

またしても先にクドがうなづく。

「それは、魅力的なお話ですが……わたしはその、部屋に荷物が多いので……本とかですけ

れど、能美さんにご迷惑じやないでしようか？」

「それなら、全然かまわないです！ 私は荷物そんなにないですから。それに、本のにおいは好きです」

「あんまり見ないほうがいい本もいっぱいあります」

美魚の声から抑揚が消えた。

「ど、どんな本なんですか？」

「フ。もしも能美さんが同志とわかりましたら、いずれお見せしましょう」

「……どうし、ですか？」

「はい」

美魚はそれ以上は語らなかつた。が、可憐な薄いな唇が、そのときだけ謎めいた笑みを浮かべて見えたのは気のせいだろうか。

「えつと、とにかく、二人がOKなら、これで問題は解決じやないかな。運ぶ本が多いなら、僕も引っ越し手伝うよ

踏み込むなと本能が訴えたので、理樹は明るく話をまとめた。

「触らないほうがいい本もあります」

「いつたいどんな本読んでるの」

「直枝さん。世の中には、知らないほうが幸福でいられることもたくさんあります」



「……そ、うか……じ、じゃあそれは、触らない方向で」

いかんいかん。言うとおりにしておけとまた本能が訴え、理樹は追求を諦めた。

「すてきなルームメイトさんが見つかって嬉しいです。よろしくお願ひしますつ」

クドは美魚の謎にはおかまいなしで、白い帽子をとつて丁寧にお辞儀をした。

「こちらこそ」

美魚も日傘を手にほつそりした身体を曲げて礼をした。よかつた。ちょっと不思議？な美魚だが、二人はうまくやれそうだ。

「……ところで、これは単純な疑問ですが」

日傘の陰から美魚が理樹を見てつぶやいた。

「どうして、能美さんのルームメイトを直枝さんが捜しているのですか？」

「え——あ、それは……」

「理樹。用が済んだら、練習に行くぞ」

ずっと黙っていた鈴が、後ろから声をかけてきた。

「あ、うん。えっと、西園さん、その件はまたいつか、話す機会があつたら話すよ」謎の人物から送られてくるミッションをクリアするため、というのは説明しづらい。鈴がいいタイミングで声をかけてくれて助かつた。

「すみません……このあとお引っ越しのことなど西園さんとお話ししたいので、べいすぼーる

## 91 Mission2 べいすぽーる、しません？

の見学はこの次にしてもいいですか？」

クドが恐縮しながら手をあわせる。

「もちろん。気が向いたら、いつでも来てよ、西園さんも一緒に」

「？ あ、はい」

美魚は要領を得ないようだつたが、あとでクドが説明してくれるだろう。木陰に並ぶ美魚とクドに手を振つて、理樹と鈴は足を速めて部室へ向かう。

「——でも助かつたよ」

理樹は鈴の肩にぽんと手をおく。

「なにがだ」

「ミッショーンの話、しないですむようにしてくれて」

「あたしはなにもしていない」

「そのつもりはなかつたのかもしれないけどさ……西園さんの名前についても」

「名前？」

「ほら、さつき。名前は西園美魚だつて、そつと教えてくれたでしょ」

「おまえは、さつきからなにを言つている」

「え？」

「あの子の名前を知らなかつたのはあたしも同じだ」

「ええ？　じゃあ……」

あのとき聞こえた声はいつたい？　いや待て、そもそも僕は、彼女の名前が思い出せないつて口に出したつけ？

「理樹ー！　鈴！　おせーぞ!!」

部室の前で真人たちが呼ぶ声が聞こえてきた。

「ごめんごめん！」

まいつか、あとで考えよう。理樹は手を振つて走り出した。

そしてついぶんあとになるまで、このときのことは思い出さなかつた。

ミッショーンのクリアは順調だつた。が。

「鈴はどうだか知らないけど、僕はやっぱり気になるよ」

「なにがだ」

「あのメッセージの送り主は誰か」

「それを知るためにもがんばつてる」

鈴は用意しておいたモンペチをあけて、日だまりの猫たちにふるまつてゐる。  
「送り主は、神北さんが屋上にいることも、クドガルームメイトを捜していることも、まるで

あらかじめ知つていたみたいだよね。だけど、神北さんやクドが、僕らをあてにしてメッセージを送つたとは思えない

イタズラに付き合うつもりで始めたが、イタズラにしては手が込んでいる。しかも、結果的に誰も困つていないので、イタズラが目的なら送り主はおもしろくないだろう。

「次が来ている」

「えつ？ また来たの？」

こくんと鈴はうなずいて、レノンのしつぽからメモを外した。

——校門のイモムシ問題を解決せよ。

「……謎めいていたと思ったら、今度はまたえらく具体的だね」

おそらく、メッセージの送り主は、謎解きをさせるつもりはないのだろう。課題もそれほど重要な問題とは思えない。ということは、彼、あるいは彼女にとつて大事なのは、鈴が課題をクリアするという行為なのだ。

「イモムシ問題つて、鈴は知つてる？」

「知らない」

「とりあえず、校門へ行つてみようか」

そこは、一見いつもと変わりない、石の門と小さな管理棟があるだけの場所だつた。管理棟の窓から、室内に校務の職員さんがいるのが見える。窓を叩き、理樹は職員さんに訊ねてみた。

「ああ……それなら、あの木のことだね」

職員さんは門のすぐ奥、前庭に植えられた幹の太い木を指さして、

「あそこはいつも、昼休みなんかに女の子が弁当を食べたりしてゐるんだ。その葉っぱにイモムシがびつしりついて、気持ち悪いからどうにかしてくれつて」

「どうするんですか」

「一匹二匹つて数じやないし、薬で駆除するしかないだろうねえ」

「殺すのか」

鈴がつらそうな声でつぶやく。

「イモムシはなにも悪いことをしていらないのに」

「かわいそうだと思つてゐるんだけどねえ」

眉を上げ、職員さんもせつなそうにしている。鈴が理樹を見た。そうだね。これはそういうことだ。うなずいて、理樹は一步前に出た。

「だつたら、僕たちで捕まえて、まとめて裏の山に逃がします」

「いいのかい？　かなり手間だけど」

「殺すよりもそのほうがいい」

とはいえ、実際に見るとたしかに大変そうだった。問題の木は一見なんの変哲もないが、職員さんに借りた梯子で葉を茂らせているあたりへのぼつてみると、さまざまな大きさのイモムシが、葉の上にいつぱいくつついていた。

「どうだ？」

「二人で一匹ずつ捕まえるのは無理そうだね。真人たちに手伝つてもらおうか……」

「いつたん梯子を下りたところで、理樹と鈴が相談していると。」

「ちよつと。あなたたち、害虫駆除の邪魔をしているそうね」

やけにツンツンと尖つた声が聞こえてきた。

振り向くと、小柄できつい目をした美少女が、顎をつきだしてこちらを見ている。その背後ではお仲間らしき数人の女生徒が、わざとらしい苦笑いを浮かべている。

「笛瀬川佐々美！」

めずらしく、鈴が正面から相手をにらみ、フッと毛を逆立てる猫のように警戒する。

「棗さん。あなた、ほんのちよつとだけ男子に人気があると思つて、調子に乗つてゐるんじやないの？」

「ええ？ 君、なにを」

「そんなことない」

鈴が理樹を制した。

「だつたらどうして、わざわざ手間暇をかけて害虫を捕まえようとするのかしら？『みんなのために頑張る棗鈴』で、誰かの気を引こうとしているんでしょう」

「それは誤解だよ。えつと……笹瀬川さん、でいいのかな」

「ほらやつぱり。お仲間に庇われて氣を引こうとしてる」

「違うつたら」

「違うんだつたらこれ見よがしに手で虫を捕るようなことをしないで、全部一気に片付けたらどう？でなければ、生徒の憩いの場を奪つている害虫駆除に協力すべきだわ」

「そんな……あの量の虫を一氣になんて、できるわけがないじやないか。

「さあ、どうなの？」

佐々美は一步ずつ進み出た。反射的に、理樹と鈴は一步後ずさる。

なんだ、この唐突な危機のおとずれは。鈴はどうして、この笹瀬川佐々美……という舌をかみそうな名前の中少女に抵抗しないんだ。

「口だけなの？やつぱり、棗さんはお兄様や宮沢さんがいなければ——」

「——ほう。なにやら、おもしろそうなことをしているな」

そのとき、すつと場に突き刺さる矢のような、鋭く気持ちいい響きの声がした。

「……あなたは……」

振り向いた佐々美が戸惑つた。夜のように黒いつややかな髪。笑みを浮かべた薄い唇。

「追い詰められた少年と少女のもとへ、とつぜん現れた謎の美女だ」「自分で言う!?」

すらりとスリム、だが胸のあたりはグラマラスなボディにとびきりクールな切れ長の目。言葉はたしかに間違いではなく、佐々美たちも彼女にひるんでいるが。

「しかも謎じやない」

めずらしく鈴が追つてつつこむ。そうだ。だつてこの人は。

「フ」

細かいことは気にするな、と「美女」は余裕の笑みを浮かべた。

そして、理樹たちと佐々美たちの間に立ち、問題の木の幹に手を置くと、コンコン、となにかを確かめるようになります。

「この木から虫を追い出せばよいのだな？」

「う、うん」

「わかつた。では、みんな下がつて離れてくれ」

「美女」はみんなに指示をしながら自分も数メートル木から離れた。いつたい、なにが始まるのか。スッと彼女が背筋を伸ばすと、それだけで空気が張り詰めた。

「——と。

「はあああ——ツ!!」

切れ長の目を半眼にして、美女が木をめがけて突進した！

「はッ！」

ぐじやじやじやじやーーつ！

跳躍、そして足の裏全部を使つた鋭い蹴りが、木の一番太い幹に炸裂した！  
じや、じや、じやああつ……！

悲鳴のように枝葉全体を鳴らして木は大きくしなり、しかし折れ倒れることはなく、振り子のよう身を揺らしながらなんとか元の位置に近づいていく。すると、そのたびに、木の枝からばらばらと大小さまざまにイモムシが降る。

「いやああーつ！」

なかには佐々美たちが立つ場所近くまで飛んでいくものもいた。佐々美は鬼の面のよう目をむいてつりあげ、絶叫して逃げていってしまう。お仲間たちもあとに続いた。

理樹と鈴は、呆然しながら一瞬の——一撃の解決を見守つていた。

「……ふう」

一仕事終えた美女の肩にも、イモムシが一匹のつかつていた。美女は余裕で虫をつまむと、顔のすぐ前で観察した。

「食べられないよ」

「残念だ」



にやりと笑い、美女は理樹にイモムシをぽいと投げてよこした。クールな仕草で髪を整える仕草も決まつていてる。が、美女、と呼ぶのはもうくどいだろう。

「ありがとう。来ヶ谷さん」

理樹は丁寧に頭をさげた。彼女の名前は来ヶ谷唯湖。<sup>ゆいこ</sup>大人っぽくも見えるが歳は同じで、やはり理樹たちのクラスメイトだ。

「なに。ちょっとした運動不足の解消だ」

「パーフェクトな動きだつたけど」

「フ。ついでにもう少し運動するか……うん」

唯湖は遠巻きに様子を見ていた生徒たちの一人に目をやると、

「葉留佳君。職員さんから道具を借りてきてくれ」

「あいよつ」

黄色いポンポンがぴょこんと跳ねた。あれはたしか、隣のクラスの三枝葉留佳。<sup>さいりゅうか</sup>いつも騒がしく追いかけっこしているが、めずらしく？今日は追われていないらしい。

「おまちーつ」

葉留佳は一度場を離れ、すぐにトングだの帚だのをいくつも持つて戻ってきた。唯湖はそのひとつを受け取ると、落ちた虫を拾うというより狩りつくす勢いで回収した。

「お手伝いしますぜ！」

葉留佳も唯湖に協力して、ぴよいぴよい虫を拾っている。どうやら二人は親しいらしい。つながりはまつたく読めないが……いや、いまはそれより自分のことだ。本来、イモムシの回収は、理樹たちのミッションなのだから。

理樹は唯湖に負けないよう、懸命にイモムシをトングで拾う。理樹、鈴、唯湖に葉留佳も加わったため、作業は思いがけずはかどつた。

「よし。これでミッションクリアだな」

イモムシの入った麻袋をまとめて、理樹はとりあえずほつとした。

「来ヶ谷さん、三枝さん、手伝ってくれてありがとう」

鈴も、とかるく背中を押すと、鈴はウウウと首をなにかにぶつけたように動かして、

「あ…………ありが、とう…………」

うめくようにつぶやいた。とりあえず、これで精一杯らしい。

「なに。またストレス解消できる機会があれば呼んでくれ」

静かな声だが笑顔は気さくだ。日頃の唯湖は美人で優秀だが孤高の人で、いくらか近寄りがたくもあつたが、いまの一部始終からしても、案外、接しやすい人かもしれない。  
それなら……。

「どうした少年。じつと私を見つめたりして」

「あ、いえ、そんな」

「もしかして、姉御に惚れちゃいましたッ!? うひやあーつ」

「違うつてば! そうじやなく、その……よかつたら、ストレス解消できそうな心当たりがあるんだけど」

「うわーっなんだか意味深ですヨ!」

「違うつて! ていうか、よければ三枝さんも一緒にどうかな」

「私も? なになに?」

「僕らの野球チームなんだけど」

理樹は横にいる鈴を見ながら、簡単に事情を説明した。鈴はやはり唯湖にも葉留佳にも慣れないので、逃げたいのをこらえて踏ん張っているが、勧誘に抵抗もしなかつた。

「——そうか」

話を聞いて唯湖はうなずく。

「私にぴちぴちの少女たちと一緒に、しつぽりと青春の汗をかけと言うのだな?」

「そんな表現されても困るんだけど。一応、結構本気でやつてるんだよ?」

「なおよろしい。私は戦力になるぞ」

シャープな顎に人差し指をあててそっとほほえむ。リトルバスターーズに女の子のメンバーが加わったことも、言わないうちから知っていたらしい。この余裕、楽しいことが好きそうで微妙に人をくつてるところ、誰かに似ている。

「私も私も！ 戦力になるよつ！」

「たしかに逃げ足は速そうだよね」

「それだけじやないよお～相手チームのグローブを隠したりヤジを飛ばしてやる気を無くさせるのも得意だよ！」

「そういう戦力は求めてないよ……」

実際、グラウンドでテストしたところ、多少の悪ふざけをまじえながらも葉留佳はそこそこ器用に投打をこなし、唯湖はもちろん言うに及ばず、真人や恭介も感心する隙のないプレイを披露した。

「いいぞ理樹。チームは確実に前進してる」

恭介にぽんと肩を叩かれ、理樹は照れ笑いしながらほつと温かい気持ちになつた。

無茶ぶりで始めた野球チームだけど、形になつてくるとやはり楽しい。

いま七人、もしも謙吾の気が変わってくれたら八人になるからあとひとり。

試合までに、きつと搜してみせる。

「ところでさ、あの笹瀬川さんは、鈴とどういう関係なの？」

「？」

唯湖が「おつと失礼」などと言いながら真人にライナーを命中させているのを遠目にしつつ、理樹は鈴に訊いてみた。

「やけに鈴につつかつてきたからさ。鈴があの人と仲いいところもケンカしたところも見えた覚えないけど」

「あたしも知らない」

「わからないのに絡まれてるの？ なんで、あんなこと言われて言い返さないの」

「めんどくさいからだ」

「鈴……」

ぽんぽんと、鈴は恭介にもらつた滑り止めのロージンバッグを手で叩いた。

「猫だつて、人なつこいやつもいればすぐに引っ搔くやつもいる」

「そうだけどさ」

まあ鈴も、決して愛想のいいタイプじゃないしな……鈴がいいなら、僕がお節介することじやないけど。

「ぐつもーにくんえぶりばーでー」

「あ」

そこへ、キラキラした髪をふわふわと揺らして、小さなクドが大きく手を振りながらやつてきた。

「今日は、みなさんのべいすぽーるを見学したいのですが、よろしいですか？」  
「いいけどいまは放課後だよ」

「？ 知っています」

「ぐつもーにんは違うんじやないかな」

「あつ！ わふ……お恥ずかしいです……私、英語が大の苦手で……」

白い頬を赤く染めるクド。ぐつもーにんは英語が苦手の範囲でいいのだろうか。

「ところで、今日は西園さんと一緒に？」

「はいっ」

元気よくうなずくクドの傍らに、日傘をさした美魚がいた。

「お天気がいいのでお誘いしました」

「おじやまします……」

にこにこ全開のクドの後ろで、そつと頭をさげる美魚。よかつた。美魚は野球に興味があるタイプには見えないが、それでも一緒に来るというのは、クドとうまくやれている証拠だろう。  
「直枝さんのぐらうぶ、つけてみてもいいですか？」

「うん、いいよ。でも、クドの手なら鈴のグローブのほうが……つてあれ？ 鈴！」

いつのまにか鈴はその場を逃げ出し、早足でマウンドへ向かっていた。

「鈴！ もうーしようがないなあ人見知りで……ごめんねクド」

「いいえ！」

クドはめげずに理樹が渡したグローブをはめ、革のにおい、と顔を近づけ、子犬のようにキユツと目を閉じた。

——わあー。ピッチャーリんちやんですね。行くぞおー。

……。

いつぽう鈴は、逃げた先のマウンドでバッター・ポックスに立つ小毬に動搖し、ボールを握つたまま固まっていた。

「鈴！ 大丈夫だから一球投げて！ 神北さん、バット重くないですか？」

「だいじょうぶ。女子でも持てる細いものを見つけましたから」

鈴は戸惑い、逃げ場を捜してきよろきよろしたが、ファーストに恭介、サードには真人、ショートには葉留佳でいつのまにか守備が整っている。

まるで囮まれたような状態になり、鈴はふるふると腕を持ち上げ、イヤツと声をあげてボールを投げた。

「やばい！ 神なるノーコンが発動した！」

恭介が声をあげる間もなく、無駄に勢いのある速球が理樹たちめがけて飛んでくる。  
「あぶないっ！」

理樹はとつさにすぐそばにいた美魚を庇つた。球はよけたが日傘に当たつてイレギュラーな

角度でクドを直撃――

「ハツ！」

と思いきや、クドはグラブでボールをしつかりキャッチし、その勢いでスナップをきかせた返球を小気味よいリズムで恭介に送った。

「お――つ……」

まるで手もとをめがけたようなボールを恭介もなんなく受け止め、ぱし、と気持ちいい音でグラブに収める。

「おおおお……」

「ナイスプレー」

理樹は思わずクドに拍手し、半ばあっけにとられていたみんなもぱちぱち手を叩いた。

「ほわ……恥ずかしいです……」

クドはまた頬を赤く染め、困った顔になつて笑つた。

「やるじゃないか。能美、もしかして経験者か？」

恭介はじめ、みんながクドの周囲に集まつてくる。

「いいえー。いま初めて、ぐらうぶをはめました」

「まじか」

「スポーツは、おじいさまのお付き合いで、いくつかしたことがありますが」

——テニス、セパタクロー、バドミントン、スカッシュ、フライングディスク……カーリング、インディアカ、ペタンク……。

「ごめん、もういい」

聞いたこともないような名前が混じつてきて理樹は混乱した。

「ま、決まりだな。埋もれてた原石を掘り当てちまつたようだ」

恭介が理樹の肩に手を置く。ん、と理樹もうなずいて、

「クド。よかつたら、僕らと一緒に野球やらない？」

「わわわ……私がですか？」

「うん」

「べいすぼーるは、初めてですが……」

「大丈夫」

理樹はうなずき、背後で恭介、そして真人も小さくうなずく。

「クド公だつたらオレの尻をボールの的にはしねえだろう」

「嬉しいですー。さんきゅーえぶりばでー、ありがとうございます！」

小さな身体をきゅつと縮めて、クドは小さなガツツポーズをつくつて笑つた。

「これで八人だな」

「そうだね……あ」

盛りあがつているみんなの傍ら、少しはずれたところに立っている美魚と目があつた。  
美魚はペコリと頭をさげ、その場を去つて行こうとする。

「待つて！」

思わず呼び止めてしまつたが、理樹はその先がわからなかつた。

「あつ、あのう……」

どうしよう。せつかくだから美魚にも仲間になつてほしいが、クドのような予想外が続けて  
起きるとは考えにくい。クド以上にどうみても文系だし。

「気にしないでください」

理樹の表情を読み取つたのか、美魚はかすかに唇の端をあげて笑つた。

「あの、でも

「ところで」

ふいに唯湖が一步進み出てみんなに訊いた。

「野球チームに必要なものはなんだと思う？」

「ガッツと、勇気と——そして」

「友情だな。うむ、そのとおりだ小毬君。だが、もう一つ必要なものがある

言いかけた小毬を途中で引き取り、唯湖はすつと人さし指をたてた。

「ほう。なんだ？」

恭介が訊く。なんだろう、すでに打ち合わせぬのようなこの空気。

「可愛らしい女子マネージャーが必要だろう」

「なるほど！」

恭介がぽんと拳でてのひらを叩く。あ、そうか。理樹も流れに納得した。それなら……とりあえず、誘つてみる価値はあるかも。

「そういうわけで、美魚君よろしく」

唯湖は美魚の前に立ち、ぽんと肩に手をおいた。

「…………あの…………？」

「理樹」

恭介にかるく背中を押され、理樹は一步前に出た。そして、わずかに唇を開いたまま、事態を把握できずにいるらしい美魚に、

「西園さん。僕らの——リトルバスターーズのマネージャー、やりませんか」

「マネージャー？ 僕らの…………？」

唐突な誘いに美魚は戸惑いを隠せないようだ。そもそもそうだな。

が、答えを求めるかのようにみんなを順に見ていた美魚は、やがて、なぜか頬をうつすらと赤らめて、小さくコクリとうなずいた。

「なるほど……棗さんは女生徒の人気も高く、直枝さんのベビーフェイスは一部の趣味の方

には有効ですね。井ノ原さんは……ちょっと難しいかもしませんが、あの筋肉はよりデイ一  
ブな濃い層にアピールするかもしません」

「え？」

「わかりました。お引き受けしましよう」

美魚はらしくないほどきつぱりと、力強い言葉でうなずいた。

「直枝さんは棗さんと組んでいただいて……棗×直枝……これは……」

しかも謎の呪文までつぶやいている。

「あの、大丈夫かな？ 僕らが誘つてるのは野球チームのマネージャーだけど」

「野球……？ あつ、そういえば……」

美魚はかあつと真つ赤になり、す、すみませんと肩をすくめた。

「いつたいなんだと思つていたの？」

「……アイドルのグループかと」

「この流れでそこ！」

「すみません」

恐縮する美魚に、理樹はつい笑みを浮かべてしまう。じつは思い込み激しいというか、クー  
ルなように見えるけど、こんな一面もあるんだなあ。

「野球じや、やつぱりお断りかな」

「——いえ」

美魚は薄い唇を噛んで顔をあげる。

「勘違いとはいへ、一度は『はい』と口にした言葉は打ち消せません」

「いいの？ 無理しなくてもいいんだよ？」

「……本当に嫌なら、お断りしています」

美魚はわずかにほほえんだ。やつた！

「よし。それじゃ、マネージャーから、何か一言」

恭介が手を出して促すと美魚はぱつりと、  
「おおーっ！」

みんな思わず拍手をする。

「熱いつすね」

「よろしくね！ 一緒にがんばろう！」

「よろしくなのですー！」

「可愛らしい応援と熱い視線、よろしく」

最後の唯湖はちょっと違う気もするが、みんな素直に歓迎ムードだ。

「ようし。このメンバーで決まりだな」

「決まりつて、西園はプレイしないんだから八人だろ。それに、女ばつかでちょっとバランスおかしくね？」

「いや、これでいい。もう一人の席は空けておく」

「……」

きつぱりと言う恭介の意図を、理樹はなんとなく察知した。そうだ。たとえ野球をしなくてもないことはまだ言い切れないが——僕らのチーム名からすれば、残るメンバーは決まっている。

「いいな？ みんな」

恭介が一同を見渡した。また。わくわくする、楽しいことを始める少年の目だ。

「これが俺たちのチーム」

——リトルバスターズだ！

こうして、理樹たちは新生リトルバスターズとしてスタートした。  
不安と期待、これだけを集めた達成感で、理樹の心は高揚した。  
だから……。

世界の秘密を教えるといい、結果としてこのメンバーを集めきつかけにもなったミッショ  
ンを伝えてきた誰かのことは、このとき、心から抜け落ちていた。

Mission  
3

星に願うこと



試合の日は快晴。気温も高すぎず低すぎず、風はマウンドからみてやや追い風。

「絶好の野球日和だな」

空を見上げてほほえむ恭介。すでにウサギ飛びでアップを始めている真人。

「いよいよか……。」

「あ、来ました」

美魚がバックネットの向こうを指さす。そういえば、恭介からすでに決めてあると聞いただけ、どんな相手か知らなかつた。彼らが、リトルバスターズの初試合の一。

「つて、ええ!?」

理樹は思わず絶叫した。こちらへ歩いてくる人々は、真人にはいくらか及ばないものの、見あげる長身、盛りあがつた筋肉、鍛えられた男たちばかりじやないか。

「なんで!? これ、草野球チームの試合だよね。あつちも野球は素人だよね?」

「ああ、素人だ。野球以外の運動部の精銳に声をかけたからな」

「しつれつと言う!?」

どうするんだ。ただできえ、こちらは非力な女の子が多い集まりなのに。  
理樹は一番隅の目立たない場所に立つていてる鈴に目をとめた。

「鈴」

呼んだが鈴は振り向かない。聞こえているだろうに顔もあげない。

「直枝さん」

鈴へ近づこうとした理樹を美魚が呼び止めた。

「みんな、ガチガチです」

「え？」

美魚の視線を追つてみると、クドと小毬が一生懸命肩を上下しながら顔をこわばらせてつぶやいていた。

「わふー、緊張の夏なのです……」

「うーん、私もすっごい緊張してきたよ……」

……まずい。鈴だけじゃないんだ。無理もない、初試合で相手があの強面軍団では。

「理樹」

自分も緊張してきた理樹を、恭介がかるく手をあげて呼んだ。

「今日はおまえがキヤプテンだからな」

「えええ!」

「その上、おまえが監督だ。キヤプテン兼監督、代打オレ。どうだ、かつこいいだろう」

「冗談じやないよ！ どうして僕が？ そもそもなんで、あんな強そうな相手なの？」

訴える理樹に恭介はウンウンとうなづいて、

「そのほうが、勝つたときに爽快じやないか」

本当にただ楽しそうに、唇の端をあげて笑つた。

「……ああ……」

この笑顔が出るともうだめなんだ。理樹は経験でよく知つてゐる。あとはもう、楽しむほう

へ気持ちを切り替える以外にない。

「だけど、みんな緊張してて……」

「そういうときは、号令だな」

「号令？」

「号令！ いち！ にー！ とかやるだろう。あれは士気を高め、連帯感を強める効果がある」

「へ、へえ……そうか……」

「やつてみろ、理樹」

背中を押され、理樹は一步前に進み出た。みんなの視線がふつと集まる。ひるみながら、理樹はこつそり深呼吸した。そうだ。僕らは、楽しむために集まつたんだ。勝ち負けより、まずは楽しむことを考えよう。

「みんな、号令だ！」

背を伸ばし、理樹はお腹から声を出す。気持ちいい。

「恭介！」

「いち！」

「神北さん！」

「ふえ？」

「来ヶ谷さん！」

「なんだ」

「三枝さん！」

「はつ」

「クド！」

「わふー！」

「クド！」

「……見えてるだろ」

「西園さん……」

「はい？ わたしですか？」

「……ま……真人……」

「わりいな理樹……オレひとりでも応じてやりたかつたが、すでにオレが何番なのかわから

「ねえよ……」

「ダメだ……いや。せめて一言……なにか……。」

「が、頑張ろう……」

ガクリ。なんだこの情けないまとめ方。やつぱり僕がキヤプテンじゃ……。

「うん、頑張ろう」

神北さん……。

「そうだねー、張り切って行きまつしょー」

「がんばるのですつ！」

三枝さん……クドも……。

「ふふ」

唯湖が笑った。

「結局全員、キミを中心に集まってきたということさ」

「来ヶ谷さん……」

実感はないが、たしかにさつきより空気が軽くなっている。ようし。行こう。みんなを信じて！

「理樹」

最後に鈴が一言だけ言った。顔はうつむいたままだが、  
「頑張るぞ」

それはもう、たいへんでさんざんな試合だつた。

まず鈴が、ストライクゾーンにボールを入れることが稀だつた。おかげでホームランも出なかつたが、守備はぼろぼろ、打席もめちやくちや。まぐれで当てた小毬が三塁側へ力走し、クドはせつかくヒットを打つても前のランナーを追い越してアウト。

野球の得点と思えない数字が並ぶスコアボードを見て、

「ふふふ……なかなかに壊しがいのありそうなやつらだな。五体満足で帰していいのか？」  
唯湖が底光りする目で笑うと横で葉留佳も、

「とりあえず、スペイクに画鋲がお約束ですかね？」

「それはやめてよ二人とも！ 野球の試合だつて忘れないでね」  
キヤプテンとして奔走したのがこんな場面でいいのだろうか。

——しかし、それでも楽しかつた。

みんなで一つのボールを追いかけ、声をかけあい、たまに出るナイスプレーに拍手する。  
試合のあとは汗や埃にまみれていたが、誰も気にする様子はなかつた。  
結果は大差で負けだつたのに、恭介が言つたとおり爽快だつた。

「まー、悔しくないといえ巴嘘になりますけどネ」

「着替えを終えて、グラウンドに再び集まつたところで葉留佳が口火をきつた。

「あと少しで逆転だつたからな!!」

「三十六点は真人のなかでは少しの点差だつたらしい。

「まあ、べつによいではないか」

汗を流しシャンプーをしたらしく、いい香りのまつすぐな髪をなびかせて唯湖が笑う。

「私たちは、勝つために集まつたわけではないだろう?」

「うん。私は、すつごく楽しかつたよ〜」

「そうです。みんながんばつたのです。それはとても価値のあることだと思います」

セーターの袖と一緒に拳を握つて笑顔の小毬。隣のクドの膝小僧には、擦り傷を手当した紺創膏。

「……青春」

ほつとつぶやく、クドに紺創膏を貼つたのは美魚だ。

「ようし! これからみんなでラーメンを食べに行くぞ!」

「おおお!」

「うわあー」

「試合のあとでラーメンを吃るのはどんな青春ものでも大切だからな」

そうだつたかな。理樹にはよくわからないがたしかにお腹は減つてゐるから、恭介の提案は魅力的だつた。

くう、と小さな音が聞こえて振り向くと、今までなにも言わなかつた鈴が、顔を赤くしながら腹をおさえていた。

遠慮しちやつて。僕と恭介、真人だけだつたらいまごろ一番に騒いでるだろうに。

理樹は誰にも見られないように苦笑し、さりげなく鈴の隣へ行つた。鈴は無愛想な上目づかいをしたが、理樹にかるく背中を押されても、後ずさりはしなかつた。

「行くなら替え玉のある店だな！」

「真人はスープ無くなるまで替えるから……」

「駅裏の赤いのれんがある店がうまいと聞いたぞ」

「いいな。のれんに『ラ』『ー』『メ』『ン』と一文字ずつ書いてあるあれだな」

夕暮れの道を、ひとかたまりになつて騒がしく歩いて行く。

あたたかい光に背を押され、足下の長い影を見て、理樹の心は満ち足りていた。

「みなさん、今日もがんばつてください」

「いえす、まいろーどつ」

「バツチリですヨ！」

試合後のリトルバスターズは、より熱く楽しく練習するようになつていた。

「まかせろ」

「もつと熱くなろうぜ」

「ふつ……筋肉がうなる！ うなりをあげ——ぐあつ！」

熱いノーコンが真人の尻で炸裂した！

「すまん」

「くう……オレの大臀筋が火を噴くぜ……」

……決して、技術が向上したとはいえないが……。

「次はどこと試合をする、キヤブテン」

恭介が理樹の肩にちよつと疲れた肘をのせた。

「終わつたばかりなのにもう次なの？」

「そのほうが熱くなれるじやないか」

「うん……でも……」

相変わらずの恭介だが、理樹には次の試合より前に、気になることが二つあつた。

一つは、鈴のこと。

「ふにやつ！ うにやつ！」

全力でストライクゾーンを狙つて投げたつもりが、

「ぐおーつ！」

なぜかバッターボックス脇の真人に再び命中してしまうという、神なるノーコンはまあいいのだが（よくねえよ！と真人の声が聞こえそうだが）。

「どんとまーいんです、鈴さん！」

「はるちんも筆のあやまり！ 鈴ちゃんも球のあやまりですヨ！」

「あ……う……ん」

暴投しても気にならないのに、クドたちに声をかけられると真っ赤になつて、ふるふるうなづくのがやつとの鈴。チームも野球も決して嫌いではないはずなのに、あの人見知りは、もうちよつとどうにかならないだろうか。

そして、もうひとつ……。

「今日も小毬さんはお休みですね」

マネージャーの美魚がそつと声をかけてきた。

「うん……」

「直枝さんは、なにか理由をご存じですか？」

「ごめん。僕も知らないんだ」

このごろ、小毬が練習を休みがちだ。授業が終わると、二度に一度は早足で学校から消えて

しまう。

家の事情でもあるのだろうか？ もしそうなら、詮索するのも良くないが……。

「鈴も小毬がいてくれたら、もうちょっと溶け込めそうなんだがな」

恭介が理樹の横でそつと息をつく。

「あ、うん……」

そういえば、鈴のことを一番気にかけて、積極的に話しかけるのは小毬だつた。

荷が重いけど、ここはやつぱりキャプテンとして——試合の日だけだと思つていたら、な  
しくずしに就任させられてしまつた——事情を訊いてみるべきだろうか。

「僕、明日にでも神北さんと話してみるよ」

「そうか。頼むぞ」

恭介のほつとしたような顔を見て、理樹は逆にくつと気持ちを引き締めた。

「神北さ……」

よしと決意し、小毬に声をかけようとしたが姿がない。

「あれ？ 神北さんは？ いまいたのに」

「急いでたみたいよ。走つて教室を出て行つた」

近くの席の女生徒に言われ、理樹もあわてて小毬を追つた。人の多い放課後の廊下の向こうに、チラリと赤いリボンの裾が揺れている。

「神北さん！ 待つて！」

休むにしてもせめて事情を聞かせてほしい。しかし小毬は、理樹の精一杯の呼びかけにもかかわらず、一目散に学校を出て、早足でどこかへ向かっていく。

「小毬さん!!」

理樹はダッシュし、相當に息を切らしながら、ようやく小毬に追いついた。

「ほえー？ 理樹君？」

口調はいつもと変わらないのんびりなのに、早足を止めようとしている小毬。

「あ、あの、じつは僕、つ」

息が切れてもうまく言葉が出てこない。すると、

「わかつた！ うんうん。理樹君ならそうしてくれるよね」

「は？」

「よかつたあ……よし！ じゃあますます急いで行こう！」

「え？ あの、神北さ……」

僕の話聞いてる？ と言わせる間もなく、小毬は理樹の腕をとり、らしくないほどの力でぐ

いぐい引っ張つて歩いて行く。

「ちよつと、あの……えつと……あー……はあう……」

ようやく小毬の足が止まつたのは、もう学校からずいぶんと離れた、静かな住宅街の一角にある建物の前だつた。外觀からして学校、あるいは公共施設だらうか？

「こんにちはー！」

「ああ！ 来た来た、小毬ちゃん！」

「みんな、小毬ちゃん來たよ！」

なかはフランクトな広いロビーで、元気よく扉をあけた小毬を待ちかねたように迎えたのは、みんなお年寄りだつた。

「今日は、ちよつぴり遅れたぶん、強力な助つ人を連れてきました」

じやーん。と、小毬は理樹の後ろにまわり、かるく背中を押し出した。

「え？ あの……えつと……」

「ほおー！」

「ずいぶんとかわいい子じやないの。男前、にはちよつと足りないかねえ」

あはははは、と場が笑いに包まる。車椅子の人もパジャマ姿の人もいるが、表情はみんな明るかつた。

「小毬ちゃんの彼氏かい？」

「ええッ!! え、うわあー、それは、ち、ちがッ……」

ばたばたと手を振り、小毬は真っ赤になつて動搖した。

「す、す、助つ人ですう……！」

それじや、理樹君、よろしくねつ！」

「え。そんな。待つて！」

理樹は走つて逃げる小毬を追いかけ、廊下の隅でつかまえた。おうおう、若いねえなどとお年寄りたちの声が聞こえるが、そつちはとりあえずあとまわしだ。

「小毬さん。ごめん、僕、本気でわけがわからない」

「ほえ？」

「あのね。僕は、神北さんがこのごろ練習を休みがちなわけを、教えてもらうつもりだつたの。そうしたら、いつのまにかここへ連れて来られて……」

ここは——見たところ、老人ホームか、高齢者専門の療養施設だ。小毬の様子からすると、ここでなにか、手伝いをしているようだが……。

「——あ

小毬は指を唇にあて、いつたんかるく目をひらくと、みるみる肩を落として恐縮した。

「そ、そうだつた……ごめん……私、てつきり、理樹君が一緒にボランティアに来てくれるんだつて……ごめんね！」

すごい勘違いに普通は驚くが、小毬だと思うと腹はたたなかつた。

「あやまらなくていいよ。ボランティアって？ 小毬さん、ここにそれで来ているの？」

「うん。学校の福祉委員会の人たちも来るんだけど、このごろ、人が少なくなつて」

それで練習を抜けていたのか。

「でも、特別なことはしていないの。理樹君にもできるよ？」

「え、いや僕はとても。介護の経験なんてまつたく無いし」

「私も。だから、おはなしするの」

——さみしがつてる人、多いんだ。

と、小毬は少し声をひそめてから、あたりを励ますような笑みを浮かべた。

「おはなしするの楽しいし、さびしくもなくなつて、すつごいステキ」

「……」

理樹はさつきのお年寄りたちを思い浮かべた。初対面の理樹を訝しむでもなく、みんな嬉しそうに集まつてきて……。

「ね？ だから、一緒にやろう」

「え……うーん……そうだなあ……」

いくらなんでも突然じやないか。小毬の言うこともわかるのだが。

「ね？」

「うん。そうだ。わかつた」

「わーい。やつたあー」

小毬はぱちぱち手を叩いた。が、理樹にはやはり、ボランティアをうまくやる自信はまつたくない。それでもやつてみることにしたのは、小毬のあたたかな日だまりのような心に触れて心地よかつたのと、もうひとつ。あることを思いついたからだ。

「おつかれさまでした♪」

理樹が小毬と老人ホームをあとにしたのは、もう日も暮れる頃だつた。

「今日はどうでしたか？」

「楽しかつたよ。その……うまくやれたとはとても思えないけど」

夕日がオレンジに照らす河原を並んで歩く、寮への帰り道。

「お年寄りには、かえつて気を遣わせたかもしれない。部屋の掃除も不慣れだつたし、会話らしい会話もできなかつたし」

そんな理樹を励ますように、ホームの人たちは理樹に笑いかけ、向こうから話をしてくれた。「僕のほうが、むしろ、あつたかい気持ちになれてありがとうというか」

「うんうん。そうだよね」

小毬が深くうなずくと、星の髪かざりをつけた赤いリボンがひらひら揺れた。

「誰かを幸せにするつていうのは、自分が幸せになることなんだよ」

まるで魔法の呪文のように、たてた人差し指をくるくる回すと、

「これ、幸せのスペイラル！」

小毬の髪やリボンが夕日にきらきら輝いて、本当に、魔法にかけられたみたいだつた。

「……そつか」

理樹は笑つてうなずいた。

「それなら……僕からも、小毬さんにお願いというか……提案したいことがあるんだ

「ほえ？」

「小毬さんの言う、幸せスペイラルになるかどうかは、わからないけど

理樹は少し前に思いついた考えを小毬に話した。

「……」

小毬は澄んだ大きな目を見開いて、じつと理樹の話を聞いていた。そして、ウン、とこつくりうなずいた。

「わっかりましたっ！ りよおかげですっ」

ぴしつと——のつもりだろうがちょっとズレた場所で敬礼し、小毬は理樹の提案を受け入れ

た。よし、と小さくガツツポーズのおまけもつけた。

「でね」

話も決まり、男女分かれる寮の玄関の少し手前で、小毬がふつと足を止めた。  
「これからも『理樹君』て呼んでいいですか」

「え？」

「私のことも名前で呼んでくれて嬉しいです」

「あっ！ それはその……」

あやまつていいかどうかともわからずに、理樹はしどろもどろした。今日はいろいろと慌てて  
いるうちに、いつの間にか、呼び方が近くなつていた。

「じゃあ、また明日ね。理樹君」

頬を染め、小毬が垂れ目をさらにさげそうなふにや顔で笑つた。

「わかつた。明日ね」

——小毬さん。

「よう一しつ！ 今日も筋肉の特訓だな！」

「普通に野球の練習だよ……」

「まじか。オレの大臀筋大胸筋が——つてどこ行くんだ理樹」

「僕は、今日はちょっと用事で」

「……」

「気の抜けた顔の真人にゴメンと軽く手をあげ、理樹が教室を出ようとすると、  
「どこへ行く」

鈴が出口で仁王立ちしていた。

「言えないところなのか」

「というわけじゃないけど……まあ、ちょっとしたミッション、かな」

「ミッショーン」

思いつきだが口にしてみるとまさにそれだつた。

「だから、僕がいなくても、鈴は練習がんばつてね」

「りんちゃん。一緒に練習行きましょう！」

「うわあつ！」

とつぜん背後からかるく抱きつかれて、鈴は髪をさかだてそうな勢いで悲鳴をあげた。

「じゃ、小毬さん。よろしくお願ひします」

「はあ／＼い」

「り……」

固まる鈴をその場において、理樹は予定どおり老人ホームへ向かう。

——ホームのボランティアには僕が行く。小毬さんは、そのぶん、チームの練習に出てほしいんだ。

それが理樹の小毬に向けた提案だつた。リトルバスターーズのチームのために——鈴が理樹や恭介以外のメンバーと距離を縮められるように。あと、正直なところ、小毬の実力ももう少しレベルアップしてほしいという思いもあつた。

とはいえ……。

「みんな、小毬ちゃんの彼氏だよ」

「あらあら今日は一人なの？ ごめんねえここはおばあちゃんばかりで」

「なに言つてるのよアンタ恥ずかしい、直枝くん迷惑してるじゃないの、ねえ？」

「あ……あはは……」

行つたとたんにお年寄りたちに囲まれてしまい、ボランティアというよりいじられキャラになつてゐるのは気のせいだろうか。まあ、仕事の点ではほとんど役にたたないのだし、ここの人たちが楽しんでくれれば、ミッションは成功なのだろうが。

「失礼しまーす」

手厚い？歓迎をどうにか乗り越え、理樹は清掃用具をもつて各部屋をまわつた。上手な会話はできなかつたが、それなりに落ち着いた時間は持てた。

理樹は少しだけ自信をつけて、次の部屋のドアをノックした。

「こんにちは！」

返事がない。眠っているのかな？ でも、ドアはかすかに開いている。それなら、そつと中に入つて掃除だけでもさせてもらうか……。

すみません……失礼しま——

「うわわわわわ!?」

いきなりメッタ打ちのような怒号がとんで、理樹は驚いて木の葉のようにくるくる回りなが  
ら後ずさつた。

• 8

部屋中に響く大声の余韻が消えるまでには一秒かかつた。かるく目がまわつた。

「……なんだ？ 男か。きさま一人か？」

深呼吸してなかを見る。

部屋にいたのは声の大きさと比例しない、痩せてやや小柄な老人だつた。

「一人です。あの、お掃除をさせてもらおうと思いまして」

まだ心臓はどきどきしているが、とりあえず、理樹は控えめに用件を話した。

「掃除？ んなもんは要らんわい。瘦せても枯れてもこの小次郎こじろう、小僧に下からものを頼むほど落ちぶれておらぬわ」

「……そうですか。まあでも勝手にやりますからね」

頑固かんこつそうだが大きな目はきれいに輝いて、悪い人には見えなかつた。ただ、これだけ元氣がある人なら、余計ないたわりはむしろ不快にさせるだろう。

理樹は勝手に床のゴミを拾つて窓の拭き掃除を大まかに始めた。また怒られるかもしれないが、なにもしていないので怒鳴られて、そのまま逃げるのはいやだ。

「おかしな小僧じやな。わしが必要ないと言つてゐるのに」

「僕は自分が気持ちよくなるように動いてるだけです」

「はあ？ なんじやその勝手な理屈は」

「友だちの理論を借りたんですけど」

理樹は小次郎を見ずに掃除を進める。

人のためになることをすると、自分も幸せになるスパイアル。

「……小娘か」

「え？」

「あの小娘の理屈じやろう」

「もしかして、小毬さんのことです」

「うわあああああ!!」

な、なんなんだ！ いまのはあまりにもふいうちすぎる。

「その名前をわしの前で口にするな」

え、でもだつて、先にこ……僕の友だちのこと言い出したのはおじいさんで

「誰がじいさんじや！ 小次郎さんと呼べ」

「誰がどう見てもおじいさんでしょ」

髪は白いし顔には皺。目は活き活きして、武道でもやつていたようにしゃんとしてるけど。

一  
心はいつでも十代じや」

んじやダメ口きいてもいいんだ

めんどくさい！

話がちつとも進まないぢやないか。理樹はかつくり肩を落とし、じんじんする耳の奥が落ちくのを待つて再開した。

「……きらいなんですか。彼女のこと」

「いや」

「じゃあどうして」

「名前も口にするななんて。

「とにかく、わしはある小娘と関わりとうない」

「もしかして、これまでもずっとそうしてきましたですか」

小次郎は目を伏せ唇を曲げる表情でそうだと答えた。やはり、さつきのものすごい怒号で、小毬の訪問を拒んでいたのだ。

「あんなにいい子なのに」

どんな理由か知らないが、怒鳴られる小毬はつらいだろう。泣いてしまったかも知れない。

「いい子だつたら、余計にいかん」

「……小次郎さん、もしかして小毬さんと何か関係があ……」

しまつた、また怒号が降つてくる。理樹は唇を噛んで目を閉じた。が、

「——言うな」

返ってきたのはひどく静かなつぶやきだつた。なのに怒鳴られるよりずつと重く、理樹の心にのしかかつてき。あの、とようやく口のなかだけでつぶやいてみたが、理樹はその先の言葉が出ない。怒鳴っているときはものすごく元気そうなのに、そうしてしんみり黙つていると、小次郎はとても小さく見えた。

「失礼します」

頭をさげ、理樹はそのまま部屋を出た。小次郎は黙つて窓の外を見ていた。

あんな人が、あの老人ホームにいたなんて。

小毬さんのほうは、小次郎さんがあんな態度を取る理由を知つてゐるのかな？ 僕にはなにも言わないけど、本当は、小毬さんも気にしてゐるのかも……。

「よう、理樹」

考えながら昼休みの廊下を歩いていると、向こうから来た恭介とばつたり会つた。

「どうだ？ ボランティア、がんばつてるか」

恭介には事情を話してある。

「まあまあかな」

その後も何度もホームへ行つて、いつのまにか、小次郎とも（遠慮無く文句を言い合うことをそう言つていなら）打ち解けている理樹なのだが、お年寄りの役にたててゐるかどうかはわからない。

「こつちはなかなか順調だぞ」

「ほんとに？」

「ああ」

恭介は楽しそうにうなずいて、

「昨日は鈴が頭上に投げたボールをジャンプした小毬が打つて真人の尻に当てるという、見事な連携プレーを完成させた」

「それは順調って言えるのかな……」

真人の尻がいい加減心配になつてきた。

「そして小毬は次の作戦を遂行すべく、屋上で鈴と会議をしている」

「え？」

恭介はすつと指をたてて上を——屋上を示した。それつて、いま鈴が、小毬さんと一人で屋上にいるつてこと？

目で問うと、恭介はにやつとしてうなずいた。そうか、それはたしかに順調だ。理樹は秘密の贈り物を告げられた子どものようにドキドキし、二人の様子を見てみたくなつた。だけど、僕が行つたらおじやまかな。せつかく鈴が友だちを作れそうなのに、僕がうつかり関わると、また元に戻つてしまうかもしれない。

「小毬はお菓子を袋にいっぱい持つてたぞ」

いつ見たのだろう、恭介はよくチェックしていた。

「それって、鈴と小毬さんじや、食べきれないかもしないってこと？」

「まあ、女の子はお菓子が好きだから、案外いけるかもしれないがな」

「そつか。わかつた。ありがとう」

行きたいなら行つてもいいんじやないか、というニュアンスを受け取り、理樹は恭介と別れて屋上へ向かつた。

窓の鍵は今日もはずれていた。外の風はあたたかく、耳にボウボウと鳴つて心地良い。脅かさないようにそつと歩いて、理樹は小毬のベストプレイス——給水タンクの脇を目指した。

——それは、こ……小毬、ちゃん、の、作つたお話なのか？

フェンスの向こうで、ぎくしゃくしながら懸命に話す鈴の声が聞こえた。

「ううん。おにいちゃんが聞かせてくれたお話」

ゆつくりと、穏やかな小毬の声も聞こえてきた。

おにいちゃん……小毬さんから初めて聞く言葉だ。

「ほしをめざした、ぺんぎんさん……？」

「うん。おにいちゃんはね、お話が得意で、私に、たくさん聞かせてくれたよ。絵本も作つてくれたんだ」

「絵本」



「うん。あのね。にわとりさんと、ひよこさんと、たまごの話」  
 鈴と小毬は話に夢中で、陰から見ている理樹に気づかないらしい。理樹もこの空気を変えて  
 しまうのがもつたいたくて、そのまま、そつと話を聞いた。

——たまごからひよこさんが孵つて、ひよこはにわとりさんになるの。  
 にわとりさんがたまごを産んで、たまごがまたひよこさんになる。

でも、にわとりさんもひよこさんも三歩あるくと全部忘れちゃう。  
 にわとりさんは、ひよこさんを忘れちゃうし、ひよこさんは、たまごのことを忘れちゃう

……。

「ずーっと繰り返してくんだ、忘れちゃうこと」

鈴がせつなそうに目を伏せる。小毬も小さく息をついた。なんだか深い内容だな……。そつ  
 と聞く理樹も思わず内心でうなつてしまう。

「でも」

小毬はことさら柔らかく笑つた。

——最後に、にわとりさんがたまごを見て思い出すの。「ぼくはこれだつたんだ」つて。

「それで、最後はそのたまごからひよこが顔を出して終わり」

小毬が鈴にほほえみかけ、鈴はなんだか照れたように頬を赤くした。

「いまのお話はおもしろくなかったかな」

「そんなことはない」

「そつか。それじや、フルーツグミをどうぞ？」

小毬はカラフルなグミを袋から出して、鈴の手に載せた。鈴は用心深い猫のようにしばしばミを観察して見つめたが、えいとばかりに口に入れた。ほっぺを膨らませてちょっと笑う。おいしいらしい。

「にわとりさんについて歩くひよこさんの絵がかわいかつたなあ……」

小毬もグミを食べながら、ひとさし指を頸にあてて遠くを見た。

そうか。小毬さんは、絵本をつくってくれるようなお兄さんがいたんだな。きっと、小毬さんの優しさも、お兄さんに似ているんだ。

にわとりとたまごの話はかわいいだけでなくどこかさみしく、哲学的なものさえ感じさせる。それだけ、お兄さんは懐の深い人なのだろう。

会つたこともない小毬の兄に、理樹は尊敬の念をいだいた。

「いいお兄ちゃんだな」

鈴もぽつりとつぶやいた。自分の兄と比べてるのかな、と理樹はつい笑いを浮かべてしまう。妹同士か。なんだかいな。

やつぱり、声はかけないでおこう。理樹は心をなごませてくれた二人に感謝し、音をたてないようその場を去つた。

「りきくんつ」

放課後、やけに気合いの入った様子の小毬が声をかけてきた。

「あつ、あの。今日はね、ボランティア、人が足りているからだいじょうぶだつて」

「そつか」

「なら久しぶりに練習できるな。よし、僕も小毬さんに負けずに気合い入れるか。」

「でつ、でねつ」

「うんつ、なにつ？」

「まねしないでえ！」

「調子を合わせると、急にへこたれた。なんなんだ。」

「あ、あのね——こつ」

言いかけて喉がつまつたらしく、小毬は小さい鼻の穴からフーンッと細く息をふいた。

「こ、今度の、日曜日は、あ、空いてますか？」

「……空いてるけど」

「なら、その、あの、ボランティア、代わってくれたお礼というか……その……よかつたら、

その……でつ——で——」

「で？」

「で……出かけるときは忘れずにつ！」

「……なにを？」

「うわあああー、違ううううー！」

ものすごい勢いで赤くなる小毬。頭をかかえてしまふ。どうしたんだ。

「こまりさ——うわつ！」

いてえ！

「うわわごめんなさいデート行きませんか？」

「ふへ？」

様子を見ようとかがみこんだら顔をあげた小毬の頭が頸にぶつかり悶絶しかけたところヘデータの誘いだ。理樹はまじでなにが起きているのかわからなかつた。前にもこんな、よくわからぬままに、小毬に引きずられてしまつたような……。

「ほわあー、やつぱり恥ずかしいつ……！」

「いいけど、行くならどこ行こうか？」

「ふええー、そんな落ち着かれてもー！」

「いやだつて、小毬さんがそこまで緊張してたら、落ち着くしか……」  
いてて。まだよつとしやべると頸が痛い。

「あ。あのね。ちょっと遠いけど、きれいなところがあるの」

まだ頬を赤くしたままで、小毬はめずらしく早口になつた。秘密だから、まわりに聞かれまいとするように。

「静かでね……縁がいつぱいあつて……」

「よさそだね。僕と行つてもいいの？」

「うん」

「じゃあ、日曜日はよろしくね。デ」

「それは言わないでえええ!!」

絶叫しながらばたばた手を振つて小毬は逃げていつた。どうしろと……。

でも、たしかにちよつとどきどきするな。鈴以外の女の子と、一人きりで一日過ごすなんて。

「なんだ理樹。にやにやして」  
わ、その鈴に見つかつた。

「えつそんな。にやにやなんて、してないよ」  
たぶん。

日曜日は朝からいい天気だつた。前の晩は雨で心配だつたが晴れて良かつた。待ち合わせの校門前には五分前に着いたが、小毬はすでに来て待つていた。

「ごめん、待つた？」

「ううん、いま来たとこ」

答えて小毬はほやつと笑う唇に指をあて、「えへへ、これ一回言つてみたかたんだ」

朝からご満悦らしかつた。今日は私服で、小毬は小さなフリルがたくさんついたブラウスにふわりとひろがる甘いスカート、襟には細い黒のリボン。いかにもメルヘンな小毬らしくて似合つている。が、理樹はごくあたりまえのTシャツ+襟シャツにジーパンだ。これでふたり並ぶのはどうだろうか。

「それじゃ、行きましょう」

小毬は服装のギャップをまるで気にしない様子で歩き出した。ならいいか、と理樹も少しあとに続いた。

「お天気になつてよかつたね」

「うん」

景色のいいところらしいから、雨より晴れているほうが楽しいだろう。

「今日行くところは、小毬さんの知つている場所なんだよね」

「うん」

「前に行つたことがあるの？」

「うん？ うん。そうだね」

小毬はちょっと不思議な反応をした。行つたことあつたつけ、とみずから確認するような。「どうしてそこへ僕と行こうと思ったの？」

「えつとね……理樹君が、ボランティアがんばつてくれるから。お礼つていうか、私も嬉しかつたから……それで、あの湖を、理樹君と見たいなつて」

「湖なんだ」

小毬の説明は答えになつてなかつたが、とくに理由はないのかもしれない。

駅に着き、改札を抜けて理樹と小毬は電車に乗つた。休日の午前中といふ時間のせいか、車内は驚くほどすいていた。

「今日行くの……私の、思い出の場所なんだ」

途切れがちの会話をそつとつなぐように、小毬が窓の外を見ながら言う。

「昔、近くに住んでたの」

「そつか」

窓の外に流れる平和な景色と、列車の振動が心地良い。理樹はつい、うつらうつら眠くなつてしまふ。

「それでね……」

「……」

小穂さん、ごめん。僕ちょっと、眠くなってきた。

これは病気の——ナルコレプシーの発作じやないよ。穏やかで、静かで、やわらかな小穂さんと二人だから……。

かるく揺すられて目を覚ますと、電車は見知らぬ駅のホームに停まっていた。

「ごめん。僕、ずっと寝てた？」

「だいじょうぶ」

長く停車する駅らしく、理樹たちが降りても電車はホームに停車していた。空気がすんで、近くの山の緑がまぶしい。たしかにとてもいいところだ。見るかぎり、ほかに人はいなかつたが、理樹が眠っているあいだに降りたのだろう。

「バスもあるけど、あまり遠くないから、歩いていこう」

小穂の提案に沿って歩いた。街はやはり静かで、ゆっくりと時間が流れているようだ。

「このあたりに小穂さんは住んでたの」

「うん。といつても、あまりよく覚えてないんだけど」

——ただ、景色がきれいだつたのと、この街が好きだつたことは覚えているの。こうして歩くと、行きたいところに、しぜんと足が向いてくれる。

小毬の言葉どおりにやがて目の前の景色が開け、青い湖が見えてきた。

「いいところだね……」

山の緑を湖面にうつした、澄んだ湖。風が水面をかるく揺らすと、太陽の光を反射して、小波がキラキラ光つて踊る。深く空気を吸い込むと、甘く涼しい香りがした。

「……」

小毬は湖の向こうを見ていた。対岸には緑の山がそびえ、山あいに白い建物が見える。その目がなんだかせつないようで、理樹は声をかけるのをためらつた。

「あ」

「ん？」

「あれ。ボート乗り場があるよ、理樹君」

につこり笑つて指さす小毬。さつき一瞬、ひどくさみしげに見えたのは、理樹の勘違いだったのか。

「よし。じゃ、せつかくだから乗ろうか」

ボートはペダルでこぐ白鳥ではなく、昔ながらの手こぎ式だった。そのせいか、他に乗つている人も見かけず、湖は二人の貸し切りだつた。

「ふー……」

しかし、オールを手でこぎ続けるのはけつこうきつい。方向もうまく定まらなくて、白いボ

ートはさまようように進んでいく。かつこわるいな、と理樹はしじめたが、小毬はずつと楽しげだつた。ふんふんと歌を歌つたり、水面に魚を見つけたり。

「一休みする？」

理樹が一息ついたところで、小毬はバッグから小さな袋を出した。

「いっぱいこいでくれてありがとう。はい」

袋から出して渡されたのは、チヨコチップのついたクッキーだつた。

「よかつたらどうぞ！」

クッキーにしては大きくて、どつちかというと煎餅のようだ。が、持つとふんわり、しつと

りとした感触で、甘いバターの香りがする。

「もしかして、これ小毬さんの手作り？」

「あつ、わかっちゃつた？ そうなんだ！」

照れて笑う小毬に、理樹も笑つて一口かじつた。

「うまいっ！」

おせじじやない。市販の菓子のようなきつい甘さがなく、表面は香ばしいが内側はケーキに

似たしつとり感で、チヨコチップの固さとバランスがいい。

「よかつたあ！ 結構、気合い入れてがんばつたんだよ」

「うん。さすが、お菓子好きな小毬さんだね」

「えへへ」

褒められて小毬はとろけそうに笑つた。

「甘いものは、疲れを癒してくれるから。食べると、小さいけどいっぱい幸せになれる」  
「うん」

小毬の言う幸せをさくさくと味わい、理樹はあらためて景色を眺める。  
静かだなあ。知らない場所で、ずっと小毬さんと一人きりで。  
なんだか現実じやないみたいだ。

ふと気づくと、小毬は手にクッキーを持ったまま、湖の対岸をじつと見ていた。  
緑のなかの白い建物。さつきもあるの建物を見ていたつけ。

「——もしかして、あれが小毬さんの思い出なの？」

「ふえ？」

「ほら、あの白い建物だよ」

「……」

理樹が指さす向こうを見て、小毬は大きく二度まばたきした。

「見ていた……？ 私？ そつか……」

首をかしげ、それから唇に指をあて、ゆっくり目を伏せてしまう小毬。

「わからない……思い出の場所なのに……おかしいね」

寂しげな声。せつかく思い出の場所へ来たのに、思い出せないのがつらいのだろうか。お菓子を作つて、おしゃれして、理樹を案内してくれたのに。

「小穂さんは、昔、ここに住んでいたんだよね」

「うん——たぶん」

「あの建物に住んでいたのかな」

「違うよ。あそこは」

言いかけて、小穂はぐつと黙つてしまふ。その先が途切れているようだ。

理樹はなんとかできないかと考えた。なにか、思い出のヒントになる……。

「——そうだ。そういえば」

ぱつと思いついたことを口にした。

「小穂さん、お兄さんがいるんだってね」

「お兄さん?」

「鈴から聞いたよ。お兄さんに、絵本を作つてもらつたつて

ごめん鈴。あとでつじつまは合わせるから。

「……私のこと?」

「え?」

「いないよ? 私にお兄さんなんて」

「……」

「さらりと言われ、今度は理樹が黙つてしまつた。だつて、屋上あんなにはつきり、お兄さんの話をしていたじやないか。絵本の内容まで、具体的に……。  
 「もしかして、夢のおにいちゃんのことかな」

「夢のおにいちゃん?」

「うん。あのね、子どものころ、そういうおにいちゃんがいたの。本当にはいないんだけど、夢にだけ出てくるおにいちゃん。優しくて、私のために、お話を作つてくれるんだ」

「——にわとりと、ひよこのお話……とか?」

「そうだつたかな? そういえば、そんなお話もあつたかなあ」

……そんな……。

理樹は屋上での小毬を思い出した。

——にわとりさんについて歩くひよこさんの絵がかわいかつたなあ……。

「かわいかつた」と、具体的な絵まで覚えていたようだつたのに。あれは全部、小毬の空想だつたのか。そんなふうには見えなかつたが。

「ごめんね。せつかく、思い出の場所へ来てくれたのに」

「僕にあやまる必要はないよ。ただ……小毬さんも、本当は、思い出したいんじゃないのかな」「思い出したい……私が?」

「うん。鈴に子どものころの話をしたのも、僕とここへ来たのも。もしかしたら」「そつか。そうだね。取り戻したいんだね、私」  
なくしものは寂しいから。

「使い古しの消しゴムをなくしちゃつても、私は一晩しょんぼりしてしまいます」

「うん」

だから。

「僕でよければ、手伝うよ」

小毬さんの思い出。不思議な記憶。なくしたものを、取り戻す。

「理樹君……」

それで小毬さんが喜んでくれたら僕も嬉しい。幸せのスパイラルだ。

「ありがとう」

小毬の声に、いつもの柔らかな穏やかさと少し違う——いや、柔らかで穏やかではあるのだが、ほんの少し、そこに芯が通ったような響きがくわわる。

「私に、気づかせてくれて」

ボートの上で、ひらひらの服とリボンをなびかせて、小毬はまっすぐに理樹を見た。

その背後に、あの白い建物がまた見えた。

小毬持参のサンドイッチで昼食をとり、湖の周囲を散歩しながら話をするうち、少しづつ日が暮ってきた。

「あ。星」

山あいは夜の訪れがはやい。山の端の、濃いオレンジに染まつた空と、近づく藍色の空のあいまに、点々と光る星が見えた。

「そろそろ戻ろうか」

「うん——あつ！」

小毬がすばやく指さす空に、一瞬、細い光が流れた。

「流れ星？」

「そうかも——あ——また！」

見あげた空に、今度は理樹の目にもはつきりと、宵闇に消えていく白い星が見えた。

「きれいだね……」

「うん」

もしかすると、流星群が近づいているのだろうか。湖の上空、陰になつた山の稜線の上。

「今度流れたら、お祈りをしよう」

胸の前で、小毬はそつと手を組んだ。

「思い出を取り戻せるように？」

「……ううん」

ほんのかすかに、だが、優しすぎるほど優しい角度で小毬は唇の端をもちあげた。

「じやあ——」

「あつ」

流れた。小毬は声のないままにかをつぶやいて目を閉じる。星の飾りをつけたリボンが揺れて、神聖な魔法の呪文のようだ。

声がないから聞こえないはずの呪文の欠片が、不思議と理樹の胸に届いた。

——に……よう、に。

湖はあんなに晴れていたのに、街へ戻ると冷たい雨が降つていた。  
傘は無い。とりあえず、駅の屋根の下でしばし雨宿り。  
ロータリーを走るタクシーが、容赦ない水しぶきを跳ね上げている。

「さむいね」

すう、と息を吸つて小毬が自分の両腕をさする。どうしよう、と理樹は少し迷つたが、思い

切つて自分のシャツを脱いで小毬に渡す。

「いいよ、理樹君寒くなつちやうよ」

「大丈夫。僕は真人と鍛えてるから」

まあ、真人の鍛え方とは違うけど……。

「ありがとう」

もう一度差し出したシャツを受け取り、小毬ははにかんで肩に羽織った。

「こういうの、ちよつと憧れだつたかも」

理樹もどうにもくすぐつたくなり、この場を早足で去りたくなつたが、雨でどこにも行きようがなかつた。

カシツ、と空が鳴つて鋭く光る。

「いやあ……！」

雷鳴が轟き、小毬はすがるように理樹に身を寄せた。

「あ、ごめんね」

「大丈夫だよ。雷こわいの？」

「うん。ごめん」

「大丈夫——あれ？」

「どうしたの」

「いま、声が聞こえなかつた？」

「声つて……なに？ きやあつ！」

また稻妻が光つて、小毬は身を縮めた。理樹は小毬の肩を支えた。声のようなにかは雷鳴に消された。

ゴロゴロと続くだけになつた。が、雨はなかなかやみそうもない。

「僕、あそこのコンビニで傘買つてきていいかな」

ロータリーの向こうに店がある。

「私も行く」

「大丈夫？」

「うん。もう雷は行つちやつたから」

「じゃ、僕のシャツ被つて来てね」

靴の先で水を跳ねさせて、理樹と小毬は駅の前に出た。

——すると。

「……あつ……」

どうしてそれが見えたのか。ふいに目の端に飛び込んだ、驚くほどに小さなものの……。

「理樹君？ どうしたの？」

「ううん……」

雨は冷たく傘も無く、小毬も一緒にいるので迷つた。が、どうしてもやり過ごす気になれず、理樹は線路沿いの暗い道へ向かつた。

道の端、街灯の光がギリギリ届く、ゴミ集積場との境のあたり。

下水へ続く雨水の流れに引つかるように、白っぽい、小さな子猫がいる。

駆け寄つて、理樹はその子猫を抱きあげた。

けれど、子猫は小さな歯がのぞく口を開けたまま、ぴくりとも動こうとしなかつた。

「……」

言葉もなく、理樹は子猫の頭を撫でる。さつき、雷鳴に混じつて聞こえたかすかな声。あれはこの子猫だつたのだろうか。力を振り絞り、最後の声で……誰かに助けを求めたのだろうか。  
「どうしたの」

小毬が背後から理樹をそつと呼んだ。無言のまま、理樹は振り向いて、手のなかの子猫をもう一度撫でた。

「子猫さん……？」

「うん」

「」

時が固まつたような、不自然な間。

「動かないよ」

「……うん……」

「どうして？」

「どうしてって」

顔をあげ、理樹は小毬の異変に気づいた。表情がなく、全身がこわばっているのがはつきりわかる。まばたきすら、する気配がないようだ。

「小毬さん？」

返事はなく、小毬は理樹を見ているかどうかもわからないようなうつろな目線で、しかし、正確に理樹の手から子猫の亡骸を抱き取った。

が。

——ぼちゃん。

あわれな子猫は、小毬の手から滑り落ち、アスファルトにできた水たまりに沈む。

「う

喉を絞められるような呻きを漏らし、小毬はその場に膝をついてしまった。

「うあああ

首を振り、これがあの穏やかな小毬と同じ人間なのかと疑うような不気味な声をあげ。

「うあああ、うあああ、うああああああああああ！」

身を震わせて絶叫した。

「小毬さん!!」

「あああ、いやあ、つ、ぐ、あああ、ああああ……」

「ああ、ああ、と、息をする間もなく激しく叫び、身を揺する小毬を、理樹は必死に抱き留めるしかできない。」

「小毬さん……しつかりして、小毬さん……！」

「どうした」

ずぶ濡れで小毬を支えたまま戻った理樹に、真人はさつと顔色を変えた。

「僕にもわからないんだ」

とりあえず、泣き疲れて押し黙つてはいるが、小毬は相変わらずうつろなまま。意識がないわけではなさそうだが、一人では歩くのもおぼつかない。

「とりあえず、このままじや風邪ひくから」

小毬の身体は冷え切っている。濡れた服を脱がせて、温かいシャワーでも浴びないと。

いまの小毬にそれを話して通じるだろうか？

かといって、男の理樹が小毬をシャワーに入れるわけにもいかない。

どうしよう。ここまで帰つてくるのに必死で、細かいことは考えてなかつた。どうしよう。

そ、うだ、恭介なら……恭介なら、こんなときどうするだろう？

理樹は携帯を取り出して、恭介に電話しようとした。が、小毬は青い顔で震えている。相談している余裕はない。どうしたら……せめて、僕が女性なら……。

「そ、うだ」

「恭介」と表示された番号を変え、理樹はべつの番号に連絡した。

「來たぞ」

頼んだとおり、唯湖は着替えの入つた紙袋を持って来てくれた。

「とりあえず、着替えとシャワーを手伝つてほしいんだ」

「私が？ 小毬君と？」

「いやそこきらめくとこじやないつていうか、結構シリアルな状況なんで」

「了解」

唯湖はすぐに口調を切り替え、うすくまつている小毬の傍らに身をかがめた。

「小毬君。来ケ谷だ。立てるか？」

「……」

唯湖の声が少し刺激になつたのか、小毬はコクリと無言でうなずき、よろけながらだが立ちはだかつた。よし、と唯湖は小毬の右側の肩を抱き、理樹が反対側を支えて、シャワー室まで連れて行く。

「この感じなら、シャワーは一人で浴びられそうだな」

シリアルスなのに唯湖がいくらか残念そうなのが、逆に理樹には救いになつた。来ケ谷さんもこう言うなら、いますぐ小毬さんが深刻な状態になることはないだろう。

理樹はシャワー室の前で待つた。唯湖は小毬と中に入つて、着替えの手伝いと付き添いをしてくれた。

「さて。どういうことなんだ、これは」

小毬を支え、寮の部屋まで連れて行きながら、唯湖が改めて理樹に訊ねた。

「ごめん……話したいけど、いまはちょっと……」

話そうにも、理樹にもなにが起きたのかわからない。

「どうか」

唯湖はそれ以上訊こうとしない。小毬がズブ濡れでピンチなので着替えを持って来てほしい、と理樹が連絡したときも、唯湖はなにも訊かずに了解した。

「落ち着いたら、必ず報告するよ」

「話したくないなら、無理に話さなくていいぞ」

「ありがとう」

頼もしかつた。女性に頼もしいなんて言うのは失礼かもしねないが。

「よし、着いた。あとは私にまかせろ」

「うん……お願い」

理樹が小毬を唯湖に託そようとすると、小毬がくつと理樹の袖をつかんだ。

「いや」

理樹と唯湖は顔を見合わせる。しかし、理樹は女子寮に泊まるわけにはいかない。

「小毬さん。ここは来ヶ谷さんの言うことを聞いて」

理樹は小毬を宥めて優しく言つた。すると小毬はコクンとうなずき、理樹の袖から手を離した。ぱたり、と落ちる理樹の腕に目をやり、それから小毬はまた理樹を見た。

「……」

不思議な青みを宿した小毬の目は、ぞつとするほど澄んでいた。

そして小毬はなんの感情も見えない表情のままてつぶやいた。

「じゃあね、おにいちゃん」

部屋に戻ると机に真人のメモが置いてあつた。

『埋めてくる』

——あ。そうだ。思わず包んで持ち帰つてしまつた、子猫の亡骸。  
行方はわからぬが理樹は真人を追おうとした。が、理樹が部屋を出るより先に真人は戻つ  
てきた。

「ありがとう」

理樹は真人にタオルを渡した。ツンツンの髪や広い肩が濡れている。

「小毬はどうなんだ」

「とりあえず、いまは大丈夫だと思うけど……」

——じゃあね、おにいちやん。

あのときの小毬は異様だつた。どこかの回路が壊れていた。

〔理樹〕

〔ん?〕

「オレの尻ならいくらボールが当たつても平気だからな」

「それは励まされてると思つていいの?」

「さあな」

につと笑い、風呂行つてくるわと真人はふたたび出て行つた。

ようやく一息ついて時計を見ると、もうすでに遅い時間だつた。理樹は自分のベッドに寝転

び、ぼんやりと今日のことを思い出した。

小毬さん……朝はあんなに楽しそうだつたのに……。

いつたい、なにが彼女をあんなにしてしまつたんだろう。僕が子猫を見つけたせい？ 不思議な記憶の混乱のせい？

わからない。

唯湖も真人も、なにも訊かずに助けてくれた。ありがたかつた。

でももしも、このまま小毬さんが壊れてしまつたら――。

理樹は目を閉じて首を振つた。考えたくない。でも、小毬のためにも仲間のためにも、理樹自身のためにも放つておけない。

祈るように理樹は考えた。けれど答えは浮かばなかつた。明日になれば、元のやわらかな小毬に戻つてくれるだろうか。戻つてほしい。戻つてくれ。  
……正直、僕にはこの状況を受け止める自信がない……。

朝になつた。

その後連絡などはなかつたが、登校の途中で小毬を見つけた。  
「小毬さん」

小毬はいつもと変わらない様子で振り向き、理樹に手をあげる。

「おはよう。おにいちゃん」

……。

「違うよ。僕は理樹だよ」

「……理樹、君?……」

「うん」

「今日はいい天気ですねー」

小毬は唐突にいつもの口調の小毬に戻った。しかし……。

空は今日も灰色の雲が重くたれこめ、いまにも雨が降り出しそうだ。

「昨日のことは、もう大丈夫なのかな」

小さな声で、ほんんど絶望しながら理樹は訊く。

「昨日? なにかあつたつけ?」

「」

「変なこと言うね、理樹君」

眉をさげ、くすっと笑う小毬が嘘をついているようにはとても見えない。理樹の背筋が冷たくなつた。

休み時間には、小毬から声をかけてきた。

「次は教室移動だよ」

現実の把握はできるらしい。これだけなら、普段とまるで変わらない。

「よう、おまえら仲いいな」

二人を見かけた謙吾がからかうように言う。

「うん。私とおにいちゃんは仲良しさんなのです」

「……おにい……？」

首をかしげる謙吾に、理樹はどう反応していいかわからない。謙吾の背後で、唯湖も気遣わしげに小毬を見ている。

「どうしたの？」

あどけない顔でまばたきする小毬。理樹はもう、僕はおにいちゃんじゃないとは言えない。

ふと視線を感じて振り向くと、鈴がもの言いたげに理樹を見ていた。

理樹は鈴になにも応えられなかつた。

外はふたたび雨になつた。昼休みに理樹が様子を見ようとすると、小毬は教室にいなかつた。まさか……どこだ？　いや。

はつと思い出して理樹は屋上へ向かう。

雨なのに、階段の上の小窓は今日も開いていた。理樹は急いで屋上へ出た。

「小毬さん!!」

ふらふらと歩く小毬をつかまえる。

「あ……おにいちやん」

「濡れちゃうよ。どうしてこんな日に出るの」

「好きだから」

小毬はついと上を向いて、

「ひらひら、ないね」

「ひらひら？」

「白い、ひらひら……あつたほうが楽しいのに」

わからぬ。理樹は小毬を半ば強引に抱き寄せ、雨の屋上から立ち去るしかなかつた。

放課後、理樹はリトルバスターズの部室に仲間を集め、話をした。

んだ恭介。

小毬は寮の自室で休んでいる。体調が悪いので出歩かないよう、寮母さんに注意してもらつていて。

屋根を叩く雨の音が聞こえていた。

「どうしたらしいのか……」

「おそらくなにか、精神的にショックを受けたのが原因だろうな」と、唯湖。

「子猫の死骸を見てしまったこと？ いくらなんでもそれだけでは」「それだけかどうかは、傍目にはわからないからな」

これは恭介。

「わからないなら、こうして集まつての意味もないかな」

理樹は正直、疲れてきていた。キヤプテンは自分、小毬をチームの仲間にしたのも自分。小毬と距離を縮めたのも、雨のなかで子猫を見つけてしまったのも自分。わかっているが、こうなることを見越していたわけでもないのに、なぜ自分ばかり、とつい苛立つ。

「理樹」

そんな理樹の気持ちを察したように、恭介が静かな声で語りかける。

「悪いが、このことは、おまえがどうにかするしかないとと思う」

「……」

「俺たちは、小毬と一緒に行動したわけじやない。おまえが思い出せないことは、俺たちには

知りようもないことだ。なにが出来るか、見当もつかない」

恭介はまったく正しいだけに、理樹には重く感じられた。

「それに、小毬はおまえを必要としているだろ」

「必要なんて」

言いかけて、理樹はこれまでのことを思い出した。野球をまったく知らないのに、みずからメンバーになつた小毬。鈴が人見知りで逃げたときにも、次は仲良しになれると笑つた。幸せスペイラルを教えてくれた。老人ホームのアイドルで、一緒に湖を見に行つて、手作りの甘いお菓子を食べて……。

「小毬を元気づけられるのはおまえだけだ」

「……うん」

理樹はうなずくしかなかつた。自分が必要とされているとか、そんな偉そうな理由じやない。あの笑顔をもう一度見て、あたたかな空氣を感じたかつた。

「言つてくれれば、出来ることはなんでも手伝うぞ」

謙吾の言葉に、唯湖も真人も恭介も深くうなずいた。

「ありがとう」

一人の部屋で、理樹は記憶を整理してみた。

小毬の異変の理由はなにか。子猫の件以前に、兆しは見られなかつただろうか。

少なくとも「デート」と言えずに誘いにきたときは、いつもと同じ小毬だつた。

待ち合わせて、湖でボートに乗つて、小毬手作りのお菓子を食べて……。ふと、甘い香りの記憶とともに、なにかがチクリと理樹の胸をよぎる。

——いないよ？ おにいちゃんなんて。

そう言つて、白い建物を見ていた小毬。あれは。

——コン、コン。

「うー」

ノックの音。せつかく、なにかつかみかけたのに。

理樹はもどかしく頭を振つて、寝転がつていたベッドを出る。

ドアを開けると鈴がいた。もの言いたげな思い詰めた顔。

「どうし……」

言いかけて、理樹はハツとした。そうだ、鈴は覚えているだろう。

「ごめん鈴。先に僕が言うことを聞いてくれる？」

「？」

「実はぼく、前に、鈴と小毬さんが屋上で話しているのを聞いたんだ」

「……にわとりさんとひよこさんの話か」

「そう。あのとき、小毬さんは、あれは小毬さんのお兄さんが作つてくれたお話をだつて言つて

たよね？」

「言つた」

「なのに僕には、お兄さんはいない、小さいころの夢に出てきた人だつて言つてたんだ」「なら、あの話は嘘だつたのか？ そんなふうには見えなかつた」

「だよね。僕もそう思う」

「だつたら……」

こつくりと、理樹は鈴にうなずいた。

お兄さんは、本当にいた。なのに、いなきことにされている。

だとすると、小毬の激変した理由が、うつすらとだが見えてくる。おそらく哀しい理由だろうが……。

「たしかめないと」

どうやつて？ 小毬の家も知らないし、家族の人になんと訊けばいいかもわからない。  
誰か、ほかに……小毬の幼なじみか、知人のようなど……。

「あつ！」

「どうした理樹」

「ごめん。僕、ちょっと出かけてくる」

話はあとで必ず聞くと鈴に言い、理樹は雨のなかを外出した。

怒られるかもしれないし、まったくの無駄足かもしれない。けれども不思議と、確信に近いなにかがあつた。

——あの人は、僕の知りたいことを知っている。

外出はかなり長くなつた。

寮へ戻ると、もう夕食の時間も終わっていた。

真人は部屋にいなかつた。謙吾のところに泊まる、とだけメモが置いてあつた。おそらく理樹への気づかいだろう。感謝して、理樹は外から持ち帰つた包みをそつと広げた。  
よかつた。雨には濡れてない。

「理樹」

小さな声に呼ばれてドアを開けると、食堂のトレイを持った鈴がいた。

「恭介に、おまえに持つて行けと言われた」

「食堂のレンジで温めたのだろう、トレイの上には湯気のたつ夕食が載つている。  
「ありがとう」

トレイを受け取る。差し出す鈴は泣くのを我慢するような顔をしていた。

「いいよ鈴。気にしないで、言いたいこと言つて」

「理樹」

「…………」

「…………小毬、ちゃんは……」

——小毬ちゃんは、仲良しなんだ。

「…………」

「だから、理樹……」

「うん」

そうだ。小毬さんには僕が必要だ、と恭介には言われたけれど、彼女を必要としている人もいる。もちろん、僕だってその一人だ。

食事のトレイを机に置いて、理樹は鈴を部屋へ招き入れた。

「…………」

鈴はテーブル代わりの段ボール箱の上に目をやつた。そこに、理樹がさつき開いた包みがある。

「それは、小毬さんのお兄さんが作つた絵本だよ」

紙は黄ばんで端がめくれて、色えんぴつの絵は褪せている。けれど、本の最後のページには、



黒マジックではつきりと「神北拓也」と書かれている。

「ある人をつうじて、小毬さんの家にあつたものを借りてきたんだ」

——これをやるから、さつさと行け。

理樹に小毬の様子を聞いた小次郎は、そう言つて一枚のメモを理樹に渡した。メモには小毬の家の住所と、家人あての伝言があつた。小毬が必要としているので、拓也の本を渡すようにな。

小次郎はやはり知つていた。小毬の特殊な状態が、「死」や「血」によつて引き起こされることを。その理由も。

幼いころ、小毬は大好きだつた兄を亡くした。

小毬の両親が見つけたとき、兄は、病室で小毬を胸に抱き、血を吐いたままこときれていた。その哀しみを忘れるため、小毬は兄の存在ごと記憶を封印した。自分は兄を喪つたのではない。はじめからないものは喪えないのだと。

けれど、ある状況をきっかけに封印は破れ、哀しみが再生されてしまう。

——わしの連れも……こまりもそうじやつた。  
と、小次郎が口にした「こまり」とは、理樹の知らないもう一人の女性だ。

小毬と、そして小次郎と同じ「神北」の姓を持つ女性。

——血を吐いて死んだわしの兄を、こまりは好いておつた……そうしてわしを、わしの兄だと錯覚し……わしは、兄を演じ続けることでこまりを支えられるならと思つたが……。

抑圧と再生を繰り返すたび、激情は幾重にも増幅される。

いつしか心をすり減らし、現実と夢の区別がつかなくなつて、目の前の相手が誰なのかすらわからなり……小次郎の大切にしていた人が、彼を小次郎と認識したのは、最後の最後、三日だけだったという。

——わしはこまりを救えんかつた。

——でも、じゃあ、もしも小次郎さんが、お兄さんの代わりにならなかつたら。

——わからん。混乱したままだつたかもしがれん、すべて忘れたかもしがれん。

やせた腕を組み、小次郎は重くため息をついた。

だから小次郎は、小毬と会わない。胸を患つたことのある自分が、もしも目の前で喀血したら、それを見た小毬がどうなるか……實際、一度それは起きたのだと。

——どうする小僧。

小次郎は理樹をじつと見た。

考えても言葉は出てこなかつた。いや、告げられた事実のあまりの重さ、苦しさに、考えることも出来なかつた。

だから。

——探します。僕に出来ること。

なにが正解かはわからない。うまくいくかどうかもわからない。でも諦めない。それしか言えない。

——そうか。

ほんの一瞬、小次郎はそれまで一度も見せたことのない穏やかな目で理樹を見た。  
それから、メモを書いて渡したのだつた。

「にわとりさんと、ひよこさん……」

鈴は古い絵本を手にとつて開いた。達者な絵のわりに文字は幼い。けれど丁寧な優しげな字で、繰り返す物語が綴られていた。  
たまごから孵るひよこさん。ひよこさんはやがてにわとりさんになり、たまごを産む。そのたまごからひよこさんが孵る。にわとりさんはひよこさんを忘れ、ひよこさんはたまごのことを忘れてしまう……。

色鉛筆の絵は褪せているが、ひよこもにわとりも可愛らしい。それだけに、忘却を繰り返す物語がせつなくなる。

忘却を、繰り返す……。

「どうした理樹」

「これって、小毬さんのことみたいだ」

拓也さんは小次郎さんの過去を聞いていて、同じ名前をもつ小毬さんに、同じ運命を予感したんだろうか。だから。でも。

「最後にはひよこは思い出すんだ。ぼくはこれだつたんだ、つて」

最後のページ。そこには、きよとんとしながらも、目を輝かせるひよこがいる。

これは拓也が託した希望だ。いつかは思い出してほしい。忘れた過去と、いまの自分が、つながっていることを受け入れてほしいと。

「小毬ちゃんにこの本を見せるのか」

「そのつもりだつた」

……でも。

実際に本を手にすると、それだけでは足りないよう思う。小毬の哀しみ——兄を喪つた哀しみを、兄が遺した絵本で埋める。

だけど、拓也さんはここにはいない。いま、小毬さんのそばにいるのは僕なんだ。拓也さんの願いを引き継いで、僕が向き合わなければいけないんだ。

——ありがとう。理樹君。私に、気づかせてくれて。

「そうだ」

湖での小毬を思い出した。そして、夕暮れの星に祈つた。意識してゐるかはわからないけれど、小毬自身も、抜け出すことを望んでゐる。

——ほんの……に、よう、に。

風に消された小さなつぶやき。

「理樹？」

机の周囲を探り出した理樹に、鈴が不思議そうな声をかける。

「ないな……鈴、色鉛筆、持つてない？」

「色のサインペンなら部屋にある」

「借りていいかな」

「なにをするんだ」

「本を作る」

「理樹が？」

うなずくと、鈴はなにかがこみあげたように、かすかに頬を赤くした。

「といつても、絵なんてまるで描けないし、お話も浮かばないんだけど……ただ、最後に流れ

星を見る話にしたい」

「ながればし」

「うん。星を見て、明るく終わる話」

「……ぺんぎんさんだ」

「え？」

「ぺんぎんさん。ほしをめざしたぺんぎんさん」

「なにそれ」

「どこかで覚えがある。」

「まえに、屋上で小毬ちゃんが教えてくれた。お兄さんに聞いたお話だつて」

「それだ！ やつたぞ鈴！」

「わわわ」

理樹は思わず鈴の腕をがしつとつかんで興奮した。それから、鈴にカラーのサインペンのセットを借りて、コピー用紙を折った束を用意した。

「こんなことで、うまくいくかどうかわからないけど……」

「やるしかない。いまの僕にできるだけの全力で。」

「ぺんぎんさんの話を教えて」

「うろ覚えだ」

「かまわない。わからないところは、一緒に作ろう」

「……」

考え考え、自信なさそうに鈴は話した。

——ぺんぎんさんは、友達がみんなすごいのに、自分だけなにもできないと思つてた。自分は空も飛べない、足も速くない。みんなに助けられてばかりだつて。

そうしたら、じゃあ、ぼくがすごいことをさせてあげるつて星が言うから、ぺんぎんさんは、すごいことのためにがんばつた……。

途切れ途切れの話を聞きつつ、理樹は、何枚も絵を描いた。とはいって、絵なんて小学校の授業以来、まともに描いたことはない。白い空間は埋まらないし、ものの形が歪んでいる。下書きを消すと紙は黒ずんでだめになる。一枚描いては失敗し、もう一度書き直してまた失敗した。出来るのかなあ。これでほんとに。

紙を丸め、理樹はがつくりとテーブルに伏せる。すると、

——ちよつと怖いけど、勇気を出して、ぺんぎんさんは、星をめざしてジャンプする。  
囁くような鈴の声。理樹は焦りをぐつとおさえる。

——がんばつて、失敗しても繰り返して……。

小毬の兄は、どんな思いで、この話を小毬に語つたのだろう。わからない。けれどもいまは、拓也が理樹に、がんばれとメッセージをくれている気がした。

——とうとう、ぺんぎんさんは星の背中に乗つて、これまで自分を助けてくれた友達に手を振るんだ。

星の空から……。

——すごいなあ。ペんぎんさんは、僕たちの誰にもできないことをやつたんだ。

——がんばつたね。すごいね、ペんぎんさんは。

絵本のペんぎんさんの目は、小毬と同じ、少し青みがかつた深い色。星は、小毬がいつも髪につけている星の飾りと同じ色。

友達は……リトルバスターーズの仲間たちを思い浮かべて、みんなと同じ数だけ動物を描いた。まるで似ていながら気持ちだけ。真人の虎がおそろしく大きくて、クドのハムスターが不思議な丸い生き物になつたが、みんないることが大切だから。

「…………できた…………」

ようやく理樹が顔をあげると、カーテンの隙間から朝の光が細く差していた。

「ありがと。鈴」

声をかけたが、鈴はその場で子猫のように身を丸くして眠っていた。

「……おにいちゃん?」

屋上にあらわれた小毬は、理樹を見てぱつと顔を輝かせた。

「やつぱりおにいちゃんとだ！」

雨があがつてよく晴れた空の下を、幸せそうに駆け寄つてくる。でも理樹は、首を横に振る。

「小毬さん」

「なに？」

「もう、逃げるのはやめよう」

小毬はびたりと動きを止めた。

「僕は、直枝理樹。小毬さんのお兄さんは、拓也さんだよ」

「……うそ」

「お兄さんは、夢のお兄さんじやない。その証拠に、ほら」

理樹は、手にしていた拓也の絵本を小毬に見せる。にわとりさんと、ひよこさんの絵。裏表紙に「神北拓也」と書いてある。本物だと、誰よりも小毬ならわかるはずだ。

「じゃあ、おにいちゃんはどこにいるの」

小毬のやわらかな表情が、みるみるこわばり、唇が震えた。

理樹もツキツと胸が痛んだ。けれど、伝えなければならない。

「もう、いないんだ」

「……うそ……だ、つて……」

卵の殻に少しづつヒビが入つて割れるように、小毬のなから、なにかが表れるのがわかる。

塞いだ記憶——理樹は、激流を受け止める覚悟をする。

「だつて、いなくならないつて、言つた……」

「それでも、いないんだ。どれだけつらくても、哀しくても。それが現実なんだよ、小毬さん」「うああつ……いやあつ……！」

「小毬さん！」

やだ、やだとその場に崩れかける小毬を理樹は抱き留める。その拍子に、拓也の絵本が手から落ちた。でも拾わない。大事なのは、もう一つ持つている本だから。

「大丈夫。小毬さん」

息を熱くしながら、腕のなかの小毬に呼びかけた。

「僕がいるよ」

僕の胸の鼓動、聞こえるかな。僕はいる。僕は生きて、小毬さんのそばにいる。

「僕が、助けてあげるから」

小毬さんは、ひとりじやないんだよ。

「う…………うええ…………うあああー！　うあああー……」

幼い子のように泣きじやくる小毬。泣いていい。悲しんでいいと理樹は思う。かつて悲しめなかつたぶんだけ、いまは泣いて。

\* \* \*

おにいちやんは、いつも優しかった。

身体が弱く、病院にいることが多かつたけれど、訪ねていくと、無理をしてでも、私と屋上で遊んでくれた。

——ひらひら。

——ああ、ひらひらだな。

風にたなびく白いシーツの波の下を走る私を、追いかけてくれたおにいちやん。

春の日の屋上はあたたかくて、山は緑、眼下に青い湖が見える。

——小毬、みーつけたつ。

——わあ……まだみつかつただけだもん、つかまつてないもんつ！

——あ、こら、待てよ小毬つ……。

でも……そんなふうに遊んだ次の春には、おにいちやんはもう、ほとんどベッドから降りられず、動くのもつらいようになっていた。

八つ違ひの幼い私は、それでも、おにいちやんに甘えたくて、ベッドにあがり、外で遊べないならお話を来て、とおにいちやんにねだつた。つらかつただろうに、おにいちやんは私を胸に抱いたまま、楽しそうにお話をしてくれた。

——じゃあ今日は、ぺんぎんさんのおはなしだ。  
——うんつ。

哀しい結末だと私が泣いてしまうので、おにいちゃんはいつも、幸せな物語だけを作つて聞かせた。私はとくに「がんばるぺんぎんさん」が大好きだつた。するとおにいちゃんは、私のために、病床でぺんぎんさんの絵本を作つてくれた。

私はとても嬉しくて、どこへ行くにも絵本を持ち歩いていた。けれど、雨の日に本を持つたまま転んで、絵本をだめにしてしまつた。

——……泣かないで、小毬。新しいの、また作つてあげるから。

たぶん、かなり悪くなつていた身体をおして、おにいちゃんが私に作つてくれた本。それがあの、たまごと、ひよこと、にわとりの物語。

——読んで。読んで、おにいちゃん！

私は遠慮なくベッドにあがり、本を読んでもらいながら、おにいちゃんの胸に抱かれて眠つた。おにいちゃんの胸は不規則に動いていたけれど、あたたかくて、どこよりも私は安らいだ。なのに、それすらも……ううん、とうとう、おにいちゃんと会うこともできなくなつた。私は、毎日病室の前の廊下で本を読み、おにいちゃんとまた会える日を待つた。

そして、ある日。

——小毬。

——ん？

私は、おにいちやんの声に起こされた。廊下の椅子で眠つていたらしい。

——屋上へ行こう。

——ほんとうに？

おにいちやんはうなずく。そして、私の手を引いて、一步一歩、階段をのぼつていつた。おにいちやんの状態からすれば信じられないことだと、いまの私ならわかる。

夕暮れの屋上の風は涼しかつた。おにいちやんは、いつものように私を抱いて、その場にぺたりと座りこんだ。

——ひらひら、ないね。

——ああ……いいんだ。流れ星を見よう。

——え。やだ。ながればし、かなしいから。

前に、そんなお話をおにいちやんに聞いた。人の命が消えるとき、星が流れていくんだつて……。流れたら、おにいちやんは、いなくなつちやうかもしけれない。

——いなくならない。悲しくないよ。

ほら、とおにいちやんが指さす先に、ひとすじの光が流れていく。ひとつ、ふたつ……。

——うわあ……すごいきれい……！

——そうだろう。悲しいことなんて、ないんだ……つ……。

——おにいちゃん!?

激烈的咳。

——大丈夫……心配、しないで……。

懸命に笑うおにいちゃん。でも、その顔色は夜のように暗い。幼い私にもはつきりわかる。

——いいかい、小毬。

そして、ほとんど息のような声で言う。

——もしかしたら、次に目覚めたとき、俺は、小毬の前にいないかも知れない。

——えつ? うそだよ、いなくならないっていつたつ!

——うん。でも、いる。

——? いないけど、いるの?

——そう。

おにいちゃんは、私をそつと抱きしめて——呪文をとなえた。

——これは、全部夢なんだ。だから、起きたら忘れていい。悲しくならなくていい……。

ベッドに戻ると、おにいちゃんは私を抱いたまま血を吐いた。

私は、その血を頬に浴びながら、これは夢だと自分に語った。

怖い、ゆめ。でも、怖いゆめは起きたら忘れる。  
ほつぺたに手。あつたかい、おにいちゃんの手。大好きなおにいちゃん……おにいちゃんの  
ゆめ。

おにいちゃんは——ゆめ……。

朝になると、おにいちゃんはつめたくなつていた。  
おにいちゃんはいなくなつたのだ。

けれど、私はかなしくなかつた。  
ゆめだから。

\* \* \*

「おにいちゃん……おにいちゃん……うつ……く……」  
小毬の号泣が、少しづつ、すすり泣きに変わるころ。

「これ」

理樹は小毬の背を叩き、手もとに、本をそつと触らせた。  
「……おにいちゃん、の……？」

「違うよ。僕が作ったんだ。お兄さんじやなく、直枝理樹が、小毬さんのために描いたんだ」「……」

「お兄さんみたいに、上手くないけど。想いでも、勝てないかもしれないけど」

小毬は理樹の絵本をひらいた。そこには、がんばるぺんぎんさんがいる。

「小毬さん」

走れないけど、飛べないけど、星をめざして一生懸命ジャンプを繰り返すぺんぎんさん。

「悲しいことを、悲しいまま、忘れて繰り返すのはもうやめよう」

にわとりさんも、最後には、自分が卵だつたことを思い出す。拓也さんは、小毬さんが悲しまないよう、自分を忘れるなどを願つたけれど、いつかは、思い出してほしかつたんじやないのかな。そうして、自分の死を受け止めて、前に進んでほしいって。

「僕がいるよ」

理樹はもう一度繰り返した。

「僕だけじゃない。鈴も、恭介も、来ヶ谷さんも、みんな小毬さんのそばにいる」

小毬が見つめる理樹の絵本。そこには、不器用に描かれた、まつたく似ていらないみんながいる。ありえないくらいでかい虎の真人。小さすぎてよくわからないハムスターのクド。笑つた顔のつもりだつたのに、ぶんすかした猫になつてしまつた鈴……。

ひとりひとりを、小毬の白い指がなぞつた。

ぽた、と絵本に涙が落ちる。

けれど、うつむいた小毬の唇は、かすかに笑みを浮かべている。

絵本のなかの、ほしをめざしたぺんぎんさんは、みんなに手を振つて笑つている。

「悲しいことがあつてもさ。素敵なことも、いっぱいある」

「……」

「素敵なことを見つける目を、小毬さんは持つているじゃないか」

幸せのスパイラル。

「僕も探すよ。小毬さんが悲しいときは、悲しいよりも、もつといっぱい、嬉しいことを探し  
てあげる」

星を見つける。お菓子を買うよ。さみしい人には、話しかけてあげる。

「だから……」

言葉がうまく続かなかつた。笑つて、と小毬に言いたいのに、胸が熱くなつて涙になつてしまふ。

笑つて。笑つて、小毬さん。

そうしたら、僕ももつと笑えるから。

——泣かないで……小毬……。

誰かの声が聞こえた気がした。小毬もふつと顔をあげ、風をうけ、空に誰かの面影を探した。  
それから、ゆっくりと、目の前にいる理樹を見た。

「理樹君」

「……うん」

「ここにいるのは、理樹君」

——泣いているのも、理樹君……。

「ごめんね。私、理樹君泣かせちゃったね」

首を振った。泣いてるのは、小毬さんのせいじやない。

「泣いているの、悲しい」

——私がいつまでも泣いていたら、おにいちゃんだつて悲しいんだね。

「だから……おにいちゃんいないの、悲しいけど……」

悲しいことはなくならないけど。

本を抱きしめ、小毬は一步、理樹に近づく。

「だいじょうぶ」

素敵なこと、見つけられるね。理樹君がいる。一緒なら、きっと見つけられる。

「小毬さん」

「ありがとう」

濡れた瞳のまま、小毬は笑つた。

理樹はもう、小毬を抱きしめるよりほかなかつた。

\* \* \*

ありがとう。

もう会えないけれど……大好きな、人へ。

おにいちゃん。

今まで、ごめんなさい。

でも、もうだいじょうぶ。

私はきっと、だいじょうぶ。

教えてくれた人がいるから。

悲しいことがいっぱいあつて、いっぱい泣いても。

きっと、その後には……笑つていられると思ひます。

\* \* \*

「緊張するなあ！」

「大丈夫だよ」

「だつて……会わせたい人がいるつて……」

「その日も空は晴れていた。

理樹は小毬と連れだって、休日の街を歩いていた。

「じつは小毬さんも知つてる人だよ」

「知つてる人？」

小毬は首をかしげるが、思いつく人はいないようだ。

「家族……なのかな。もしかしたら」

「ずっと意地ばかりはつてたけれど、本当は、ずっと小毬さんを思つてた人。

だから僕は、あの人に小毬さんを会わせたい。いまの小毬さんを教えてあげたい。  
「家族つて……もも、もしかして私のおとうさんおかあさんですか？」

「え？」

「そそそんな、いくらなんでもまだ早すぎるし私たちまだ学生だしそんなでもけつ  
「けつ？」

「うわあああー!!」

よくわからないが小毬は一人で赤面しながらまわっていた。  
わからないまま理樹は小毬が楽しそうなので楽しくなった。

その場には、理樹は同席しなかつた。  
いた。

ミッショーン、クリア——かな。

ずっと前に、何気なく口にしたことをふと思い出した。  
これですべてが解決したわけではないけれど。

確実に、一步、進んだ気がする。

進んだ?　どこへ?

わからない。楽しい日々が、ずっとこのまま楽しく続くための道だろうか。

窓からの日が急に暗く陰つた。

いや、違う。僕の意識が遠のいてる。こんなところでナルコレプシーの発作だ。  
ごめん小毬さん。僕、少し眠る……。

戻るから……。

急速に眠りに落ちていく理樹の耳に、小毬の声が遠く聞こえた。  
知らないはずの、聞こえなかつたはずの、小毬が星に祈つた言葉だ。  
目覚めたら、忘れてしまうことはわかつていた。  
それでも深く胸に響く不思議な祈りだった。

——あなたの目が。

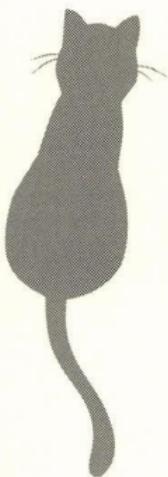
もう少し。

ほんのちょっとだけ、見えるようになりますように。



Mission  
4

EVOの予感



目覚めはいつも重苦しいはずなのに。

その目覚めは甘く、けれどせつなかつた。

見ていないはずの夢から覚めるのが、なにかを置き忘れるようできみしい。

なぜだろう？

……ああ、これだ。遠く聞こえるピアノの音。

……。

「思うんだけどさ、最近れんしゅーばつかやつてるじやん」

覚えのある声。

「ふむ？」

この声も知つてゐる。

はつと気づくと、いつもの教室の休み時間だつた。

しまつた。いつの間にか、また眠つていたらしい。

理樹は首を振り、あたりを見渡した。

「このまま続けてたらどんどん腕が太くなつて、ムキムキになつちやつたりとかしない？」

「まあ、心配要らないんじゃないかな」

話しているのは葉留佳と唯湖。近くに、鈴や小毬もいる。誰も理樹を案じたり、不審そうに見る様子はない。小さな発作だったのかな。前後の記憶があいまいだが、誰にも迷惑はかけてなさそうだ。

「ていうか、そこまで葉留佳さんが練習してるのは思えないけど……」  
さりげなく会話を参加してみる。

「いやいや、努力は人の見てないところですヨ！」

「だが、このごろとくに頑張っている小毬君ですら、いまだにぷにぷにだ  
「ぷにぷにですよ～」

唯湖に二の腕をもみもみされて、いつもの垂れ目笑顔の小毬。よかつた、やはり発作は気づかれてない。

「ちなみに私もぷにぷにだ」

「小毬さんはともかく、来ヶ谷さんがそれってなんか納得いかないんだけど」

打てば弾丸ライナー走れば疾風投げれば熱い剛速球の唯湖じやないか。打球も送球もしばしば真人が標的になるのが残念だけど……。

「少年、筋肉とは使いかたなのだよ」

唯湖は形のいい指をピンとたてて笑う。

「スタイルの維持にも筋肉はやはり必要なものだ。とくに腹筋、背筋、胸筋は重要なほど」

メモを取りそうな勢いでうなずく葉留佳。

「にしても、ぶにぶにの腕でのパワーってどう考えても」

「はつはつは、小毬君は本当にぶにぶにだなあ」

「ぶにぶに！」

理樹のつつこみは見事に流されていた。

「鈴君はどうかな」

ずっとぼんやりしていた鈴に唯湖があやしい流し目を送った。とたんに鈴は全身の毛を逆立てる猫のように警戒し、じりじりとあとずさつてその場から逃げる。

「りんちゃん待つて！」

小毬がそれを追いかけはじめた。

「いやじやーつ!!

鈴は絶叫してダツシユする。しかし小毬は諦めない。

「待つて！」

「いやじやーつ!!

教室をかるく一周したのち、二人は外へ出て行ってしまった。小毬さん、確実に足速くなつ

たなあ。頑張つてるのは本当なんだな。

ほほえましいが、放つておくと授業が始まつても追いかけっこを続けそうだ。理樹は二人を追うこととした。

「そんじや、トレーニングといえばあの人！に、コツを教わつてみましょうヨ！」

葉留佳は唯湖の腕をとつて真人を指した。唯湖は葉留佳に同行しながら、ちらりと理樹を振り返つた。ふと目があう。少しだけ、唯湖の目がやわらかくなつて理樹に語つた。

——よかつたな。

——うん。

理樹も視線で唯湖に応える。小毬のことはごくおおざつぱにしか伝えていないが、充分にわかってくれているのだ。

「ここにいたの」

中庭の日だまり。しぜんに集まつてくる猫たちの中心。肩に猫、膝に猫、抱いて様子を見ているのも猫。

声をかけても、鈴は猫に夢中で返事もしない。かまわずに理樹も隣に座る。

「小毬さんは？」

「まいてきた」

鈴は空になつてお皿にどこから持つてきたミルクを注いだ。  
「購買で新発売のお菓子に見とれている隙に逃げてきた」

「そつか」

「……おまえ、ちょっと瘦せてるな。ちゃんと喰つてるか？ モンペチ喰え」

——こら。じやれるな。顔は乗……くかーつ！

「なんか久しぶりだね。こういうの」

小さな場だが、妙にほつとする。

「理樹は忙しくしていたからな」

「小毬さんとは、うまくやつてるようだね」

「……べつに。普通だ」

鈴は少し頬を赤くした。うん、とうなずいて理樹は笑つた。

「そういえばさ。前に、何度か妙なメモが届いてたよね」

レノンのしつぽに結びつけられていた伝言。世界の秘密を知りたければ、すべての課題をクリアせよ。

「あれって、その後なにがあつた？ やつぱりイタズラだつたのかな」

「届いてる」

「えつ？ そうなの？」

鈴はコクンとうなずいた。

「じゃあ、もしかして鈴が一人でイモムシを集めたり屋上を開放したり？」  
「するか」

ならミッショーンは放置してたの、と理樹が訊ねるより先に、鈴はポケットからメモをいくつか出して見せた。が。

「……白紙……」

「書き忘れたらしい」

「全部忘れたつてことはないでしょ」

「そそつかしいんだろう」

「いやそうじやなくてさ……たぶん、意味があるんだよ」

白紙のミッショーン。白紙に戻す——世界の秘密はなかつたことに、ということか？ にしては、繰り返し送つてくるのはおかしくないか。なにかべつのメッセージが込められているんじゃないかな。それはなに？

「レノン」

にやあん、とやわらかな声がした。白い子猫が遅刻したようにあらわれた。が、鈴の周りはすでに猫たちでいっぱいだ。レノンは仕方なさそうに、あいている理樹の膝に乗つて丸くなる。

「ごめんね」

男の硬い膝で。苦笑しながら理樹はレノンのするするした毛を撫でた。課題はまだ続いているということか。それがなにかも、自分たちで見つける、と……。

教室へ戻ると真人が高速スクワットしていた。

「どうだあああ！ 筋力トレーニングの始まりにして極意！」

叫んでいるが見ている人間はいなかつた。葉留佳と唯湖にコツを教えようとした結果だと想像はついたが、あえて追求はしないでおいた。

先生が来て、めいめいが席につきはじめた。

……あれ？

小毬は席に戻つてゐるが、なぜか唯湖の姿がない。いつの間にいなくなつたのだろう。

「勝沢」

「はい」

「神北」

「はあーい」

まずい。次は「来ヶ谷」だ。このままで欠席になつてしまふ。

「近藤」

……え？

いま、来ヶ谷さん飛ばさなかつた？

びつくりして理樹は左右を見たが、とくに誰も気づいた様子はない。当たり前に名前が続いている。

「——直枝。欠席か？」

「あ、は、はい」

やがてごく自然に点呼は終わつた。先生は前回の続きを教科書で指定し、黒板に数式を書きはじめた。

そんな……だつて、明らかに、来ヶ谷さんの席は空いているよ？ どうして誰もなにも言わないんだ。

動搖し、授業は耳に入らなかつた。

昼休みになつても唯湖は教室にあらわれない。葉留佳のところにいるのだろうか？ 隣のクラスをのぞいてみたが、やはりあの長い黒髪の姿はなかつた。

「おう。どうした理樹」

「恭介、来ヶ谷さん見なかつた？」

廊下でばつたり会つた恭介に訊くと、恭介はふーんと顎に手を当ててしまし考へ、

「……ピアノが聞こえる」

「え？」

天井に据え付けられたスピーカーを指さした。たしかに、昼休みの喧噪に混じって、かすかに音楽が聞こえている。

「もう、なんだつけ？」

「いいよ。自分で探すから」

「がんばれよ」

恭介は笑つて手を振った。そこでさわやかに笑われても、と、歩き出したところで聞き覚えのある声がした。

——でした。次の曲は……。

「え!?」

理樹はびっくりして上を見た。声は天井から聞こえている。ということは。

放送室の重い扉をそつとあけると、ミキサーと向き合っていた唯湖が振り向く。  
「どうした少年」

「えつ、あ……えつと……」

そこではじめて、理樹は自分がずいぶんと必死に唯湖を探していたことに気がついた。

「こんにちは」

「ふふふ。こんにちは」

照れ笑いの理樹に、余裕の唯湖。しぜんに招かれ、理樹は放送室のなかへ入った。  
防音壁の内側は独特の乾いた機械のにおいがする。

「さつき、授業に出てなかつたよね」

パイプ椅子をすすめられ、理樹は唯湖の隣に座つた。

「さつき？」

「四時間めの数学」

「いつものことだが」

「えつ？」

「定期考查以外は出なくていいことになつていてる」

「そんな……なんで？ いいの？」

「いいんじやないのか。むしろそのほうが」

「いいつて、誰にとつてそのほうがいいんだろう。わからないが、良くないなら先生が名前を飛ばしたりしないはずだ。でも。

「やつぱり、授業は出たほうがいいんじゃない？」

「数学以外は出てるぞ」

「なんだ……」

「まあ、他人がいつどんな授業に出ているかなど、普通は気づかないものだからな  
めずらしく、優しげな顔で唯湖が笑つた。

「ごめん」

「構わんさ。だが、なぜ理樹君は気づいたのか」

「……それが、自分でもよくわからないんだ」

ここまで来るほど懸命に来ヶ谷さんを探した理由も。

「ふふん。まあ、世の中には回答のない謎かけのほうが多いものさ」

「これがわからなくとも死ぬわけじやないしね」

「ああ、キミは死なないよ。心配は要らない」

「？」

またひとつ、謎めいた言葉を投げながら、唯湖は調整卓のほうを向いた。

「曲がとつくに終わっていたな……まあいか」

「この放送、前から来ヶ谷さんがやつていたの？」

「私が放送委員長だからな」

「知らなかつた……」

「キミは知らなかつたことばかりだな」

「う。ごめん」

「いいさ。こんな音楽が流れていることに気づく人間も少ないからな」

「……」

「だが、罰として次の曲紹介をしろ」

唯湖は調整卓の中央に備え付けられたマイクを握つて理樹に向かってた。

「え、でも僕こんなことやつたことな」

有無を言わせず唯湖はCDをデッキにセットし、放送内容が書かれたファイルを理樹に渡した。

「簡単だ。これを読めばいい」

「いいのかなあ……」

すでに音楽は流れている。早く紹介しないとタイミングがずれてしまう。不安だが、あ、あ、  
と理樹は何度か声を出して放送の準備をした。唯湖がマイクのスイッチを押して、手元の赤い  
ランプが点灯した。

「えつ、えー……次の曲は、モーツアルトの……えつ☆」

ファイルに書かれたテキストを見てぶつと吹き出した。唯湖は無表情で理樹を見ている。

「お……『俺の尻を舐める』です……」

なんて曲書いてるんだモーツアルト……ていうか来ヶ谷さんも満足げに僕を見るのやめてほしい……。

「はつはつは。じつにいいアナウンスだ。おねーさん大満足だ」

「僕に言わせたかつただけでしょ」

「何を言う。一か月前にすでに決めてあつたのだぞ」

ちなみにこの次に予定されている曲はベートーヴェンの「無くした小銭に対する怒り」。大作曲家も結構しょぼい。

タイトルを知らなければ当たり障りのないピアノ曲を唯湖と聞いた。

「ところで、前々から疑問に思っていたのだが」

正面の窓に映つた唯湖の顔が、窓に映つた理樹を見る。窓の向こうはDJブースだ。

「なぜキミは真人少年と謙吾少年、それに棗兄と付き合つているのだ？」

「え」

真顔で訊かれても戸惑つてしまふ。

「なぜつて……友達だからだけど……幼なじみだし」

「わからん。あ、いやまあキミと、棗兄もいいとしよう。だが、あの馬鹿ふたりはなぜ一緒にいられるのか。いつもいがみあつてているのに」

「いがみあつてゐるわけじやないと思う……」

「いがみあわずに今日こそ終わらせるだの貴様の命日だの言えるのか？」

「そんなこと言つていただろうか。」

「べつに、喧嘩くらいあのふたりにとつては大したことじやないとと思うよ。それが普通なんだ」

「ほう」

「子どものころからそうちだつた。子犬がじやれて囁みつきながら遊んでると一緒だ。まあ、いまの二人を子犬に例えるのは無理があるけど。」

「わかりにくいかもしれないけど、あの二人、結構仲のいいところもあるんだ」

「少年達の心は謎だな」

「……」

「なんだ？」

「ううん。来ヶ谷さんでもわからぬことがあるんだなと思つて」

「残念だつたな」

「いや残念てわけじや……」

めずらしく唯湖が拗ねた顔をするので、理樹は逆に頬が緩みそうになつてしまふ。いつも適切で理解の早い唯湖にも、苦手なものがあつたなんて。

「そうだ。僕ら、野球のほかにバトルも時々してゐるんだ。ルールは簡単。ランキング上位が下

位の挑戦を受け、その場で投げ入れられたものを武器に戦うんだ」

「……それに私も参戦しようと？」

「喧嘩じゃないよ。ゲームみたいなものかな」

「ふむ、致命傷を与える再起不能にもせず相手を倒すゲームか……楽しそうだな」

「ちょっと違うけど、楽しんでくれたらいいな」

喧嘩しててるようでも仲良くできる空気を。

「考えておこう」

唯湖がふつと笑った。

……かわいいな。

——え？ 僕、なに妙なこと考えてんだ。声も態度も、いつもの堂々とした来ヶ谷さんなのに……。

あとで理樹は、前のクラスでも唯湖と一緒にた謙吾に話を聞いた。

「あまり褒められたものじやないが、それでも成績は上位だからな」

唯湖が数学の授業に出ないのは前からで、教師側も注意しないという。

「一度、それに腹を立てた数学の教師が、来ヶ谷にやりこめられたらしい。大学生でもわから

ないような高等数学の問題をだして、逆に満点を取られたそうだ」

「ええーつ……」

「噂だがな。まあ、その教師はもともと悪い噂の多いやつだから、俺個人としては胸がスツとしたが」

ひよつとしたら、唯湖が言つていた「そのほうがいい」相手とは……。

「なんにしても、あいつなら上手くやるだろう。あれだけ優秀で、隙のない女だ」

「そうかな」

「違うのか？」

「いや……そうだけど……」

なんとなく、それを結論にしてしまうのは、唯湖がかわいそうに思えるのだ。自分たちとは違う、遠い世界の人間だと言うようで。

——つてなんだ、かわいいとかかわいそุดとか！

理樹は少し離れた席に座つている唯湖をそつと見た。整つた横顔、流れる黒髪。隠しようもなく知性的な瞳。理樹自身も、唯湖がリトルバスターZに加わる前は、謙吾と同じように思つていた。完成された孤高の人。表面だけではわからないものだな。あの人が、昼休みに、誰にも届かないかもしれない音楽をひとりでひとつそり流していると、いつたい誰が思うだろう。

奇妙なことが起き始めたのは、そんなことがあつた前後だつた。

「……」

「おはよう、来ヶ谷さん……どうしたの？」

朝の学校、靴箱の前で、唯湖がじつとてのひらを見つめている。何気なくのぞくと、てのひらに画鋲がひとつ乗つっていた。

「それつて……」

理樹は心に墨を一滴落とされた気分になつた。靴箱から、唯湖の上履きが半分出でている。どうみても、上履きに画鋲を入れられていたというシチュエーションだ。

「久しぶりだな」

「え？」

「いや、なんでもない」

唯湖は本当になんでもなさそうに呟いて、開いた手をすつと閉じてしまつた。

「でも」

「塵みたいなものだ、すぐ片付く」

気にするな、と唯湖は一度理樹の肩を叩き、振り向かずにその場を立ち去つた。あまりにきつぱりと処理されたので、理樹にはそれ以上どうしようもなかつた。

が。

それから二、三日も過ぎたころ、さらに思いがけない事態が起きた。

「——つ！」

爪先にチクリと痛みを感じて、あわてて足を上履きから抜くと、はすみでコロリと画鋲が落ちた。

ぞくつとした。覚えがありすぎる。まさか、来ヶ谷さんと同じ――？

いやいやいや。唯湖はすぐに片付くと言った。そもそも意図的ですらないかも知れず、安易に結びつけて騒ぐのは良くない。

理樹は胸騒ぎを押し殺した。だが、翌日も、その翌日も、上履きには画鋲が入れられていた。しかも、日を追つて数が増えていた。

「嫌がらせだな」

「えつ」

四日目の朝、上履きに山盛りにされた画鋲を出していると、背後から低い声がした。

「恭介……」

こつそり処分していたつもりだつたが、とつくにバレていたらしい。

「次の休み時間に俺の教室へ来い。真人と謙吾も呼んでおく」

目が鋭く、声には有無を言わせない響きがあつた。いつもイタズラっ子のような顔ばかり見

るので忘れてはいるが、無表情だとこわいほど顔だちが整っている恭介を、理樹はいまさら実感した。

そして。

「——なるほどな」

このメンバーを相手に隠しごとはできない。わかる範囲で事情を説明した理樹に、恭介は深くうなずいた。

「犯人の本当の標的は来ヶ谷で、おそらく理樹はその巻き添えだと」

「だとすると、誰の仕業か想像がつくな」

去年も唯湖と同じクラスだった謙吾には心あたりがあるらしい。

「よし、オレの筋肉で黙らせてやる」

「待て」

腕まくりをして向かおうとする真人の襟を恭介がつかむ。

「そうだよ。いま行つたら解決にならないよ」

「なんでだよ?」

「犯人は来ヶ谷には歯が立たないから、理樹をターゲットにしてるんだろう。ここで理樹への

嫌がらせをやめさせれば、べつの誰かに飛び火する」

「そうして、来ヶ谷さんが原因で嫌がらせされるつていうことになれば、みんなが来ヶ谷さん

から離れていくでしょ。結果的にそれは、来ヶ谷さんへの攻撃になる」「なんだと……」

「理樹が嫌がらせをされたつてことは、次に狙われるのもリトルバスターズの誰かだ」

「オレか！」

「俺だな」

「……真人と謙吾は大丈夫だと思うよ。こういうのは、反撃しそうにない相手を選ぶから」

「すると——小毬か、クドあたりになるだろうな」

チ、と真人が本気でキレ気味の舌打ちをした。

「じゃあどうすんだよ！」

「う——でもまあ、僕が受け止めているぶんには他の人は安全なら、とりあえず無視して諦めるのを待つよ」

誰がなんのためにやつているのかがわかつていれば、嫌がらせの効力は半減する。

「諦めなかつたらどうすんだ。他のやつに狙いが向かつたら」

「そのときは、そうなる前になんとかする」

「どうやつて？」

恭介に鋭くつつこまれた。

「それは……いまは、まだわからないけど……」

こんな答えではだめだろうか。実際、うまくいかどうかわからない。でも、少なくとも逃げるつもりはない。

「わかった。なら、俺たちの手が必要なときは言つてくれ」

恭介は意外なほどあつさりと納得した。さつきは確実に怒っていたのに。ふと理樹は、少し前にもこんなことがあつたと思い出した。そうだ。小毬さんの心が壊れかけてしまつて、みんなで話しあつたときだ。あのときはみんなに頼ろうとして、おまえが一人でなんとかしろって、恭介に諭されたんだつた。

「ところで、来ヶ谷に言わなくていいのか？」

話がいつたん落ち着いたところで謙吾が言つた。

「元々は来ヶ谷から始まつてるし、あいつなら、問題なく解決するんじやないか」

「それもそうだな」

「いや、来ヶ谷さんには言わないでおこうよ」

理樹は謙吾と真人に反対した。

「なんでだよ」

「僕らが離れていかなくとも、自分が原因でこんなことが起きてるつて知つたら、来ヶ谷さんはリトルバスターZに居づらくなるかもしれないでしょ」

「あの女がそんなタマか？」

謙吾が片方の眉毛をあげた。

「よけいな気をつかわせたくないんだ」

来ヶ谷さんは纖細な人だよ！と思わず強く出そうな自分をぐつと引っ込めた。

「おまえがそうしたいならそれでいいが……だがな理樹。俺は去年も、どうみても嫌がらせを受けているらしい来ヶ谷を見たが、あいつが怒りをあらわにしたり、つらそうにしているのを見たことがない」

「……」

「いつも不敵な笑みを浮かべるだけだ。そして直後に、辛辣な反撃をしていたらしい」

「あいつの強さは本物だろう。よけいな気遣いは、解決を遠のかせるだけかもしけんぞ。  
……そつか。ありがとう」

「なんでおまえが礼を言うんだ」

「僕を気遣つてくれたから」

理樹はがんばつて少し笑つた。謙吾はかるく肩をすくめた。たぶん、謙吾が言うほうが本当だろう。でも理樹には、たとえ無意味だつたとしても、唯湖を守る選択しか浮かばなかつた。唯湖が強い人であることと、この気持ちは矛盾していない。

上履きにグニヤッとした灰色のものが乗せられていると思つたらガムだつた。

無言のまま、理樹はティッシュでそれを剥がし、床に上履きを置いて足を入れた。  
「う」

歩くと足の裏に異様な感触。靴の裏にも、べつたりとガムがつけられていたのだ。

「エスカレートしていいのか」

恭介の平坦な声が怖い。

「だからよ、オレの筋肉でボツコボコに」

「だめだつてば」

怒る真人を抑えることで、自分の怒りもなんとか逃した。

水道場で靴の裏を流したが、ガムの感触は取り切れなかつた。しつこくこびりついた悪意の  
ようだ。

次の日は、靴箱への攻撃はやんでいた。

代わりに、机のなかに入れておいた教科書がびりびりに破かれ、わざわざ足音を残して踏ま  
れていた。

「理樹。もうマジで犯人教えろよ」

真人が低く唸るようにつぶやいた。理樹にだけ、謙吾は心あたりを伝えていた。抑えきれな  
くなつたらいつでも行動に移せばいいと。正直、理樹ももう限界に近かつた。

「オレの筋肉が怒りにわなないてやがるぜっ……！」

「真人、それ怖がつてるほうの言葉だから」

「どうした、少年達」

そこへすらりとした影が近づいて、クールに声をかけてきた。

「ああ？ てめえ、やつか——つ！ むう！ ぐむ！」

「ほーら真人、これがヘッドロックだよつ」

理樹は大きな真人に飛びついて口を塞ごうとしたのだが、勢いあまつて腕で頭ごと締めてしまった。

「……仲がいいな」

「あは、そうかな」

「だが、真人少年はなにが言いたかつたんだ？ 『やつか』と聞こえたが」

「やつか……やつかみはよせ、と言いたかつたんだよ」

「やつかいなこと持ち込みやがつて。かもしれないがそれは言わない。

「ほう。真人君と理樹君は、私がやつかむような関係だつたか」

「——ええつ……そんな……！ 棗×直枝ではないのですか……」

「に、西園さん？」

「いきなりどこから現れたんだ。しかもなにか、クラツときたように額に手をあてて、妙な呪

文を呟きながら、そのままよろよろと消えてしまつた。

「……ん。それはどうしたのだ」

謎の顔見せに終わつた美魚はおいて、唯湖は理樹の机におかれた教科書に目をやる。

「オレがさつき踏んづけちまつたんだよ。悪りいか」

「にしては、先ほど怒つていたのは真人少年のようだが」

「自分に怒つてたんだよ。わななくとも言うがな」

言わない。

「……そうか。ならいい」

唯湖は胸の上でかるく腕を組み、ふむ、と伏せ目がちにうなずいた。

「——なあ。あれ、かなりバレてないか」

あとで真人が、こつそりと理樹に耳打ちした。理樹も同意見だつた。どのみち、あの唯湖に隠し通すのは無理だろう。そろそろ決着をつけなきやいけない。

誰もいない放課後の教室に、その生徒は一人で座つていた。

ごく平凡な、どちらかというと地味な少女だ。杉並睦美。<sup>すぎなみ むつみ</sup> 理樹は彼女と話したことはほとん

どない。

「私にお話つて、なんですか」

それでもこれから話さなければいけない。理樹はぐつとこみあげるもの飲み込んだ。  
「わかつてるとと思うけど……悪戯はやめてくれないかな」

びくり、と睦美は肩を震わせる。

「来ヶ谷さんのことですね」

「う、うん。まあそうだけど」

理樹は少なからずショックだった。やつぱり、この子があんなことをしていたのか。謙吾から名前を聞いただけだから、否定されたら素直に謝るつもりでいたのに。

「私だけがしたんじゃないですよ」

「知つてる。三人でしてるんだよね」

それで、一番おとなしそうな子なら、話ができるかもと思つて一人を呼んだのだ。

「……ごめんなさい」

睦美は不本意そうながら謝つた。

「前から続いてるみたいだけど、なんでそんなに来ヶ谷さんが氣に入らないの」

「直枝さんこそ、なんでわざわざ来ヶ谷さんのためにこんなことするんです？」 関係ないじや

ないですか」

「つ、関係あるだろ！ 僕にも嫌がらせしてくるんだから！」

思いがけず強い口調で反発され、理樹もつい強く言い返した。

「え？ 直枝さん？」

「とぼけるなよ。靴箱とか、教科書とか、ずいぶんいろいろしてきたじやないか」

まあ、やられたのが来ヶ谷さんだけだつたとしても、同じくらい怒つてたと思うけど。「えつ、え……知りません。私、直枝さんのことなんて

「ええつ？」

今度は理樹が焦る番だ。それじや、いつたい？

「——ほら言つたじやん。直枝はむつなんか好きじやないつて

背後から声。

振り向くと、不機嫌そうな女生徒が二人、足を広げ頸を持ちあげて立つていた。

「直枝にコクられそうだつて言うから応援に来てやつたのにさあー」

「やめて、私そんなこと言つてないよ！」

睦美は顔を真つ赤にして、二人——理樹が避けたかつた嫌がらせ犯人の残る二人、勝沢と高宮に詰め寄つた。

「それより、直枝さんに嫌がらせつてどういうこと？」

「はあ？ 嫌がらせ？ なにそれ、聞いたことないよ」

「直枝イジメにあつてるの？ へえ、それは大変だあ！」

こいつらだ。理樹は確信した。睦美はおそらく、唯湖のほうに付き合つただけ。

「わかつた。むつが直枝にフラれた仕返しにやつたのを、こつちに擦り付けてんじやない」「そんな、やめてよ……来ケ谷がムカつくからつて始めたのそつちじやない！」

睦美は赤い顔のまま叫んだ。

「はあ？ なんの話？ 自分が来ケ谷ムカつくからつて、私たちまで巻き込まないでよ」

「友達ハメるとか、むつって見た目に似合わずこわあい」

「おい、いい加減にしろよ！ こつちは全部わかつてるんだからな！」

温厚を自認する理樹もこれにはキレた。自分たちのしたことをとばけるばかりか、仲間に罪を押しつけるとは。

「は？ わかつてるつて、なんか証拠でもあんのかよ」

「文句あんなら先生に言えば？ 言われてもこつちは知らないからいいけどおー」

こいつら……。

真人たちを連れてこないでよかつた。もしいたら、女子相手でも止める自信がない。

睦美はベソベソと泣き出してしまつた。言葉もないまま理樹がとりあえず口を開くと、

——え？ ……あー、今度も来ケ谷じやないの一？

——何度説明させんだよ。あいつは頭がおかしいからだめだつて。

声は……黒板上のスピーカーから流れてくる。あんなロボットみたいなやつに友達いるのもおかしいけどな。と、続く声はあきらかに目の前の勝沢と高宮のものだ。

しかし、二人は顔面蒼白で黙っている。

——でもさあ、直枝にやつたらむつが怒るんじやない。

——いいんだよ。こいつが一番弱そうだし、女子にやつたら騒がれるから。

——うー、男子の靴箱つくさい……。

——バカつ沢、声がでかい！ いいからそのゴミ袋の中身入れちゃえよ。

——うわああ、これもう完璧にゴミ箱だね。

——昨日も平気で来ヶ谷と話してやがったからなー。ま、こんくらいやればわかるつしょ直枝も。

「——以上。悪質な嫌がらせをする、心を病んだ少女たちに密着したドキュメントだ」

「……来ヶ谷さん！」

教室の出入り口の柱にもたれ、腕組みをして立っている姿は、さすらいのヒーローのようだつた。いけない。本当は被害者なのに。

「すまんな理樹君。まさかここまで下衆な思考の持ち主とは思わなかつた。おかげで対応が遅れてしまつた」

「ドアを閉め、唯湖は教室のなかへ入つてきた。

「今回の件の犯行は二人。一人はご丁寧に名前まで入つてゐるな、バカつ沢君」

「……」

「加えてだ、動機の裏も取れてゐる。去年、私がやりこめた数学の教師に依頼されたな」  
「…………えつ…………そうだつたのか……。」

「そういえば、謙吾がそんなことを言つていた。まさか、あの件とここがつながるとは。  
「小人の思考はじつに度し難い。そもそも、出す課題に満点を取れば欠席を不問にすると言つ  
てきたのは向こうなのに。下らんプライドのためにここまでするとは」

ため息をつき、して杉並君、と、唯湖は睦美に向き直つた。

「キミは二人にそそのかされただけだな。キミにとつては、理樹君と私が仲睦まじくする姿が  
氣に入らないという理由で」

「その言い方は違う気がするけど……」

「だが、努力もせずに何かをなせるとと思うな。くだらん策を弄するくらいなら、思い切つて告  
白して玉砕しろ」

唯湖は理樹のかばそい突つ込みを完璧に無視してびしっと決めた。

「……そんなこと……みんながみんな、あなたみたいに強いわけじゃないんです。傷つくのは誰だつて怖いでしょ。あなたみたいに、何をされても平気な人にはわからないでしようけど」違う、と今度はもう少し大きく言いたい理樹だが、唯湖はわざかに視線を動かし、それだけで理樹の言葉を止めてしまう。いま君が彼女を否定したら、彼女はほんとうに傷つくだろう。唯湖の横顔がそう言つていた。その代わりに、来ヶ谷さんが傷つけられているじやないか。もどかしい。だが唯湖がそう望むなら、理樹は黙つているしかない。

「とりあえず、キミは理樹君の件に限つては、被害者と言えなくもない。問題は、この連中とバツクにいる例の教師だが――」

「やつてみれば？」

高宮が唯湖に切り返した。

「どうせあんたのことだから、直枝の靴箱に盗聴器でもしかけてさつきの声を録つたんでしょ。ならきつと、先生とあたし達のやりとりもどつかで残してゐるに違ひない」

「なるほど。人格は最悪でも頭だけが回ると、よけいに事態を悪化させるようだな」「——それが気にくわないんだよつ!!」

高宮は割れ声でブチされた。

「やりたければやればいいじやない。告発でも録音のバラまきでも！ そのかわり、あたしもあんた達を徹底的に潰す。みんな仲良ししてんのだよね？ そんなの、バラバラにして壊す方

法なんていくらでもあるんだよ」

「……それで脅しているつもりか」

「いくら反撃しようと関係ない。私の思いどおりになるまで続くよ。いやだつたら、泣いて頭をさげて、もうやめてください高宮さんて言つてみろ！」

「……」

「は？ 聞こえねーよ」

「……すぞ」

唯湖はうつむき、理樹にも言葉は聞こえなかつた。なのにぞくつと鳥肌がたつた。

「殺すぞ」

ひゅ、と黒い髪が流れて理樹を一瞬さえぎる。と。

——ドドドガツシャアアアアアアアア……。

教室のドアが唯湖のくれた蹴りで吹き飛び、廊下の壁にあたつて真つ二つに折れた。床が衝撃でいくらか揺れた。ぱらぱらと、ドアに嵌められたガラスが割れて落ちた。

「……」

理樹も度肝を抜かれていたが、高宮は魂を蹴り飛ばされたように呆然として、ただぽかんと

口をあけていた。

「いまのを貴様らの顔面にくれてやろうか」

唯湖の上品な唇の両端が、容赦なく凶悪につり上がりつている。

「鼻の骨が潰れ歯が吹っ飛び、二度と見られない顔になるだろうな……それとも腹を蹴つて内蔵を潰し、二リットルくらい血を吹かせてやろうか」

高宮と勝沢は震えるだけで、唯湖から目を逸らすことさえできずにいた。唯湖が一步進み出ると、動物のようにまん丸の目をしてぷすんと啼いた。ひや、と間の抜けた声が喉から漏れる。「貴様らから謝罪の言葉は聞かん。ただし、これに恐怖を覚えたなら……」

——二度と私に関わるな！ このクズがああああああ！！

ひい、と理樹でさえ思はず目をつぶる迫力の怒りだつた。いつたい、誰がこの人に感情がないなどと思うのだろう。むしろあまりにも激しいから、同じ激しさの意志力で自分を制御してゐんじやないか。それくらい、唯湖の爆発はすさまじかつた。

目をあけるともう高宮と勝沢はいなかつた。捨て台詞もなく逃げたのだろう。唯湖はふつと息をつき、肩にかかる髪を背に流した。

「そういうわけだ。キミには多少同情する。だが、もう関わらないでくれるか。杉並君」

「……あの」

「ん？」

「ごめんなさい」

小さく頭をさげ、睦美は教室を出て行つた。謝罪は嫌がらせだけではなく、何をされても平氣な人、などと唯湖に言つたことも含めてだろうか。だつたらいいなと理樹は思う。

「私も謝らなければな」

二人になつて、唯湖は理樹を振り返つた。

「すまなかつたな。私の問題に巻き込んでしまつた」

「ううん。僕こそ、なんの力にもなれなくて」

結局、謙吾たちが言うとおりだつた。最初から唯湖に話していれば、ことはもつと簡単だつただろう。

「でも、よかつたよ。もしこのせいでの来ヶ谷さんがバスターズを離れたら嫌だから」

「……なるほど」

唯湖は察しのいい笑みを浮かべた。

「だからキミは、私に言わなかつたんだな」

理樹を見る、その瞳がすごく優しくて、胸にぎゅつと甘いものがこみあげてきた。僕は。これは、もしかして……。

「たしかに私は気に入っている。いまの『リトルバスターーズ』に属していることをな

「よかつた」

「この安らぎの場を侵すなど、何人たりとも許すわけにはいかん」

「……それって、熱い感情だよね」

唯湖は少し目を見開いた。

「なるほど。どうか。怒るんだな私も」

うんうん、と理樹はうなずいた。そんな来ヶ谷さんをもつと見たい。いや、あの激怒はあまり遭遇したくないけど。

「ところで理樹君。真人少年を呼んできてくれ」

「……え？」

「井ノ原真人君をここへ連れてきてくれと言っている。携帯で呼ぶのは禁止

とつぜん言われてわけがわからない。が、有無を言わせぬ唯湖の態度に引きずられて言うとおりにしてしまった。

「オレになんの用が……うお、なんじやこりや!? これ見せるために呼んだのか?」

呼ばれてきた真人は滅茶苦茶にされたドアに驚いて駆け寄った。

理樹はあたりを見回した。唯湖がいない。真人を呼べと言つたのは唯湖なのに。

「誰がこんなことやつたんだよ」

「あ、それは」

「あいつです」

そこへ唯湖が、廊下の角からひよいと顔を見せて言う。なに、という声とともに唯湖の後ろから担任の教師があらわれた。

「井ノ原！ おまえかつ！」

「は、はあ！」

教師は完全にドアの破壊と真人を結びつけている。えええ？とひたすらくるくる首を動かす理樹に、

「よし、そういうわけで行くぞ理樹君」

唯湖はかるくウインクを投げ、理樹の手をとつて走り出した。

「え、ええ？ いいのかなあつ……」

「おいおい！ どうなつてんだよこれえーつ!!」

あはははは、と爽快に唯湖が笑うので、理樹もつい困りながら笑ってしまう（真人には悪いが）。悪いやつらをとつちめたかと思えば手に手をとつて逃走なんて、どこかの映画みたいじやないか。つなぐ手が思いのほか柔らかく、すぐそばで揺れる髪がいいにおいだ。

この人は、どこまでかつこいいんだろう。どこまで刺激的なんだろう。

理樹はもう自覚せざるを得なかつた。

——僕は、来ヶ谷さんが好きなんだ。

ちなみにドアは真人がうつかりつまずいて突っ込んだ事故として処理され、とくに誰にもお咎めはなかつた。唯湖はたぶんこの結果まで計算して真人を呼んだと理樹は思う。

……まあ、単に真人が使いやすかつた、あるいはおもしろがつただけの可能性も大いにある。

そして。

「理樹」

口火をきつたのは恭介だつた。夕食も終え、部屋でだらだら男四人で大富豪をしていて、理樹が続けて四回貧民になつたあたりだつた。

「——おまえ、来ヶ谷のこと好きなのか?」

「えええ!?

真人と謙吾が同時に同じ音節で驚き、手にしていたトランプをバラバラと零した。

「このごろ練習でもよくあいつを見てるし、いまもなんとなく上の空だ」

「……」

「放送室にもちよく出入りしてるだろ？」

「そういえば、恭介は理樹よりも先に気づいていた。こつそり流れるピアノの音に。「マジなのか。やべえオレ一番に気づいちまつたぜ」

「真人は絶対気づいてなかつたと思う」

「しかし……あの来ヶ谷にねえ……」

「一番心配するかと思つた謙吾は意外と感心しているようだ。

「けどよ、なんで突然んなことになつたんだ」

「え、あ、あのさ……カツコいいじやん。来ヶ谷さん」

「カツコいい……？」

恭介まで声を合わせて三人同じ顔で眉を寄せる。

——断罪してやろう……。

真人の首に膝をかける！ 地獄の断頭台！

ばぐしやああああつ!!

——ぐ……あああ……。

——ふはははは怖かろうッ！

ドガガガガガ！ 黒いマシンガンが謙吾を狙う！

悪夢が戦場に散る！

——ふわああああああつ……！

——きさまらのはらわたを くらいつくしてくれるわつ！

ゆいこの こうげき！ いちげきではらわたをぶちまけられた！

——ぎやああああああつ……！

きょうすけは しんでしまつた！

「こわいわつ！」

三人とも、理樹の誘いで唯湖がバトルに参加してから、ちょっといろいろレベルアップしたことを見出したらしい。一部記憶が誇張されているが。

「しかし」

ふと恭介の目に陰が浮いた。なんだろう、この空気と似合わない苦い陰だ。

「まあ、とりあえずだ。こうなつた以上、俺たちの全面バックアップが必要つてことか」

けれど一瞬で陰は消え、いつもの恭介に戻っていた。

「いいよそんなの……恥ずかしいし」

「じゃあおまえ一人でなんとかするか？」

「——う」

こればっかりは、自信も経験もまるでなく……。

「久々に俺たちリトルバスターーズらしくなつてきたな。楽しくなりそうだ」

恭介ものつて、あのイタズラな子どもの目でニッと笑う。

「鈴はどうすんだよ」

「そりやミッショントくれば招集だな」

……ミッショント……。

「ターゲットは来ヶ谷。目的は、理樹と来ヶ谷がバツチリ上手くいくようによること」  
謙吾と真人も身を乗り出して、円陣を組むように男どもは近づく。

「作戦名は——オペレーション・リトルラブランターズだ！」

いやその作戦名はどうかと思う……。

翌日。

「らぶらぶ……？」

ノリノリな兄と仲間たちを前に、鈴はきょとんとして目を開いた。

「えつと、いや、まあ」

見慣れない餌を前にした猫みたいだ。鈴には、ちょっと早い話題だつたかな。  
理樹はうまく説明できないが、

「つまり理樹を応援する作戦だ」

恭介が丸め込むように片付けてしまう。

「最悪にセンスない名前だな」

「僕もそれには同意だよ」

しかし改めるることもないのだった。

「ということで、まずはベタにプレゼント作戦だ」

恭介の言葉とともに、真人、謙吾、そして恭介自身もラッピングされた箱を出した。

「俺たち三人が理樹のために厳選した品を用意した。たくさんの女性が実感した、抜群の実績を誇るいわば恋のサプリだ」

どこかで聞いたような謳い文句だ。

「理樹、どれにする?」

真人の包み紙は渋い和風、恭介はピンクのハート柄、謙吾のはシンプルな白だった。

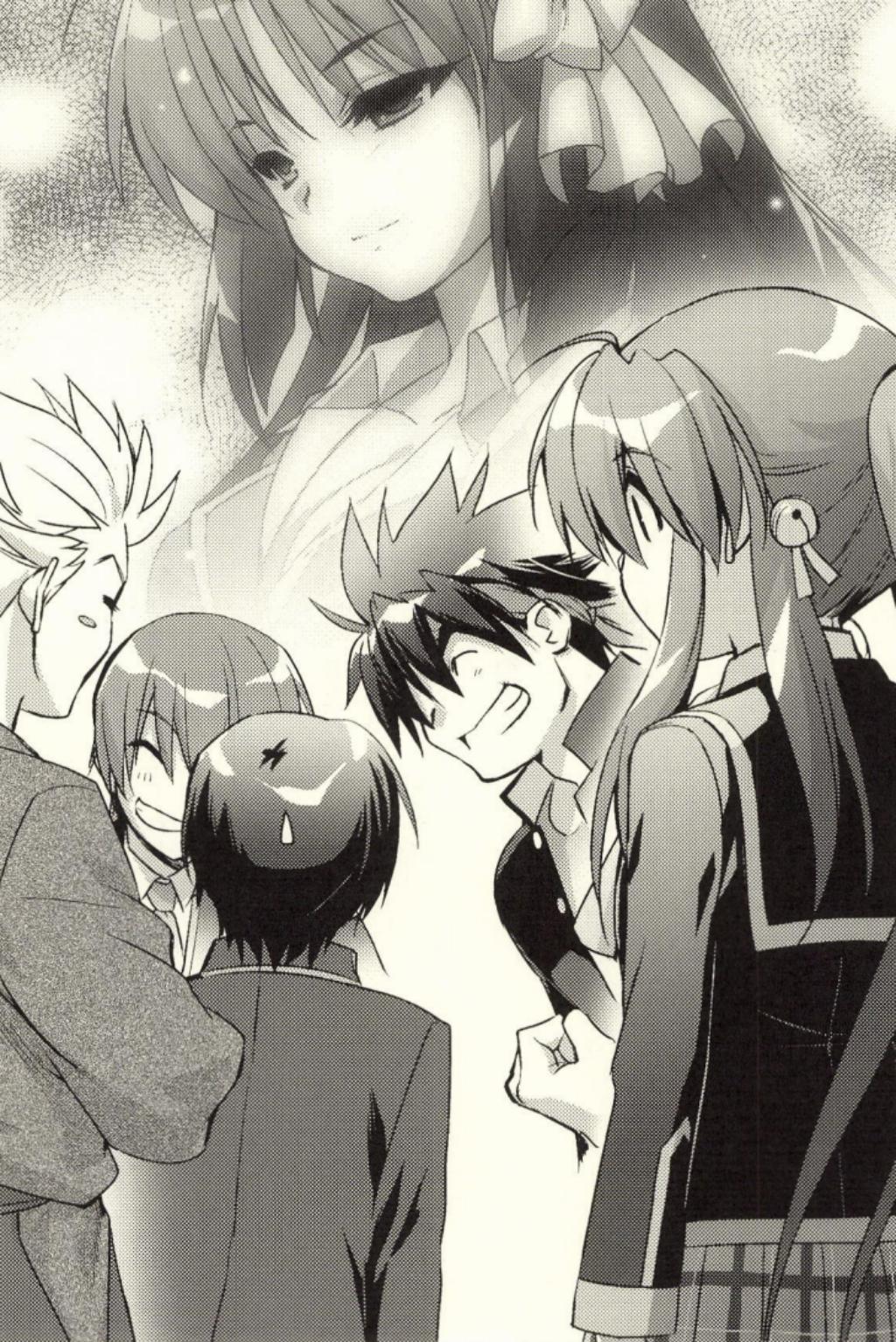
「じゃあ、謙吾ので」

「なんでだよ!?

真人と恭介は不満そですが、真人のは女性向けと言いつらく、恭介のはストレートすぎて恥

ずかしい。

「いい選択だ。俺の贈り物はスイーツだ」



謙吾が理樹に親指をたてる（あとでわかつたのだが真人の品は「ヘイ！ 親分」と書かれた茶色の湯飲み、恭介の品は「ハワイの空気」とラベルが貼られた空き瓶だつた）。

「しかも気の利いたメッセージ入りだぞ」

「よし鈴。来ヶ谷を呼んで来い」

「わかつた」

鈴は女子寮へ走つて行つた。少しして戻つてきたのだが、

「こんにちは！ みなさん、なんのおはなしですか？」

「くるがやが見当たらなかつたからこまりちゃんを呼んできた」

「ちがああああう!!」

一同慌てすぎて混乱した。理樹は持つていた箱を落としかけた。

「危ない！ 転がると台無しだぞ」

謙吾がキヤツチしてくれた。よかつた。少し揺れたが、中身は無事のようだ。

「鈴、もういい。おまえはグラウンドで小毬と遊んでこい」

「わかつた」

「??」

首をかしげる小毬の手を引き、鈴はグラウンドへ走つて行つた。  
「あせつたぜ……」

「ほう。集まつてなんの企みだ」

「うわああああ！」

気がつくとすぐそばに唯湖がいた。なんでこの人気配が無いんだ。しかし、ここは降つて湧いたチャンスもある。

「行け、理樹」

恭介が理樹の背を押した。力強い手だ。いつもそうだ。

「あ——あの。ちょっと、あつちでいいかな」

一生懸命に笑顔をつくり、理樹は唯湖と中庭へ向かつた。背中に熱い仲間の視線。

中庭には午後のまろやかな日が満ちていた。

「……これ」

このあいだも、その前の小毬さんのときも、いっぱいお世話になつたから。

「べつだん気にすることでもないがな」

苦笑したが、唯湖は箱を受け取つてくれた。

「せつかくの厚意を無下にするのもよろしくない。開けてみていいか？」

二人は近くにあつたベンチに座つた。

「う、うん」

唯湖の長い指が白い包みを開き、箱の蓋を外した。理樹は息が熱くなるくらい緊張した。

「ほう。まんじゅうか」

まんじゅう……う、うん、たしかにスイーツには違いない。箱をのぞくと四つ並んだまんじゅうの上に一文字ずつ、焼き印でアルファベットが入っていた。

L……そういえば、メッセージ入りって言つてたけど……ま、まさかL・O・V・Eツ？  
うわわわわ！

「E、V、O、L……エヴォル」

さつき落としかけて順番がずれていた一つ！

「エヴォルとはなんだ？ ブランド名か。まんじゅうのくせにエヴォルとは、無駄にかつこいいブランドだな」

「あつ、いやべつに深い意味はなくて、ただその……うん」

フツと笑つて唯湖はひとつを手にして割ると、欠片をぽいと口に入れた。

「甘い」

「あ、うん……ごめん」

「なぜ謝る。まんじゅうが甘いのは当たり前だ  
うまいぞ。と、唯湖は目を細めた。」

とりあえず……喜んでもらえたと思つていいかな。EVOLで気持ちが伝わったとは思えなわけです……。

理樹はベンチ脇の自販機で缶入りのお茶を買って唯湖に渡した。

「気が利くな」

嬉しかつた。満足して、そつと唯湖の横顔を見る。と、きれいな目に陰が浮いていた。なぜだろう。やつぱり僕、なにか失敗したんだろうか。

でも、この陰はどこかで見た。

風に唯湖の髪が揺れると、陰は流されたように消えていた。

そうだ、一瞬で消えたのも同じだつた。でも唯湖じやない。恭介の目だ。

しかし結局、ほんの一瞬横切つた陰を振り返る隙はなかつた。

「うーん。悪くないが、どうも決定的なインパクトに欠けるな」  
例によつて夕食後、「オペレーション・リトルラブハンターズ作戦」(どうでもいいが「オペレーション」と「作戦」は名前被つていると思う)の会議中。

「子どもの遊びと思われてゐるか、まつたく気づいてないのどつちかじやないか」  
たしかに、プレゼント作戦以後もあれこれと試みていたのだが、これといつた手応えは得ら

れなかつた。

「僕はもう、このままでもいいかなって思えてきたけど」

「あんだ、簡単に諦めていいのかよ」

「うーん……」

唯湖への気持ちは嘘じやない。でも理樹としては、やはり、いまの楽しい日々を続けたい気持ちのほうが勝る気がする。

「そこでだ。花火を打ち上げる」

恭介が迷いを断ち切るようにすっぱりと言つた。

「どでかい華を咲かせて散るのか」

「すでに終末思想だな……」

「違う。言葉どおりだ」

恭介は用意していたらしい大きな木箱を座の中心に置いた。中にはスイカ大の玉、それに大量の除湿剤が詰められている。

「もしかして、マジで花火なのか!?」

「ああ。以前に旅先で貰った尺玉だ。食うに困つて花火職人の手伝いをしてな」

「待て。つてことは、これは火薬の塊か?」

「炸裂するところの部屋程度は余裕で吹つ飛びぶ」

「じやあこれ爆弾そのものじやないか！」

「うわああああ、オレはスキマスイツチみたいになりたくねえ!!」

「いやいや、そんな漫画みたいにアフロには……おつと」

「落とすなあー!! んなしたらリトルバスターズじやなくなるじやねえか！」

謙吾が滑り込まなければ終わるところだつた。

「まあまあ。とにかく、こいつを夜空に打ち上げる。そいつを理樹と来ヶ谷で二人占めつてわけさ」

——この時期に花火大会なんてものはない。なかなかにロマンチックだろう。

「無茶苦茶だが、成功したらおもしろそうだな」

「花火は好きだ」

微妙な理解のまま参加しているらしい鈴がぽつりと発言した。

「だろう。女の子は、花火が好きなものなのさ」

——夜空を彩る大輪の花火を眺める時間は、もはや一人だけのもの。否が応でも気持ちは盛り上がっていく……そして二人は、花火のあとで静けさのなかで愛を語りあう。

「愛……愛……愛……とな」

「あほだな」

妹がつめたく兄につっこむ。

「でも、花火つてことは夜だよね」

「当然」

「広い場所も必要だな。それはグラウンドでどうにかなる、か……？」

「すると眺めるのは教室か。まあ、考えるとそれもオツだな」

「よし。じゃあ細かく計画を練るとしよう」

みんなの目が期待に輝いている。どう考へてもバカな企画だけど、そんなのをまじめに考えているこのときが一番ワクワクする。それは、昔からちつとも変わっていない。五人で遊んだ、あのころから。

——よし、行くぞ、りき！

——きみたちは？

——おれたちか？

——悪を成敗する正義の味方。

——人呼んで。

リトルバスターズ。

僕を救つた、僕に約束してくれた名前。僕のなによりも大切な場所。

「わかつてゐるな、理樹」

ぽんと恭介に肩を叩かれ、理樹ははつとして我に返つた。  
「この作戦の成功はおまえの告白にかかつてゐる」

「え？」

告白？

「なんて顔してんだ当たり前だろ。花火を見ながら、おまえが来ヶ谷に告白するんだ」  
……。

作戦の実行は週末に決まつた。

本当に、僕にそんなこと出来るのかな。

初めて女性を好きになつて、その相手があの来ヶ谷さんで。  
彼女を夜の校舎に呼んで、花火を見ながら告白、だなんて。

みんなで何かすることは楽しいが、自分の役割——というより果たすべき使命を考えると、  
理樹の胸は今日の空のようにモヤモヤした。

灰色の空。雨が降りそうだ。

花火の日までに晴れてくれるといいな……。

放課後を待たずに雨が降り出し、野球の練習は中止になつた。帰り支度を終えた理樹が廊下に出ると、喧噪に混じつてかすかに流れる音楽が聞こえた。ピアノの音だ。

また唯湖がこつそり放送しているのだろうか。でも。

——この音は……CDじゃないような？

滑らかさ、間合いが微妙に録音された音と違う。

不思議な音色に誘われるよう、理樹は放送室へ足を向けた。



大好評ソーシャルゲームの  
特典カードをゲットせよ!

カードミッションTOPの「各種シリアルコード入力はこちら!」より、  
以下のコードを入力してください。特典カードを受け取れます。

シリアルコード： **2299942442871351**

公式サイト <http://www.product.co.jp/social/lbcm/>

VA文庫

# リトルバスターズ！①

ぼく めい  
～僕らのチーム名～

2013年 10月30日 初版第1刷 発行

■著　　者	清水マリコ
■イラスト	ZEN
■原　　作	Key
■製　　作	株式会社パラダイム

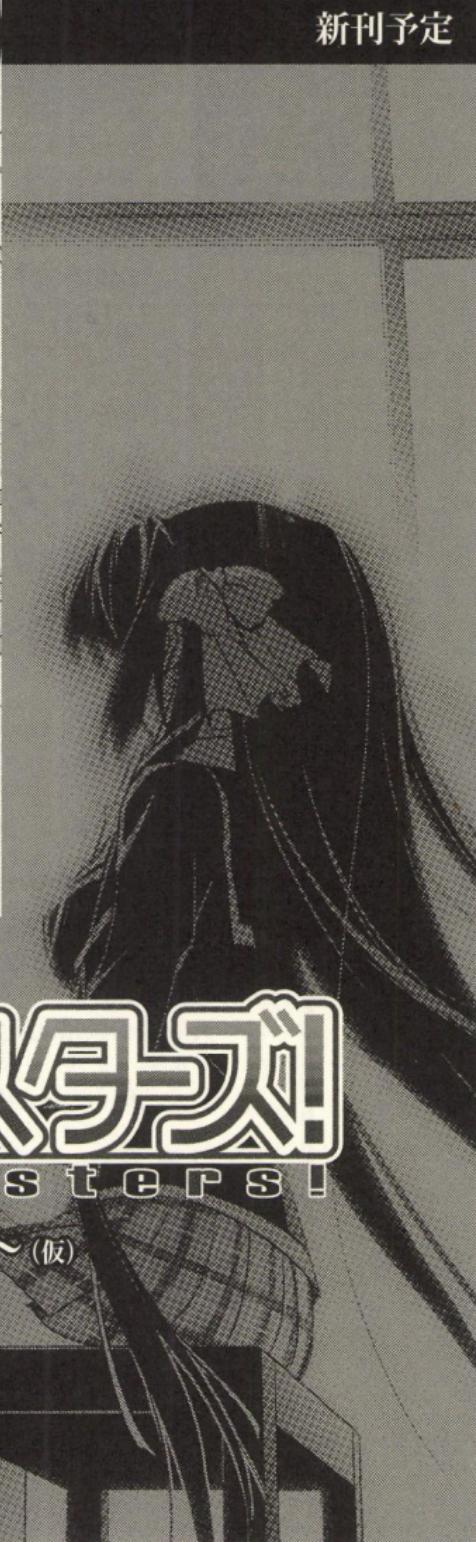
発行人：馬場隆博  
 発行元：株式会社ビジュアルアーツ  
 〒531-0073  
 大阪府大阪市北区本庄西2-12-16  
 VA第一ビル  
 TEL 06-6377-3388

印 刷 所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、  
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。  
 定価はカバーに表示しております。

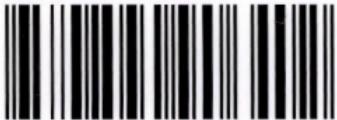
新刊予定



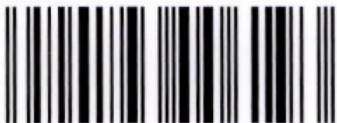
# リトルバスターズ!

②～遠い夏の日 / 世界の秘密～(仮)

今冬 発売予定



9784894906402



1920193006193

ISBN978-4-89490-640-2

C0193 ¥619E

定価：本体 619円+税

発行：ビジュアルアーツ

発売：パラダイム

## リトルバスターズ!① 僕らのチーム名

幼いころからずっと、理樹には4人の仲間がいた。年上でリーダー役の恭介と、その妹の鈴。そして真人と謙吾とは、ずっと楽しいことを共有してきた仲間、リトルバスターズ！だ。成長して同じ学園に通うようになった今でも、恭介がメンバー達をまとめ、ずっと同じように過ごしている。でも…。恭介の卒業が近づくにつれ、理樹の気持ちは少しずつ暗くなり始めていた。そんなとき恭介が突然、野球のメンバーを集めろと言い出した。次々と届く不思議なミッションもあり、理樹は鈴と一緒に新たな仲間探しを始めてみるのだが…。



